
盾の勇者の成り上がり 9
アネコユサギ
Aneko Yusagi
MFブックス


盾の勇者の成り上がり
9
アネコユサギ
Aneko Yusagi


キョウ
ラルクベルク
テリス
フィーロ
グラス
ラフタリア
風山 絆
岩谷 尚文
ヨモギ
人物紹介
盾の勇者の成り上がり 9


「運命という物があるのでしたら、
私は貴方の道を阻む為にここに居るのです！」

MFブックス

盾の勇者の成り上がり　9

アネコユサギ

目次

プロローグ　異世界の波

「ファアアアアオオオオオオ！」
次元ノガネーシャ・シャドウが雄叫びを上げながら俺へと大きな数珠のような武器を振り下ろす。
「ふん！」
その数珠を盾で受け止めてから握りしめる。
すると次元ノガネーシャ・シャドウは不快そうに更なる声を上げた。
「すげぇ……何だかんだ言って坊主は盾の勇者なんだな」
そんな俺の様子を見てラルクが戦いながら感嘆の声を上げる。
「何を言ってんだ。盾の勇者である俺が耐えなくてどうするんだ」
己の存在価値とまで言う気はないが、異世界に来た俺の戦い方は戦闘において一貫して相手の攻撃を耐えて妨害することに集約している。
まあ……例外もなくはないがな。
というのも現在、俺達は元々俺を召喚した世界ではなく、波の亀裂の先にあるもう一つの異世界へと来ている。
「気を抜いてないで戦え！　若！」
「坊主！　いい加減、俺を若と呼ぶのをやめろ！」
「知らねえな。お前が俺を坊主と呼ぶ限り、俺は若と呼ぶのをやめないぞ」
ああ、それともラルクの経歴というか雰囲気からこう呼べばいいか？
「じゃあ信長と呼んでやろう」
「い!?　坊主、キズナの嬢ちゃんが俺をそう呼んだのを知ってんのか!?」
ああ、ラルクの経歴ってやっぱ似た感じなのか。絆もなかなか言うじゃないか。
「ナオフミ様、また変なあだ名を……」
「ははは」
「笑って誤魔化さないでください！」
「じゃあはっきり言おうじゃないか。一国の王と王女にクズとビッチという改名をさせた俺がな」

「坊主……んなことしてたのか……」

「また誤解を招くようなことを……」

「事実だろ？」

「事情があるのをちゃんと説明してください」

「ま、坊主のことだから相当な奴らで、報いを受けさせたってところだな」

「勝手に察するなっての！」

こういうところを理解されると激しく虚しくなるんだよ。

まったく、なんでこんな会話をしなければならない。

ちょっと前まで敵同士だったというのに、まるで仲良しパーティーだ。

本来の目的を見失わないためにも一度整理する必要があるか。

まず俺、岩谷尚文は現代日本でオタクをしていた大学生だった。

気まぐれに行った図書館で見つけた四聖武器書という本を読んでいて、気が付いたら本の登場人物である盾の勇者として本の世界に召喚されていた。

そして、俺を召喚した国の連中は「世界を救うために、どうか力を貸してほしい」と俺に頼んできたのだ。

その後は……散々だったな。

「ラルクさんはよくナオフミ様を理解できますね」

「何だかんだでいろんな奴と知り合ってきたからな。坊主は根が悪い奴じゃねえってのはすぐにわかったぜ」

「俺は悪人だ」

「悪ぶるのが玉に瑕だけどな」

「うっせー！」

ホント、コイツは何なんだよ。

俺に対して妙に理解力のあるコイツの名前はラルク。本名はラルクベルクというらしいが、名字に当たる部分は聞いていないな。

二十代後半の経験豊富な冒険者……人を惹きつける不思議な魅力というか、大人の貫録みたいなものを持っている。

時々子供っぽいところがあるが、これも魅力に繋がるんだろうか？

服装は最初に会った時は軽装鎧だったが、俺がこの世界で再会した時は、なぜか新撰組みたいな格好になっていた。

似合ってはいるのだが、どっちが本来の格好なんだ？

まあグラスは着物だし、絆に関していえばロリータ服に羽織だからな。

アレか？　効果重視。軽装鎧よりも潜伏中に手に入れた新撰組の服の方が効果が高いとかか。

……他人の服装をとやかく言うのもアレだな。気にしないでおこう。

ともあれ、今はラルク達と共闘関係が成立している。

「とりあえず、ささっと敵を仕留めてほしいんだがな。いつまでも掴んでいる方の身になれっての」

この問答の最中、ずっと俺は次元ノガネーシャ・シャドウという魔物の動きを止めている。

周りにいる魔物の中でも大物の部類に入るだろうな。ボス……なのかはまだわからん。

攻撃自体は苛烈なのだが、割と問題なく立っていられる。

その理由には俺が召喚された時に持っていた伝説の盾が関わってくる。

この盾は俺の体から外せない、呪われた武器のようなモノだ。

様々な物や素材を吸うことで成長、変化していく。

そしてその変化した盾の能力を解放することで俺は強くなれる。

だが……盾の特性として、相手にダメージを与える手段が乏しいという欠点も兼ね備えている。

だから攻撃を担当してくれる仲間が必須である。

「ナオフミ様、行きます！」

「おう！　任せたぞ」

「はい！」

俺が掴んでいる次元ノガネーシャ・シャドウを攻撃したのは、元奴隷である亜人のラフタリアという女の子だ。

亜人っていうのは人間に似ているがどこか異なる異世界独自の人種の総称だ。

ラフタリアは、ラクーン種というタヌキのようなアライグマのような耳と尻尾を持った種族らしい。

今では頼れる相棒だ。ま、俺が親代わりとも言えるかな。

服装はラルクの勧めで巫女服を着ているが、これがよく似合う。
全て片付いても巫女服を着させ続けたいと思うほどだ。
「はあ！　瞬刀・霞一文字！」
ラフタリアが次元ノガネーシャ・シャドウの前を過りつつ、持っている刀で斬りかかる。
それだけで次元ノガネーシャ・シャドウは一刀両断されて消え去った。
「よし、次に移るぞ！　どうやら今回の波の敵は妙に強いみたいだからな」
「そうですね。私達の世界の波よりも強く感じます」
ラフタリアは数奇な運命とでもいうのか、現在、波の先にあるこの世界で刀の眷属器という武器に選ばれてしまって、刀を所持している。
これは後で説明するが、一般人よりも遥かに強くなってしまっていると考えられるな。
「ごしゅじんさま！　そっちにまた魔物が行くよー」
上空からフィーロが魔物の接近を知らせてくれる。
フィーロは馬車を引くのを喜びとする魔物の女の子だ。
元々はフィロリアルというダチョウのような魔物だ。
なぜか羽の生えた……天使のような姿の女の子に変身して俺の配下として戦っている。
戦闘能力は折り紙付きで凄く強い。外見に騙されたら痛い目に遭う筆頭だな。
だが、この世界に来た時、別の魔物の姿に変わった所為で戦闘方法に変化が生まれた。
ハミングフェーリーという、成長とともに姿が変わる魔物へと変化してしまったのだ。
フィロリアルとハミングフェーリーとでは大きく異なる特徴がある。
フィロリアルは空を飛べないが、ハミングフェーリーは空を飛べるのだ。
なので現在、上空からの偵察をフィーロに任せている。
もちろん、波から出てくる魔物がフィーロ目掛けて魔法や物を投げつけたりしているが、持ち前の回避能力の高さで全て避けきっている。
「よし！　じゃあ行くか」
「ふぇええええ――」

あ、リーシアが魔物を引き連れて俺の所へやってくる。フィーロが注意したのはコレか。
アイツはグラスと絆の方にいたと思ったんだが……。
リーシアの本名はリーシア＝アイヴィレッド。人間の女の子だ。
メルロマルクに住む没落貴族の娘らしい。
元々は勇者仲間である弓の勇者、川澄樹の仲間だったのだが、リーシアが波で活躍したことを根に持った樹が因縁を付けて仲間から追い出し、困っているところを俺が拾ったという経緯がある。
コイツは普段オドオドとしているが血筋も育ちも良い所為か、教養がある。
こう……ゲーム的な資質、ステータスでは表せない部分に能力が割り振られているようにしか見えないんだよな。
「エアストシールド！」
リーシアに飛んでいく攻撃を何もないところに盾を出すスキルで弾く。
スキルというのは勇者が使うことのできる特殊な技能だ。
「大丈夫かリーシア？」
「ふぇ!?　は、はい！」
「絆の方にいたのに、どうしたんだよ」
「ふぇええ……キズナさんとグラスさんの方に沢山の魔物がやってきてナオフミさん達を呼んでくれって頼まれたんですよぉ」
「そうか、まああっちの方が本隊だからしょうがないか」
あの二人と一緒の方がリーシアにはいい経験になると思って班分けしたんだけど、きつかったか。
俺達は波の亀裂から溢れ出る魔物から人々を避難させる役目を担当している。
今回は人里近くに波が起こったので、その仕事が増えている感じだ。
まあこれまで俺が参加した波は人里近くに起こったことの方が多いがな。
つーか三回しか参加してないし、統計的にはわからん。
で、現在、波の亀裂の方へ向かっている別働隊が、この世界……俺を召喚した世界とは異なる異世界で四聖の勇者をしている風山絆だ。
狩猟具と呼ばれる、俺を召喚した世界の四聖とは異なる聖武器の所持者でもある。

狩猟というカテゴリーなら大抵網羅している。

難点は……その性質上、動物や魔物を相手にすることに特化していて、人に対しては無力である点だな。攻撃能力の無い俺のように奥の手や制限をすり抜ける方法がないわけじゃないらしいが、やはり面倒な手順を踏む必要があるんだとか。

外見はツーサイドアップの髪型が印象的で、肩に羽織を掛け、ゴシック服を着た幼い女の子だ。

ただ、実年齢は一八歳だったか？

絆との出会いはキョウを追いかけて異世界を渡っている最中に、罠に掛かって迷い込んだ無限迷宮と呼ばれる監獄でのことだったな。

絆と協力してどうにかそこを脱出することに成功し、ついでに俺や絆を無限迷宮にぶち込んだ、絆達とは敵対している国からも脱出した。

道中で色々とあったけどな。

この世界には魂癒水というSPを回復させる薬が存在しないので、それを高値で売り払って大地の結晶と呼ばれる俺を召喚した世界の人種にとっては経験値になる鉱石を買い占めたり、ラフタリアが刀の眷属器に選ばれたのを阻止しようと追いかけてきた、腹の立つ天才術師を仕留めたりとかな。

こいつは何かキョウに匹敵する身勝手な奴だった。

完全にキャラが被って見えたぞ。この世界にはああいう奴が多いのだろうか？

どこの異世界も大変だな。

「なあラルク、絆は戦えるのか？　応援を頼んできたってのは攻撃が無理だからか？」

「ん－……そうだな。正直に言えば、わかんねえ」

シャドウと付いているからカテゴリー的には魔物と変わらないと思いたいが、この辺りは武器の判定によるんだよな。

俺の場合は、攻撃と認められないのか魔物であろうと人であろうと殴っても相手は痛くも痒くもないみたいだが……。

以前、道具ならどうだと爆弾を使おうとしたら弾かれて足元に落ちたことがある。

だが、植物型の魔物に除草剤を散布して致命的なダメージを与えることは可能だった。

俺の盾と同じく、例外として処理してくれるかどうかによるが、人型の魔物と戦えるかどうか怪しいラインなのが絆の武器なのだ。

「急いで行きましょう！　ラルク！」

「そうだな。キズナの嬢ちゃんが心配だ。テリス！　一気に決めるぜ！」

で、ラルクと息を合わせて戦っているのがテリス＝アレキサンドライトだったか。

波の亀裂の先にある世界……面倒だから以後、絆の世界とする。

絆の世界独自の人種、晶人と言うらしい。

宝石とかを核として生まれる人種で魔法が使え、手先が器用らしい。

かなり感受性の高そうな人物であるのは、俺が作った腕輪を渡した時の反応から理解できる。

ラルクと同じく、潜伏中に着ていた袴姿だ。

『遍く宝石の力よ。私の求めに応じ、顕現せよ。私の名前はテリス＝アレキサンドライト。仲間達よ、彼の者を討ち滅ぼす力となれ！』

「輝石・紅玉炎！」

「合成技！　紅玉大車輪！」

ルビーのような煌びやかな炎を宿したラルクの鎌から車輪のようなエネルギー状の攻撃が放たれて、リーシアを追いかけていた魔物達を薙ぎ払う。

スキルは仲間同士の魔法が組み合わさると合成されて特別な効果を生み出すことがある。

俺もラフタリアやフィーロと共に使ったことがある攻撃法だ。

「ほら、坊主！　行くぞ」

「勝手に仕切るなっての……まあ、行くしかないか」

「キズナの嬢ちゃんはグラスの嬢ちゃんさえいれば大抵、乗り越えられるとは思うがな」

で、次はグラスだな。

一言で表現するなら着物を着て扇を使う和風の幽霊みたいな女だな。

黒髪が映える。肌も透明感が……っていうか実際、半透明になる時があるし。

扇の眷属器という武器の所持者だ。

グラスは絆の大親友だそうで、絆に俺を殺そうとしたことを怒られた。
冷静沈着な、視線だけで虫を殺せそうなグラスが絆に説教されて、しゅん……としている姿には素で笑った。
今は一応、同盟関係にある。
俺達は急いで絆達が戦っている方へと向かった。
今回、波の亀裂から出てくる敵は……なんていうかインド神話とかに出てくるような化け物ばかりだ。
ガネーシャとかってぶっちゃければゾウ人間だろ？
他にも次元ノイフリートとかいう、ごっつい炎の精霊みたいのがいたな。次元ノナーガラージャとかいうのもいた。
人型混じりの連中ばかりだ。
言葉が通じないところを見るにカテゴリーとしては魔物扱いで、グラス達みたいな異世界の人種ってわけじゃないらしいけどさ。地味に強い。
俺が経験した波よりも数段は上の強さを持っているだろう。
ここ数日で75までＬｖを上げた挙句、盾をかなり強化しているのに、時々突破されそうになる攻撃力を持っているんだからな。
ただ……俺を召喚した世界にいた時よりも、俺自身の能力が全体的に低い。
何かしらの要素でホームとアウェー的な強さの差があるようなのだ。
それはラルク達も言っていたな。
「波の亀裂からグラスみたいな眷属器の所持者が来たんじゃないか？」
「笑えねえぞ、坊主！」
「ギャグで言ってねえよ」
と、雑談交じりに襲い来る魔物達を薙ぎ払っていると、波の亀裂が閉じるのを確認した。
上空を確認すると大きな船が爆撃をしているようだった。
空中戦も苛烈だったような気がする。
ガルーダとかもいたし……かなりの激戦だったな。
ただ、この世界の人達も戦いに参加していて、それなりに戦力として活動していたな。

「お？　終わったか」
「敵の数が多くて時間が掛かっただけか」
「まったく、坊主はホント人を驚かしやがる」
「お前等がやっていたことだろ。それくらい考えろっての」
「考えちゃいるが笑えねぇから言ってんだよ」
その笑えないことをしていたのはお前等だけどな。
「おーい」
絆がグラスを連れて俺達の方へと駆けてくる。
「応援を頼んだくせにささっと片付けやがったな」
「あー……うん。リーシアさんに尚文達を連れてきてほしいとお願いしたんだけど、結構な数の魔物達がリーシアさんを追いかけていっちゃってどうにかなっちゃった感じだね」
よくリーシアを一人で寄越したもんだ。
正直言ってリーシアはＬｖの割にものすごく弱いんだぞ？　不思議と生き残るけどさ。
「助けようとは思ったんだよ？　だけどこっちも数が多くて、リーシアさんは叫びながら走っていっちゃうし」
「はいはい」
どうせ『ふぇえええええ！』って情けない声で魔物共の注意を惹きつけていたんだろうさ。
「ラフー！」
「ふぇ!?」
今、リーシアの肩に掴まって自己主張気味に鳴いた生き物はラフちゃんという、ラフタリアの毛皮から作り出された、俺の式神だ。
つぶらな瞳にタヌキのようなアライグマのような可愛らしい外見。
ラフタリアを動物にしたらこんな感じだろう。
性格はノリが良くて俺に合わせてくれる。
が、なぜか今はリーシアの背中に乗っている。
「もしかしてラフちゃんがリーシアを守ってくれたのか？」

「ラフ！」
コクリとラフちゃんは頷く。
ラフちゃんはラフタリアと同じく幻覚の魔法を使うことができるっぽい。
魔物達はその魔法を掛けられてリーシアに攻撃を当てることができなかったんだろう。
「ラフちゃんもよくがんばったな」
「ラフー！」
「ペン！」
それに合わせて自己主張するのはクリスというペンギンだ。
こっちは絆とグラスの式神だが、見た目は完全にペンギンだな。式神という点で言えばラフちゃんの先輩だ。
「クリスもよくリーシアさんを守ってくれたね。ありがとう」
「よくがんばりましたよ」
絆とグラスがクリスを思い切り褒めている。
活躍したのはラフちゃんだ。俺は見せつけるようにラフちゃんを撫でまわした。
「ナオフミ様、どうして張り合っているんですか……それくらいにして話をしましょう」
ラフタリアに肩を掴まれてしまった。どうもラフタリアはラフちゃんを苦手にしているな。
「絆、今回の波の魔物相手に戦えたのか？」
「一応はね。神様とかと戦うのかと警戒したけど、それっぽい魔物でしかなかったみたいだからね」
ガネーシャ、イフリート、蛇の方のナーガ、半人のナーガラジャ等だな。
「ボスは何だったんだ？」
「次元ノギリメカラ……いや、モードチェンジでアイラーヴァタとかになったね」
ゾウがボスかよ。
というか渋いな。俺がオタクじゃなかったらわからないだろう。
「とりあえずは、魔物の素材を集めて城に戻ろうか」
絆が上空で待機しているエスノバルトを呼ぶ。
エスノバルトは絆の世界の、船の眷属器の所持者で、後方援護担当だ。

戦闘面は苦手らしい。
魔導師みたいな格好をした少年……と表現するのがピッタリの外見をしているが、その正体はフィーロのような魔物だ。
ウサギのような魔物だけど詳しい種類は聞いていない。
占いの技能を持っていて、俺にラフちゃんを授けてくれた奴だ。
ラフタリアを捜す指針としてラフちゃんは大いに活躍してくれたので腕は確かなのだろう。
「しかしなぜ俺はこんな世界に来てまで、波と戦っているんだ？」
「今更!?」
「別に俺は波に挑むために参加してるわけじゃない。成り行きで協力してるだけなんだからな」
「わかってるって、この世界のために戦ってくれてありがとう」
「ああはいはい。サッサと帰って、次に備えような」
まったく……この世界の連中は波を何だと思っているんだろうか？
まあ、世界各地で波は起こるから一概には言えないんだろうけどさ。
波……か。
あっちの世界に居た頃はただの災害だと思っていたが、今は少し違う。
絆の方の世界に来たお陰で知ることができた、波という現象の正体。
それは世界の融合現象であるらしい。
らしいというのはあくまでも聞いた話であって、確証があるわけじゃないからだ。
ただ絆の世界には過去の融合の記述が存在するのだとか。
これ以上の世界の融合は世界を破裂させ、滅んでしまうと伝わっているそうだ。
滅びを回避する方法として存在するのが、他の世界の四聖……聖武器の所持者を波が起こっている時に殺すと、相手の世界が滅び、自分達の世界が延命するという伝承。
だからグラスやラルクは俺を殺そうと躍起になった……ということらしい。
この話を聞いた絆が激怒して、今後は別の手段を模索することになっている。
そしてあっちの世界にいた霊亀という化け物はその波が起こらないように世界の住人の魂を犠牲にして結界を張

る能力を持っていた。
もちろん、絆の方の世界にも霊亀に匹敵する化け物が存在している。
既に討伐済みであるらしいが、こちらでは白虎とかの四聖獣、四神だと耳にした。
天才術師こと、俺が内心クズ二号と呼ぶ、この前戦った敵がその白虎を複製して兵器として運用しようとしていた。
「波にばかり意識を割いてちゃいけないだろ。俺だってずっとこの世界にいるわけじゃないんだ」
「わかってるって、オレもできる限り協力するからさ」
そうだ。俺は、俺を召喚した方の世界を滅茶苦茶にしたキョウに報いを受けさせ、霊亀の……オストの願いである奪われたエネルギーを持ち帰らなければならない。
こんな所で時間を無駄に過ごすわけにはいかないんだ。

一話　異世界の技術

「さてと……」
波に挑むまでの間にやっていたことを再開しよう。
ラルクが王……若をしている城の城下町の片隅にある工房で俺は連日作業をしている。
この国の文化……服飾はラルクに似て和洋折衷っぽい。
和風の着物を着てても洋風の鎧を着てても住民は疑問に思わないようだ。
近隣国が和風でそこから文化が流入していると教えてくれた。
俺は今、絆達の武器や防具を作成しているロミナという鍛冶師の所で、アクセサリー作りをしているのだ。
ここで作業をしていればロミナがしてくる細かい注文にも応えられるし、有事の際にはすぐに城へ行くことができる。
夜は隣町の絆の家に厄介になっているし、ここ数日だけのことを考えれば割と有意義な日々を過ごしていた。
ラフタリア、リーシア、フィーロは現在、城でラルク達と訓練をしている。

ラフちゃんとテリスは俺が作業をしているのを興味津々に見ているところだ。
色々と突っ込みたい相手がいるんだけどできる限り無視することにした。
若干馴染みすぎている気もするが、今できることをするしかない。
「とりあえず今後のことなんだけどさ」
グラスを連れた絆が、ロミナに波で倒した魔物共の素材で武器防具の作製を依頼している。
それが終わると作業中の俺に今後の作戦に関して話すつもりのようだ。
「そういや確認してないことがあったな」
「何？」
「高頻度で波が起こるなら、どうやって対処してるんだ？」
「ああ、それならグラスから聞いてるよ」
「ええ、その点に関しては抜かりはありません」
「で？　どうしているんだ？」
「ロミナ、アレはここにありますか？」
「あるよ。注文の多い道具だからね」
と、ロミナが取り出したのは大きな宝石がぶら下がったネックレス？
いろんなデザインがあるみたいだが、どれにも大きな宝石が付いてる。
水晶か何かか？　中に淡く光が宿っている。
「これは波が発生した時に、その現場へ使用者を転送する機能を持った道具です」
「へぇ……ずいぶん凄い物があるんだな」
絆の世界は勇者の武器の機能に関しての研究がずいぶんと進んでいるらしい。
倒した魔物を武器に収めてドロップを確認するという、俺の世界じゃ勇者にしかできないことが再現されている。
取り出すには専用の施設や龍刻の砂時計を利用する必要があるけど、十分優秀な技術だ。
「まあね。晶人が再現したものらしい」
「ふむ……で？」
「後はこれを使ってオレの仲間が世界各地の波に挑んで鎮めてるってところみたいだよ」

「有能な仲間が揃ってんだな」

絆は波が起こるよりも前に召喚され、いろんな冒険の果てに脱出不可能な迷宮に閉じ込められていたらしいからな。顔も色々と広くて仲間も豊富なのだろう。

「というか……オレの知り合いが商品化して、波に冒険者が挑むように差し向けてもいるらしいけどね」

「世界のためってやつか？　高尚な連中がいるもんだな」

俺の世界でも似たようなことをしてくれると助かるんだけどな。

一応、カルミラ島で冒険者を募ったけど結局は勇者なしじゃ厳しい。

「波から出てくる特別な魔物の素材とかが目当てで、結構参加する人が多いらしい」

「あー……なるほどな」

新技術や未知の素材を獲得できるのであれば、そりゃあ一攫千金を狙うような連中は危険であろうとも参加する。だからか、妙に戦い慣れした連中がいたような気がしたのは。

「羨ましいな」

俺の方の世界は波に関して知らないことも多いし、参加している連中も少なめだ。

現地で運悪く波に遭遇した冒険者がどうにか対処する程度で、かなり後手に回っている。

勇者が参加していない場合は勝手に閉じることがあるらしいが、考えてみればそれは相手の世界が対処して閉じさせたと見ていいんじゃないか？

確かめる方法はないわけじゃないが、相手の世界と話し合いとかいってもな……。

知らないから攻めてこないだけかもしれないし、下手な干渉は危険だな。

とりあえず、勇者以外を波に参加させる道具があるなら俺も欲しい。

この世界でやることを片付けた後、元の世界へ戻った時に使える。

量産すれば高く売れるのはもとより、俺の仕事自体が楽になる。

「できれば譲ってほしいな」

俺の意図を察したのか絆とロミナが頷く。

「尚文も好きだねー」

「アルトも似たような顔をしてたよ」

これをあっちで売る方向で理解されてるのか。お前等は俺をどんだけ守銭奴だと思ってんだ。

「俺の方の四聖や七星勇者と呼ばれる連中は波に対してやる気があるかどうかわからないからな」

俺以外の四聖勇者は他人を出し抜くことにばかり知恵を絞っていて、出し抜かれたと察した瞬間、チートチート騒いでいた。

波に関してもゲーム感覚だったし、覇気がない。

結局、二度目の波のボスにも苦戦していたし、この先どうなるかわかったもんじゃない。

その負担は伝説のフィロリアルのフィトリアに被さっていて、そのフィトリアは世界中の波を鎮めるのに忙しいみたいだからな。

俺が抜けた穴はどうなっているやら……。

七星勇者と呼ばれる連中がいるらしいが、顔を合わせたこともない。

どんな連中かは知らないが、準備はしておくべきだろう。

少しでも負担を軽減できる方法があるなら、入手しておくことに越したことはない。

「ああ、そうそう！　グラスと話をした結果、わかったことがあるよ」

「なんだ？」

「オレが波に参加したお陰か、今回の地域で次の波が来る周期が遅くなったんだってさ」

「ほう……」

そういや絆が言ってたな。四聖は波に参加することに意味があると。

絆の世界では波で相手の世界の四聖を全て殺すと世界が延命するという伝承がある。だけど対人攻撃能力の無い四聖である絆にとって波に参加するメリットは全くといっていいほどない。

上手く参加しないように登録を変えて……いや、最悪波に参加しなくてもいい無限迷宮にでも閉じこもっていればいいんだ。

この矛盾について一つの答えが提示されたのか。

それが、四聖が波に参加すると、次の波が襲来するまでの期間が延びるということなのか。

良い仮説を聞いたな。後はもっとケースを増やして確証を得るだけでいい。

「しかし、冒険者がやる気で波に参加してるなら、波を鎮めるのはこの世界じゃ案外楽なんじゃないのか？」

と、そこに俺達以外の奴が工房の扉から入ってきて言ってきた。
「そういうわけでもないんだけどね」
振り向くと、金髪を一本結びにして肩の方に回した……男？　が立っていた。
顔の作りは西洋系でかなり整っている。
若干槍の勇者である北村元康に雰囲気が似ているような気もするが、こっちの方が爽やか系だ。
というか上位互換？　元康よりも落ちついていると思う。
元康は女、女と口だけでなく態度でもうるさいが、そういう部分がない。
絆の知り合いか？　絆自身も顔が良いが、どうも美男美女が揃ってんな。
服装からして商人か？　上質なのに、地味な服を着ている。
「アルト！」
絆が立ち上がって商人っぽい奴に抱きつく。
名前はアルトというらしい。本名か愛称かは知らん。
「キズナが帰ってきたっていうからね。商談を切りあげて会いに来たよ」
「久しぶりだなー、そっちはどうだい？」
「商人相手にその台詞は無意味だな」
ぼちぼちという返答しかないだろ。
古来から商人は相手に儲かっている、などとは言わない。
するとしたら、せいぜい儲け話を持ち掛ける時くらいだ。それも言わば賭けだしな。
いや、自分は儲かっていると客に見せて、集客のために使うという手もあるのか？
「へぇ……噂には聞いてたけど、異界の四聖がやり手の商人だってのは本当みたいだね」
視線がぶつかって火花が散るのがわかる。
本能的な部分でコイツは商人として信用できると同時に、人としては信用できない相手であると俺は悟った。時と場合によっては平然と裏切るタイプだ。
だが、金に関しては絶対に裏切らない。
というか、コイツがアルトって奴か。

「彼はアルトレーゼ。通称アルトってみんな呼んでいるよ。オレとはよく一緒に商売をした間柄の商人だよ」
「僕は取り扱えるモノなら何でも扱うよ。最近じゃ、情報が一番売れるけどね」
奴隷商みたいな奴だったら全力疾走で逃げるつもりだったが、まだ対処ができそうな奴でよかった。まあ見たまんまの性格ならば、の話だがな。

「ここは異なる世界で四聖の盾の勇者をしている岩谷尚文だ」

しかし、一人称が僕の奴か。なんとなく樹を彷彿とさせるが、コイツの内面はどんなものかな？

商人をしている奴があそこまで称賛欲求と正義感を持ってはいないだろう。

金銭という共通の判断基準がある分、わかり合える人種だとは思う。

「なに安心したような目をしてんの？」

「アルト相手にそんな目をした人物は初めてです」

絆とグラスが首を傾げている。そんなに不思議な光景か？

「まともそうな相手だからな。俺のところの商人共はこんなんじゃないぞ」

「尚文がそんなにまで言うって……アルトだってかなりのやり手なんだよ？」

「見た目によらないってのなら俺の見立て違いかもしれないな。よし、じゃあ俺のところの商人の相手をする時の目をしてやろう」

カッと目力を込めてアルトを見てやる。人によっては光って見えるんじゃないか？

すると、何やら焦ったように視線を逸らされたぞ。

上手いといえば上手いが、相手に自分の内面を悟られないよう間違って認識させる技術を習得していないんじゃないか？　これすらも演技だったらなかなかの逸材だが。

「で？　さっきの波に冒険者が参加するから楽じゃないかって話に、なんかおかしいところでもあるのか？」

「ああ、そうだね。一応、やる気を見せている者は確かにいるんだけど、それだけで全てが上手くいくわけじゃないんだよ」

「そりゃあそうだろ。冒険者は勇者や眷属器の所持者よりも基本的には下だろうしな」

「そういう意味じゃなくて、国とかその辺りでの話さ。他にもあるけどね」

どういう意味だ？　推理するには判断材料が足りないな。

絆も首を傾げているぞ。

あ、グラスは知っているみたいだな。

ん？　グラス……あと、絆達はやる気だけど、他の国の連中……この前倒したクズ二号や本の眷属器の所持者であるキョウ……そこから推理して導ける結論をぶつけてみるか。



俺を出し抜いて霊亀に挑もうとしていたみたいだし。

「挙句、自分達を拘束するなと使命を放棄して逃げ出したそうです。今ではどこで何をしているのか……」

「グラス達が止めたわけじゃないのな」

「関係が遠い国で、しかも外交の問題などもあり疎遠だったんですよ。止める間もありません」

「ま、どこら辺にいるのかはわかるんだけどね。無理に四聖に干渉しようものなら抵抗されるのはもとよりつけ込まれかねないんだよ。四聖を取り込もうとしてるってね」

アルトがやれやれとばかりに手を広げて愚痴る。

どこの世界も似たような状況なんだな。世界をゲームと認識して遊んでるのか。

その点で言えば俺を召喚した方の世界は穏便な方だな。

いや、メルロマルクの女王が交渉術でどうにかしているのか？

なんか意外と凄い奴に見えてきたぞ。

四聖を全員抱え込んでいるにもかかわらず戦争を回避した手腕は確かに凄いんじゃないか？

「尚文達の方の異世界での話を参考にすると四聖同士は仲良くしないといけないし、死なせないようにがんばらないとね」

「お互い、大変だな」

そう、四聖が死ぬと波が厳しくなる。

俺にこの情報を提供したのはフィトリアだ。絆達にもこの話はしている。

一応は、絆達の方の世界にもあてはまる話なので、情報の統合はできたと見ていいだろうな。

今は絆達の世界に来ているから保留しているが、俺が担当する世界でも……三勇者共と力を合わせないといけない。

間抜けにもキョウに捕らえられて霊亀の苗床にされていた奴等をな。

「後は眷属器の所持者達は覇権争いに躍起になってるところかな」

なるほど……素材目当てで敵国の波に参加する活発な冒険者はいても、その代表にならねばならない四聖や眷属器の所持者はやる気を見せていないということか。

強化方法の共有とかはできていないだろうからそこまで……いや、キョウはかなり強かったな。

「敵国の眷属器の所持者とかが波に対してやる気を見せていない、とかか？」

「おお凄いね、正解だよ。正確にはやる気を見せていないのはキズナ以外の四聖や、こっちの同盟で抱え込んでいる眷属器の所持者以外の話だけどね」

「オレ以外にも聖武器の所持者が現れたんだ⁉」

「ええ、ずいぶん前に召喚自体はされましたよ」

グラスの顔色が悪いな。あんまり良い話じゃないんだろう。俺も他人事じゃないが。

元の世界に戻った時に、あの馬鹿勇者共をどうやって説得するか考えると気が重い。

「私も一度だけ会ったことがあるのですが……」

「どんな奴等だったんだ？」

「波をあっぷでーとなどという訳のわからないことを言ってまして、戦いはするけど真剣に取り組んでくれないのです」

「アップデートって……ネットゲームとかを修正パッチした時の用語だよね？」

「そいつが俺達と同じ日本人ならそうだろうな。というかどこも似たようなもんなんだな……」

「ということはナオフミの方もですか」

何か激しくグラスに同情した。

絆が唯一まともな四聖だったのね。そういう意味では俺は運が良いのか？

「え？　なんでグラスと尚文が共感してんの？」

「絆も意味はわかるんじゃないか？」

「アップデートね。ずいぶんゲーム的な発想だね。命のやり取りをするのに……」

「ステータスや強化とかがあるんだから、わからなくもないがな」

俺だって時々勘違いしそうになる。

ゲーム的な要素で強くはなれるが実戦じゃどうなるかわかったもんじゃない。

ゲームでは勝てるはず、とかいって技術を蔑ろにしたら勝てる相手にも勝てないし。

「俺のところの四聖も似たような発想の連中だからな」

あいつ等もそう思っている可能性はゼロじゃないな。

Ｌｖを上げてステータスとかで誤魔化しているのか、それとも何かしらの要素で強いのかわからないが、グラス達も眷属器の所持者を倒すのに手を焼いているわけか。
「キズナの仲間達が各地に散って冒険者を誘導してどうにか対処してる段階だよ。一応波に対処できていると考えて国もそこまで事態を重く見てないからね」
他国の首脳陣や眷属器の所持者、四聖が波を軽視している状況か。
「オレが知ってる時よりも魔物の強さが上がってるし、経験値も増えてるけどね」
「だから国力の増強をしやすくなったとかメリットの方しか見てないのさ。世界が滅ぶなんておとぎ話だとばかりにね」
「で？　アルトがオレのところにやってきたのは何か理由があるんでしょ？」
「ただ、会いに来ただけだとは思わないのかい？」
「まさか……アルトに限ってそれはないでしょ」
信用が無いのな。ま、俺も奴隷商相手には似たような態度を取るな。
「とある国で魂癒水というアイテムを販売した冒険者の話を耳にしてね。他にも変わったアイテムを持っているんじゃないかと思って会いに来たんだよ」
さすがは情報通ということか。
魂癒水を売りつけた出来事を耳にして、それが誰だか特定して会いに来たわけだ。
相手が俺じゃなかったら騙せるかもしれないが、俺相手に魂癒水や他の道具を奪えると思わないことだぞ？
「で？　その魂癒水を取り扱っているのはナオフミでいいのかい？」
「ああ、だが製造法も商品自体もお前にやるつもりはない」
作り方自体は本で読んでいるから実は知っている。
道具もこの国にはありそうだし、材料さえあれば作れなくはない。
ま、盾で作ることができるから最近は自作してないけど。
「取りつく島もなさそうだね。ここまで即答でハッキリと言われたのは久しぶりだよ」
「交渉事は得意だからな。魂癒水に匹敵する何かを俺に出さなきゃ教える気もない」
「尚文、気を付けないといけないよ。アルトは金のためならなんだってする奴なんだ」

「そのくせ、ずいぶん親しげに見えたが？」
「キズナはまだ利用価値があるからね。裏切るにはデメリットの方が多いんだよ」
ドライな関係だな。
こういう奴は俺の得意分野だ。掌で踊らせていいように利用するのも悪くはないぞ。
おや？　アルトが鳥肌を立てている。勘は良さそうだ。
「そもそも金のために何でも利用する相手に魂癒水の製造方法を教えたら自分の首が絞まるだろ」
魂癒水はグラスの種族、スピリットを一時的にだが爆発的に強化させる効果がある。
Ｌｖの概念がエネルギーに該当するスピリットは強くなるんだと。
ちなみに魂癒水は俺や絆、眷属器の所持者が服用するとＳＰが回復する。
が、スピリットはエネルギーが回復するという効果に変化する。
そんな薬が世界中に流通してみろ、スピリットがとんでもなく強くなるだろ。戦争になりかねん。
安易に教えるものじゃないな。教えるにしても釣り合う情報や物が必要だ。
と、俺は絆に視線で応じる。絆の方も理解したのかコクリと頷いた。
「そのようだね。ナオフミから聞き出すよりもラルクやグラスから聞いた方がよさそうだよ」
「絶対に教えませんよ！」
「上手くいけば技術の発展に繋がると思うんだけどね。更に凝縮した魂癒水とかさ」
「……絶対に教えませんよ」
今の間はなんだよ。というか、それしか言えないのか。
「グラス、強くなりたいからといって口を滑らせちゃいけないよ」
絆に注意されてグラスは何度も頷く。下手すると喋るぞこれは。
グラスはあんまり付き合いは長くないがクソ真面目っぽいからいいカモだな。
「アルト、君は数日でその魂癒水を一個四金判で売ることができる？　尚文はハッタリでやり遂げたんだけど」
「できないと僕が言うと思うかい？」
「商人に言うことじゃないな。不可能なんて言ったら信用をなくすぞ」
絆も人に商売を持ちかけるのは好きでも、実際に売る立場にいるわけじゃないんだな。

商人は大抵、ハッタリでもなんでもできることを全てやって金を得る。できないことでもできるように見せかけて相手に自分を大きく見せなきゃ信用なんて得られない。

まあ、俺はできないことはそれとなく話を逸らすけどさ。

こういう質問に対しては、できると断言しておくに決まってるだろ。

「じゃあどっちが上か、ロミナに何か作ってもらって値下げ合戦とかすればわかるかな？」

「やめてくれ！　家の工房が潰れる！」

あ、ロミナが露骨に嫌そうな顔をした。

鍛冶師だからな。商人の怖さをその身で知っているんだろう。

俺が本気で値切ったら底値を割り込むぞ？

武器屋の親父だって俺とは最低限の金で仕事をするしかないと察したんだしな。

「まあいいや。他にも用事があったんだしね。キズナ、君は他世界の四聖を特定する道具の開発すら中止させたようだけど、本当にそれで世界を守れると思っているのか？」

アルトが先ほどよりも若干、詰問気味に絆に向かって尋ねる。

そんな道具の開発までさせていたのか。もしも完成していたら三勇者共は間違いなく殺されていたな。

「うん。オレはそんな真似を絶対に認めないし、何かしらの手段が見つかるまで待つつもりだよ」

「かといって君以外の四聖がやる気を見せない中、どうやって世界を滅びから救うつもりなのかな？」

「他世界を滅ぼすことで救われる世界なんて最初からない方がいい……と言うつもりはないけど、他の可能性を模索しないのは悪いことだと思ってる」

「なるほど、キズナらしいね」

「その顔は何かあるんじゃないの？」

「ご明察。だからこそ会いに来たんだしね」

アルトは本を数冊取り出して、俺達に見せる。内容が同じところをみると写本っぽいな。

「迷宮古代図書館で見つかった文献だよ」

俺はアルトが差し出した本のページを見る。

所々に挿絵っぽいものがあるのだが、波のような絵が描かれている。

聖武器や眷属器っぽい光が人の周りに漂っていて、二つの世界がぶつかり合っているような構図になっている。

そして……ランプの魔人みたいな魔物っぽいやつや天使、これはフィロリアルか？　……顔のわからない光みたいな人が描かれていて、世界に手を伸ばすような演出がある。

挿絵だけだと判別不可能だな。ただ、異なる世界同士の争い、勇者同士の戦いをしているように見えるが、途中で必ず握手をしている。絆が望む情報が書かれている可能性は十分あるだろう。

「ずいぶんと古代の文字だし、暗号化までされて解読には時間が掛かりそうなんだけど、キズナに仲間達からのプレゼントだよ」

「おお！」

「有能な仲間がいるんだな？」

「つい最近になって見つかった本だよ。キズナが帰ってこなきゃお蔵入りしてたかもね」

「上手く解読すればいい収穫になりそうだな」

「まあね。それで？　戦争の方はどうするつもりだい？」

「あんまりしたくはないけど、相手が譲る気はないようだからやるしかないね」

そう、俺達は現在、キョウの所属する国と戦争をする準備をしている最中だった。

当初、絆とラルクが先頭に立って、キョウの所属する国へ異議を申し立てたのだが、奴等はキョウを差し出すのを拒否した。

挙句、俺達がバラバラになった仲間達と合流している間に近隣の国を吸収していたのだ。

鏡の眷属器の所持者がいる国やクズ二号がいた国も俺達が脱出するのとほぼ同時期に占領された……らしい。

現在、戦争に乗り出さんとしているキョウのいる国と睨み合いをしている最中だ。

戦争にはそれなりの準備がいる。

本格的に戦争が始まる前の準備を俺達はしている、というのが現状なのだ。

秘密裏に侵入してキョウに報いを受けさせる作戦もあったのだが、相手も一筋縄ではいかない。

居場所もわからないしな。それに潜伏している間に国が落とされたじゃ笑えない。

なら戦争で勝って相手を黙らせるべき。だから準備中だ。

居場所がわかるならサクッと仕留めた方が早いだろうが。

「ナオフミさん！　よそ見しながらではこの子達に失礼ですよ！」
「ラフ!?」
テリスが俺のアクセサリー作りに口出しをしてきた。
いきなり大きな声を出すな。ラフちゃんが驚いているじゃないか。
「うっさい。お前はラルクの方にでも行っていろ！」
「そうはいかないわ。ナオフミさんの手で生み出される奇跡をこの目で見なきゃ私が満足できません！」
そう、テリスが俺の作業の謎の監督をしているのだ。
「……尚文、作業に関してはどう？」
絆達もなんか俺の作っているアクセサリーをキラキラとした目で見つめてくる。
なんなんだよお前等は！　というかこんな所で会議してたのはこれが目的か！
「魔力付与は専門の奴に任せるとして、大体はな」
ラフタリアの鞘とか、俺の盾の宝石部分に被せるキャップを作るつもりが、絆はルアー、グラスは扇の飾り、ラルクは羽飾りを当たり前のように頼んできたんだよな。
そんな仲じゃないだろうに……まったく。
持ち寄った宝石を加工して一応はシャレた感じに作ったが……どんな効果があるのか見当もつかない。
どうも勇者の武器はアクセサリーを付けると特別な効果を発揮するらしい。
これは強化方法の共有ができない俺や絆でも共通することだ。
基礎的な……鎧を装備するとかに該当するものなのだろう。強化とはある意味別の項目だ。
で、実験として俺がアクセサリー作りをしてラルクの国の付与師が付与を試す。
それから着用してみようって話なんだが……。
「ラフタリアのは先に完成したし、リーシアならその本を解読できるかもしれない。試しに持っていくか」
「結構面白かったよ。その鞘作りはさ」
「まあな」
ラフタリアの武器である刀の鞘を絆の友人のロミナと一緒に作ったのだ。
鞘自体には希少な鉱石を使い、差し入れ口の下にカッコよく宝石を埋め込んである。

鞘の真ん中辺りに家紋みたいに埋め込むか悩んだがな。
こっちにはラフちゃんの顔でも描きこもうとしてラフタリアに怒られたから無地にしてある。
塗りはロミナに任せた。
この鞘にラフタリアの持っている刀の眷属器を入れたら、刀に負けないくらい豪華に見えるだろう。
俺の方は過去に武器屋の親父が作ってくれたアクセサリーを模して作った、盾の宝石部分に付けるキャップだ。
どんな効果があるかは付けてみてのお楽しみだな。
「ほい。絆、お前がご所望のルアーだ。後で付与師に付与してもらえよ」
「おお！」
絆にはこってこての宝石でキラキラと光る派手なルアーを作った。
「これはミノーかな？　それともポッパーかな？　クランクベイト？」
「知らねえよ。それっぽく作っただけなんだから」
「いやー！　楽しみでしょうがない！」
ついでにグラスにも飾りを渡しておく。
扇の下に吊るす紐みたいなやつな。糸に宝石を通してある。
おい……お前も顔をほころばせるなよ、気持ち悪い。
「絆と同じく付与してもらっておけよ」
「わかりました」
「ああ……良い仕事を見せてもらいました」
そんな光景に、テリスが感極まったみたいに手を合わせてうっとりしてる。
やっぱ気持ち悪いなこの女。ラルクは好きらしいが理解できん。
「確かにアクセサリー作りの腕は良いよ。私も近くで見てたけど驚いたよ。宝石の加工とか結構難しいのにさ」
「まあ……あっちの世界でうるさい奴に教わったからな」
ずいぶん前だが、アクセサリー商に教わった技術だ。
別段難しいと思わないし、盾の補正も入って品質が向上するから苦労は感じない。
だが、器用に見えるらしい。

「絆、お前も自作すればできるだろ。四聖の武器で似た技能があるはずなんだから」
「そうなんだけどさー、やっぱ誰かに作ってもらった方が嬉しいじゃないか」
「別にこれはプレゼントじゃねーよ。というか後で絶対に覚えろよ。俺がいなくなったらお前が作る側なんださ」
「キズナ、ナオフミさんに匹敵するものを作ってくださいね」
なぜかテリスが絆に命令している。
テリスの凄く熱い目線に、テンションが高ぶっていた絆は我に返ったのか、テリスから視線を逸らした。
「何かとても楽しそうにしているね。僕も見ていて楽しいよ」
それをなぜかアルトが笑って見ている。
振り返れば楽しい日々の一ページってか？
まったく……なんでも楽しい思い出にしてしまう連中に毒気が抜かれるな。
そういうのは日常アニメの中だけにしてもらいたいもんだ。
「さて、じゃあラフタリアにこれを送り届けるとするか。ロミナ、俺が依頼した防具の方はどうだ？」
「今、解析中。決戦前にはどうにかするよ」
「期待せずに待っている。さて、じゃあ城の方へ行くか」
俺達は鞘を持って、城で訓練しているラフタリア達のもとへ向かうのだった。

二話　居合い斬り

その後、アルトは城で業務をしているラルクのもとへ話しに行くと言って俺達と別れた。
「経過はどうだ？」
俺達は城の庭の方へ……って、メルロマルクとやってることが変わっていないが、ラフタリア達は稽古をしていた。
異なる世界に来ても訓練とか、休む暇はないな。

時間があればここでリーシアも一緒に訓練をしている。
「なかなか上々だと思いますよ」
「ほう、自信があるようだな」
「はい」
ラフタリアは刀の眷属器に選ばれてしまったからか、逃亡生活中もラルクやグラスに稽古をつけてもらっていたらしい。
俺は逃亡生活中はＬｖ上げと金稼ぎ以外、碌に稽古していなかったな。
何か差が生じたら嫌だな……。
「今、リーシアさんに私が習得した気の使い方を教えているところなんですよ」
……うん。既にラフタリアにいろんなところで抜かれてしまった気がする。
「一応確認したいのだが、まさか変幻無双流のババアが言ってたアレか？」
「あ、はい。何かいけないことをしましたか？」
「いいや……」
「まあいい。リーシアとフィーロは……」
「ふぇ⁉」
俺がリーシアの方を見ると、リーシアは挙動不審になってキョロキョロする。
からかったりしたか？　どうも俺を苦手としているのか落ちつきがないな。
「フィーロはー？」
「そうそう、ナオフミ様、フィーロなんですけど気を使いこなしているんじゃないかと思います」
「どういうことだ？」
ラフタリアがフィーロに顔を向ける。
「フィーロ」
「なーに？」
「フィトリアさんから教わった力の使い方をここでやってみてください」
「えー……フィーロ疲れるから、やー」

どうも世界を渡った影響か、フィーロの奴、スタミナが減ったような印象を受けるな。疲れやすくなったというか。
その代わり飛べるし、魔法をメインにした戦い方をするようになっているけど。
「とにかくやってください。ナオフミ様が褒めてくれますよ」
「わかったー！」
フィーロがハッと構えて、何やら力を入れているようだった。
別に褒めるとは言っていないんだが……。まあいいか。
そういや、フィトリアに戦い方を教わってからずいぶん動きが良くなったもんな。攻撃も鋭くなった気はしていた。
「ふー……フィーロ疲れたから、力を溜めるねー」
今度は辺りの魔力を集める構えをしている。
霊亀の心臓と戦った時に使った技だな。
「グラスさんの方にも気の概念に似た技術があるみたいで、情報交換をしましたよ」
「ええ、私の知る流派に似た要素……プラーナと呼ばれる力を集めて力を増したり、エネルギーを温存したりする技術があります」
似た技術か。ババアの言っていた理屈がどこまで合っているかわからないのがネックだな。
「ただ、さすがにあそこまで応用が利いて強力なものは見たことがない。私もぜひ、習得したいとラフタリアさんと一緒に日々鍛錬をしています」
グラスは今よりも強くなるのか……教えたくないぞ。
しかもラフタリアの助言で気を見るとかはできるようになってしまったらしい。どんだけ才能があるんだか。
フィーロを見て分析してる。
「どうやらこの子には天性の才能があると思いますよ」
「これも気なのか」
考えてみればフィーロにはリーシアの相手をしてもらっていたから、ババアにはよく見てもらっていない。いや、ババアもフィーロには教える必要はないとか言っていたような覚えがある。

こういうことだったのか。
「おそらく……ただ、ムラがあると言いますか、もっと練り上げることで更に技術の向上ができると思いますよ」
「だそうだ。がんばれよ」
「はーい！」
で、再度リーシアに目を向ける。
「ラフタリア、グラス。リーシアはどうなんだ？」
「……あんまり芳しくはないです」
ああ、やっぱりか。一応は本人も努力はしているが、まだ開花していないのかな。
「あのババア曰く、ずば抜けた才能が眠っているらしいけどな。片鱗を見せる時はあるし、期待はしているが」
「ふぇええ……」
できるならグラスが教えてやってほしいな。
「彼女に才能……ですか？」
グラスがマジマジと見つめている。
「見たところ、他の人よりも基礎のプラーナが少ないように見受けられますが……」
「才能が無いってことか？」
「ナオフミ様、もう少し婉曲にお願いします」
いや、リーシアって戦闘よりも他の才能があるし……でも時々覚醒したみたいな活躍をするんだが、その説明ができないぞ。
「いえ、そうではなく……説明が難しいですね。才能自体はナオフミの言う通りあると思います」
「どうもあやふやな説明だな」
「オレもよくわからないな。どういうことなの？」
グラスが唸りながら答える。
「なんといいますか、私も彼女が目に見えて強くなる瞬間を目撃しているのでわかりはするのですよ」
「ふむ……」
「具体的に説明すると、先ほどフィーロさんがしていたように、プラーナを外から補充することで体内の基礎プラ

ーナの代わりに循環させているということになるのですが。あ、これは私独自の分析なので――」

と、何やらグラスがペラペラと説明を始める。

正直、専門用語が多すぎて空返事することしかできない。

とりあえず、リーシアは人が本来持ち合わせている気が極端に少なくて、それを補うように外からの気を補充することで能力が上がるらしい。

命力水を服用した時も似たような現象が発生したもんな。制御は失敗したけど。

で、グラスの目から見ると、キョウ相手にキレたリーシアが善戦したのは感情の高ぶりで上手く力をコントロールできていたためらしい。

「つまりリーシアは努力すれば伸びるのか？」

「そうなりますね」

「纏めると、長く話したのがバカバカしくなる結果になっちゃうね」

「言うなよ。虚しいだろ」

見ろよ、絆。グラスの頬が引きつってるぞ。

しかし……一応は才能が眠っているとグラスも言うのだから確かなのだろう。

俺としてはリーシアの才能は知識の面でこそ輝くと思うんだがな。

「羨ましい話ですね」

そこに入り込んでくるのはエスノバルトだ。

なんだ？　なんでお前が反応するわけ？

まあ、考えてみればコイツは後方援護担当で、眷属器の所持者の割にあんまり強く見えない。

ポツリと呟いたエスノバルトの言葉に絆やグラスがなぜかトーンダウンする。

「どうしたんだ？」

「あー……尚文はエスノバルトがなんで前線に出ないのかを知らないんだね」

「そうだな」

考えてみれば後方援護担当とかいって、グラス達の捜索時にも付いてこなかった。

知識や魔法の担当で、船は単純な移動手段だと思っていたが違うのか？

……そういえば波での戦いでも殆ど戦っていない気がする。

楽してる……とは何か違うな。

そもそも眷属器の所持者は戦う義務があるはずなのに、戦っていないように見える。

本人も戦いをできる限り避けようとしているし、周りも追及していない。

何か理由でもあるのだろうか？

例えば船の眷属器は俺や絆のように攻撃能力に難があるとか？

「ワタシの種族は……Ｌｖによる補正を殆ど受けないのです」

はい？

俺は無言でエスノバルトを見る。

その後、リーシアに視線を向けるが誰も気付いちゃいない。

「そうなんだよね。最初はエスノバルトもオレ達と一緒に冒険をしてたんだよ。その途中でＬｖも十分に上がったんだけど……」

「キズナ達のステータスを聞いて驚きました。ワタシがどれだけＬｖを上げても、ステータスは微々たるものしか上昇しなくて、目に見えて差が生じてしまったのです」

「武器の強化とかでどうにかなるだろ」

「一応ね。それでも倍率の関係で……」

初期ステータスから能力解放によるステータスボーナスでどうにか誤魔化しているとかか。

戦えないほど……あー……この世界、人も魔物も波も強力だもんな。

誤魔化すにも限界があるのか。

「魔法も種類こそ多く覚えておりますが、威力が伴わず……皆さんの足を引っ張りかねないのです」

魔法の援護もそこまで優秀じゃないと。

……うん。リーシアに似た能力の奴だな。

「ワタシが前に出て致命傷を受けたらいけないと皆さんが守ってくださっているのですが……ワタシは、眷属器の所持者なのです。守られているのは歯がゆく思っています」

守る立場になりたいとエスノバルトは嘆いていると。

「言うことは立派だが、行動が伴っていないな」
「ナオフミ様、あの……もう少し優しい言葉を投げかけては？」
だってそうだろう。
戦いたくもないのに、他者を守ることを強要されている俺とは違って、自身の決意で前に出て自分で攻撃できるのならどんな方法だってあるはずだ。
エスノバルトは船の眷属器で、前に乗った時には空飛ぶ船で大砲とか積まれていた。
大砲が船のカテゴリーに入っていて一斉射撃とかできるのなら、十分戦えるだろう。
ああ、この世界もステータスに依存しているのなら、魔物にダメージが入らないとか……ありえない話じゃないな。
だが、ステータスで全てが決まっていると思い込んでいるなら甘えも程々にしてほしい！
「リーシアを見てみろ！　コイツのステータスは涙が出るほど低いんだぞ！　それに比べて眷属器を所持しているのに何を甘えているんだ！」
「ふぇええええええ!?」
リーシアが叫び声を上げる。
「尚文、さすがにちょっと言いすぎじゃない？　エスノバルトにもリーシアさんにも」
「いいや、言いすぎじゃない。本人のやる気の話をしているんだ」
俺は絆を手招きして、耳元でリーシアのステータスを上から教えていく。
リーシアは成長補正のために奴隷化しているから俺は見ることができるんだ。
俺の説明を聞いて、絆の顔色が見る見る青くなっていく。
「え……まさかそんなにも低いの？」
「ああ、普段はな。正直、キョウ相手に覚醒した時以外はこんなもんだぞ」
「ど、どういうことですか？」
グラスが気になったのか、絆に聞く。
そして、なぜかリーシアに土下座した。
「す、すいません。まさかそんなにも低い能力で波の前線に来ているとは思いもしませんでした」

「ふぇええええええ!?」
「土下座するほどか……」
「尚文、当たり前のようにリーシアさんを戦闘に参加させていたけど、正直無謀な次元だよ！」
絆の方は俺に対して怒ってる。そんなにも酷いことか？
むしろお前等の反応の方が酷いんじゃないのか？
ラフタリアはどう反応したらいいか微妙な表情をしている。
「えっと、本人が強くなることを望んでいるのですからいいのではないのですか？」
「ラフタリアさん。勇気と蛮勇は違います！　この能力では命を落とすだけですよ！」
おや？　おかしな空気になっているな。俺はエスノバルトに、がんばらないお前がリーシアを羨む資格はないと言いたかっただけなんだが。なぜ俺たちが責められているんだ？
「……なるほど、ワタシはリーシアさんの意気込みにも劣る決意しか持っていなかったということなんですね」
エスノバルトはリーシアの能力を確認し、それでもなお戦う意志を見せるリーシアを見て頷く。
「才能なんていつ開花するかわかったもんじゃない。Ｌｖ補正？　大器晩成を期待して伸ばす努力を怠るな」
腐ってもお前は眷属器の所持者なんだろ？
伸び止まりでスランプにでも陥っているのかもしれないが、他人と比べて自分が劣っていると諦めている暇があったら、リーシアのように前を向いて少しずつ努力を積み重ねればいい。
「後方援護担当だと割り切るならいいがな。少しでも強くなりたいならがんばるしかないだろ。強さはステータスだけで測れないのを俺は知っている。お前は本当にできないのとは違うんだからな」
「ナオフミ様……」
「なんかカッコいいことを言ってるね。尚文はオレと同じで戦闘に欠陥を持ってるのに」
「うるさい」
俺も攻撃できるのならやりたいが、呪われた盾の所為でできないのだからしょうがない。
だが、俺は諦めるつもりはない。
エスノバルトの武器がそんな制限を受けているわけじゃないのなら、まだ希望はある。
リーシアだって才能はあるとみんなに言われているし、まぐれでもキョウ相手に善戦したのだから資質はある。

後は本人の努力で結果は実るんだ。
やらずに後悔するよりもやって後悔をしろ。
努力をしてから文句を言え。
「わかりました。グラス、ワタシも訓練に参加させてください」
「よ、よいのですか？」
「はい。ワタシも、皆さんを守れるように、リーシアさんのようにがんばっていきたいのです」
「が、がんばりましょう！」
エスノバルトとリーシアが意気投合したようだ。
グラスも二人のやる気を見て、微笑んでいる。
「二人とも、私の教えは厳しいですよ！」
なんかグラスの闘志に火がついたみたいだ。グラスの背後に何かが見える。
「では二人とも！　まずは体力作りですよ！　さあ、行きましょう！」
「はい！」
「はいぃ！」
なんか三人で走っていってしまう。
あ、リーシアとエスノバルトが一緒に転んだ。
資質がそっくりな二人はドジなところもそっくりなのか。
「あの、ナオフミ様。それで私達に何か用があったのではないのですか？」
「ああ、そういえばそうだったな」
リーシアの強さ云々で話が逸れちゃったじゃないか。
俺は持ってきた刀の鞘をラフタリアに手渡す。
「あ、ありがとうございます！」
嬉しそうにラフタリアは微笑む。うんうん。その顔を見たかったんだよな。
一応は仮の安物の鞘に入れていたのだけど、ちゃんと釣り合う鞘があると刀の良さが引き立つな。鞘に収まる時にチャキッと音までしている。

ん？　一瞬、ピカッと鞘に付けた宝石が光ったような気がした。
「絆の話じゃ、眷属器や四聖の武器にアクセサリーを付けると特別な効果が付与されるんだよな」
「うん、どんな効果があるかはわからないけど」
「一応、アクセサリーの付与効果はラフタリアが動きやすいようにと敏捷を重視したが……」
その先の付与は国の付与師という連中に任せた。
俺も確認したが俺の意図を察した付与をしてくれてはいる。
まあ、何か問題のあるものを仕込まれている可能性がないわけじゃないが付与師泣かせの眷属器だ、そんな真似ができるとは思えない。
「どうなのでしょう」
「鞘の宝石の部分がなんか光ってない？」
「そうだな。目盛りみたいに光が少しずつ溜まっていっているように見えるぞ」
「はぁ……何が起こるのでしょうか？」
「溜まりきるのを待って確認するしかないな」
「そもそも何がどうして作動するかもわからないしね」
「そこなんだよな」
「試しに抜刀してもらえばいいかもよ？」
ありえるな。何かしらの条件を満たすことで作動するかもしれない。
俺が前に武器屋の親父からもらったアクセサリーもそうやって作動した。
あの時は攻撃を受け続けたからなのかもしれないけどさ。
疑似的な流星盾みたいな結界を生成していた。しかも反撃効果もあったみたいだからなかなか優秀だったと思う。
できる限りあの時のアクセサリーに似た作りにしようとしてるが……って脱線したな。
「そうだな。ラフタリア、刀を抜いてみてくれ」
「あ、はい」
ラフタリアが鞘から刀を抜くと鞘に付けた宝石の光が消えてしまった。
「消えちゃったね」

「条件は間違ってないんじゃないか？　ちゃんと溜まってから抜かせてみよう」
「わかりました」
で、鞘に戻して鞘の宝石の光が溜まるのを待つ。
「鞘に入れたまま戦うとかしなきゃいけなくなりそうだな。刀身の部分を出した方がいいか？」
「鞘の意味がなくなるよ？」
「問題はそこだ。形状を変えたらどうなるかも試さないといけないし」
「意外と溜まるのに時間が掛かりますね」
「予備の刀とかあればこれでもよさそうではあるがな」
「確かグラスの扇は二つにすることができたと思うよ。二刀流みたいな感じで踊るんだけどさ」
「そういう技能かスキルを習得させれば増えるのか」
「たぶんね」
「あの……私の刀を凝視しながら分析をするのはやめてほしいのですけど……」
ラフタリアが気まずそうに呟く。
しょうがないだろ、アクセサリーが完成したのはラフタリアのが一番早かったんだし。
「ピカピカ光ってキレー」
「ラフー」
ハミングファルコン形態に変身したフィーロとラフちゃんが鞘を見る俺に乗っかって覗きこむ。
なんか異様な光景になってきたな。
で、体感だと三分くらい経っただろうか。やっと宝石の光が溜まった。
シャキンと留め金が音を立てたと思う。
わかりやすい合図だな。
「よし、じゃあラフタリア。試しに刀を抜いてみろ」
「わ、わかりました」
ラフタリアは鞘を左手で掴んで右手でゆっくりと刀を抜く。
ん？　なんかラフタリアがダブって見えるぞ。

絆も同じなのかぶれるラフタリアに首を傾げる。
なんていうか、辛うじて目で追いかけることはできるんだけど、体がついていけない速度で動いている……アレだ、フィーロがハイクイックを唱えた時のような速度で動いているみたいなんだ。
そんな速度で動くラフタリアに反応できる俺と絆がおかしいのかもしれない。
先ほどから目を輝かせて、存在感を消しているテリスは放置だ。
で、数秒にも満たない時間だったと思う。ラフタリアの速度が元に戻った。
「あれ？　ナオフミ様？」
「どうした？」
「鞘から刀を抜いた瞬間からしばらくの間、ナオフミ様達がゆっくりと動いているように見えました」
「そうだな。俺には動きに追いつけないほどラフタリアが凄く速く動いて見えた。フィーロのハイクイックみたいにな」
「あの速度で襲い掛かられたら守るのもやっとだと思うよ」
「そうだな」
辛うじて守りが追いつくか、怪しいラインだな。
「おそらく、ラフタリアの鞘は一定時間刀を収めておくと抜刀時にハイクイックが作動するとみていい」
「結構凄いんじゃない？　居合い斬りみたいな感じで魔物を倒せそうだね。カッコ良さそう」
「鮪包丁を使って一撃で仕留める絆が言ってもな。カッコ良いのは同意する」
正直、これでラフタリアが居合い斬りができるようになったとしても絆の攻撃の方が隙がない。
なにせ、ラフタリアの居合い斬りは初発限定だ。
初発を逃せば、再度使用する場合、三分近く攻撃できないようなもんだ。
素手で相手に殴りかかっても武器の制限に引っ掛かる。別の武器は使えない。
魔法で援護するという手もあるが、居合いだけで戦うのはやめた方がいいだろう。
まあ、ないよりマシだ。
「あの……人を分析して考察するのは程々にしてほしいんですけど……」
「グラスの使う二本目の扇を出す技能を習得すれば、適宜持ち替えて戦うとかできそうだな」

「武器固定かもよ？」
「それでも優秀だろ」
「人の話を聞いてください」
「ああ、悪かったな。絆とは話が通じやすくてな」
どうもラフタリアは俺と絆が話し合いをしていると不機嫌になるな。
これは……やきもちというやつだな。
父親代わりをしている俺が仲良さそうに女と話をしている。
子供であるラフタリアからしたら親が取られそうな気持ちになるんだろう。
「なんか凄く生温かい目で見られている気がします！」
「まあまあ。とりあえず魔物を狩る時とか、初発に素早く動けるのは有利だと思うよ」
「そうだな。それだけでも十分だな」
素早く先制攻撃ができるのならいいだろう。
フィーロの場合は意識を集中しているのが一発でわかるから警戒されるが、ラフタリアの場合は気付いた時には手遅れだ。一瞬で斬られたことを知る。
ま、上手く使えば優秀な切り札になるだろう。
「溜めた分をなくさずに一度鞘に収めたら即座に発動できるようにできないかな？」
「付与師に相談してみるか。使い方次第じゃそっちの方がいいだろ」
「だね。じゃあ後で報告しておこう」
「ああもう……勝手に強化案が提出されていきます。ナオフミ様の方はどうなのですか？」
「まだ完成してない」
一応こうなってほしい的な想像をしながら作ったが、実際どうなるかまではわからないからな。
「キズナさんは？」
「よくぞ聞いてくれました！　じゃーん！」
絆が嬉しそうに俺が作ってやったコテコテのルアーを見せつける。
その形状を見たラフタリアが俺の方に呆れた目を向けてくる。

「本人の要望だ」
「これから付与してもらって、今夜の夜釣りに使うんだー！」
「キズナさんは本当に釣りが好きなんですね」
「そりゃそうさ！　オレの趣味は釣りだよ！」
何を誇らしげに言っているのやら。そういや昨日グラスがなんか嘆いていたような覚えがある。
帰ってきた絆の部屋には魚拓がずいぶん貼り付けられていた。
アレは……全部絆が釣った魚なんだろうか？
一部魚とは言い難い形状をした生き物があったような気がしたけど。
「エスノバルトにお願いして船釣りをしようかなー」
「明日は出かけるんだから程々にな」
「はいはーい」
コイツ、絶対に夜更かしするな。
「どこかへ出かけるのですか？」
「ああ、ラルク達と魔物退治の演習をする。明日に備えてゆっくりしておいてほしい」
「わかりました」
ま、こうしてラフタリアは着実に強くなっていくんだな。
すっかり忘れていた。俺は走り込みをしているリーシアを呼ぶ。
「あ、おーい。リーシアー」
「なんですか？」
「波の記述が書かれた書物だそうだ」
俺から本を渡されてリーシアも写本に軽く目を通す。
「もしかしたらお前なら解読できるかもしれない。挑戦してみたらどうだ？」
「わ、私がですか!?」
「ああ、そういうのは得意だろ？」
「本を読むのは好きですけど、解読までできるかわかりませんよぅ」

謙虚なのはいいが、ここまでだと若干イラッとするな。
こう……実はインドアな才能があるのに本人はアウトドアを望むという可哀想な奴だからな。
「とにかく命令だ、努力してみろ。上手くいけば樹の負担だって減るんだぞ」
なにせ波の秘密が書かれているかもしれない書物なんだ。
こういう時こそ、普段はあんまり役に立たないリーシアの出番だろう。
「が、がんばります！」
リーシアは本を荷物袋に入れて走り込みを再開した。
「ナオフミさん、今日の魔法の練習はどうするんですか？」
む……今まで黙って事の成り行きを見ていたアクセサリーマニアことテリスが喋り出した。
そう、俺は今、テリスに魔法を教わっている。
アクセサリー作りの合間にな。
オストが俺に残してくれた、霊亀の心の盾を得た時に習得した技能——龍脈法という魔法の使い方なのだが、それがどうもよくわからない。
おそらく、オストが教えてくれた魔法なのだろうとは思うのだけどあのパズルが出せないんだ。
自分とは違う何かから力を借りる魔法らしい。
パッと見でなんとなく似た魔法を使っていたテリスに聞いたのだ。
そうしたら、系統は違うけれど応用は利くかもしれない、と俺に魔法を教えてくれることになった。
で、ここ数日の間、色々と教わっているのだけどこれがなかなか難しい。
「今日もやるさ、あの援護魔法を覚えるためにもな」
オストの力を借りて俺はアル・リベレイション・オーラという高度な援護魔法を唱えることができた。
あの時の能力の上昇は凄いものだった。
この先を生き残るには必要な手段だろうし、オストが託したこの力を俺は使いこなせるようにならないといけない義務がある。
だから俺も怠けるわけにはいかないのだ。
で、俺はテリスに魔法を教わる代わりにアクセサリー作りをしているところを見せると約束し、こうして連日アクセサリー作りを見せ、魔法を教わっている。
テリスから教わるには宝石が必要ということで、手頃な宝石を加工もしたな。
元々が宝石である晶人のテリスには宝石は不要で、俺が加工した宝石は俺に力を貸してくれるかたちで魔法の練習は進んでいる。
「じゃあ練習を始めますよ」
「はいはい」
城の訓練場で、宝石を片手に俺達は魔法の練習を始める。
「がんばってくださいナオフミ様！　私もグラスさん達と一緒に訓練をしてきます」
「おう、がんばれよ。俺も気を使いこなせるようになりたいから、後で参加させてもらおう」
まずは魔法の方を優先しようと決めた。
防御比例攻撃という驚異的な攻撃をしてくる相手への対策も必要だ。
だけど、それ以上にオストの託した力を使いこなせるようになりたいんだ。

三話　ルアー

翌日、これから演習へ出発するというところへ、目の下にクマを作った絆がやってきた時は呆れて言葉も出なかった。
昨夜完成したルアーの実験をすると海へ行って……時間まで帰ってこなかったんだよな。
「このルアー凄いよ！　釣竿に付けて投げたら爆釣れ！　入れたら入れた分だけ釣れるんだ！　凄く楽しい！　出発は明日にしよう！」
コイツは何言っているんだ？
しかし……これからまた釣りに行ってくる！と言いたげな絆の目は、瞳孔が開いていてかなり怖い。軽くホラーだ。
グラスもわかっているのか、絆を宥めるようにしている。

「キズナ、貴方は少し疲れているんです。息抜きは程々にしましょう」
「いや！　あそこで粘ればもっと凄い大物が釣れるはずなんだ！　グラスも美味しい魚を食べたいでしょ！　だから行かせて！」
「キズナ！　もういい、いいんです！　だから少し休んでください」
「う……」
使命と趣味の釣りを天秤に掛けるなよ。
絆にも訳のわからない拘りがあるな。目が怖いから俺の方を見ないでくれ。
「わ、わかったよ。だけど終わったら釣りをさせてくれよ」
「はい」
とグラスが言いきったところで絆はぐったりと座り込んでしまった。
昨日は戦闘と訓練で疲れていたはずなのに、更に徹夜で釣りなんてしたらそうなるだろうに。
どんだけ夢中で釣ってたんだよ。
「とんだ呪いのルアーだな」
「作ったのはナオフミ様です」
「そうです。キズナを殺すつもりですか！」
「俺の所為なのか⁉」
絆にとっては夢のアクセサリーだっただけだろ。俺は悪くない。
「で、アルトも来るのか？」
「僕は素材回収係。もとより戦う気もないよ」
商人だもんな。戦場が違うか。商人の戦場は商戦だ。
大方、今回遠征する所で手に入る素材かドロップが目当てなんだろう。
「僕はドロップで能力名の付いた粉を買い取るために同行するんだよ」
「なんだそれ？」
「力の粉とか魔力の粉だな」
何だろうか？　フレーズからして収集欲を刺激されるぞ。バカにできなそう。

「薬の材料でね。完成した薬は高額で取引されるんだけど、能力を引き上げる効果があるんだ」
「ほう……」
古いRPGだと種とかに相当する道具だな。
勇者だと素材一種類につき出る武器を解放するだけで補えるものだ。
チリも積もれば山となる。Lv限界に達した冒険者がこぞって集めようとする素材だそうだ。
なるほど、だから眷属器とかを所持していないこの世界の連中に、妙に強い奴がいるのか。
「売るよりも使いたいな」
「使えば使うほど効果が薄まるから、一定量を服用したら売るって人が多いね」
なるほどな。だからクズ二号の取り巻きとかからの攻撃で流星盾が壊れたんだな。
雑魚だと思っていたのに意外と強かったのはその所為か。
「では……キズナには移動中に休んでもらうとして、出発しましょうか」
エスノバルトの指示に従い、船に乗り込む。
この船で移動するのか。確かに船の眷属器は移動には便利そうだな。
疑似的なポータル、確か龍脈に乗っかって移動するんだったか。ずいぶんと速いな。
ただ……速く移動しているお陰で無視できているんだけど結構魔物が飛んでいるな。
まあ空飛ぶ魔物なんて珍しくもなんともないか。
「今日はずいぶんと多いですね」
「そうなのか？」
「ええ、少々迂回します」
まあ、船での空中戦となると遠距離攻撃ができる奴が有利だ。
が、魔物相手に絶大な効果を発揮する狩猟具の勇者は現在お休み中だ。
「やっとお役所仕事からおさらばして暴れられるぜ！」
なんか人の上に立たせちゃいけないような気がするラルクは無視してっと。
強い魔物の所へ空飛ぶ船で移動しているわけだが……ってエスノバルトは戦闘はできないけど便利な眷属器を所持してるよな。

「そういやエスノバルトって魔物らしいが……種族名は？」
もう、獣人のカテゴリーでいいんじゃないか？　喋る兎みたいだし。
「図書兎ですね。ラルクさんの国ではライブラリーラビットでしたか」
「迷宮古代図書館にしか生息していない無害の魔物だぜ」
なんか名前からして図書館っぽい所だなきっと。
「俺を召喚した世界にいる獣人と何が違うのか聞きたいところだな」
大きな違いがなかったら、人と魔物の定義を改訂させてやる。
「丁度近くに私の故郷があるので寄り道しましょう」
で、エスノバルトは大きく迂回して……大きな神殿みたいな建物に立ち寄り、近くを歩くウサギを手招きする。
呼ばれたウサギは近づいてきて会釈して、鼻をピクピクと動かしているだけだ。
「アレが図書兎ね」
「ウサギ形態のエスノバルトの半分くらいしか身長がないな」
ボス個体か？　エスノバルトは。
「ええ……はい。がんばってください」
というエスノバルトの言葉に対して、ウサギは鼻をピクピクさせてる。喋れよ。
「えっとねー『はい。偉大なる族長さま』って言ってるよ」
なぜかフィーロが訳している。
えーっとつまり、魔物の言葉を話しているから魔物という扱いなのか？
というか喋っているのか。地味に頭が良いようだ。
「これから遠征に行ってきます。ワタシも世界のために強くなりたいのです」
そう答えるとなんかウサギ共が集まってきて、ボフボフと拍手をしてる。
なんだこの光景。
「エスノバルトはここの館長だからな。配下に親しまれてるのは良い長の証拠だぜ」
ラルクもこれで一応は王様らしい。若だもんな。
絆の仲間には結構、権力者が多いんだな。

うーん……俺に当てはめるとメルティか？
あれで姫だし、メルロマルクの女王が死んだりしたらきっとラルクと同じポジションに収まりそうだ。よし、その時は姫とでも呼んでやるか。
おや？　俺の想像の中でのメルティが真っ赤になってプリプリと怒りだした。
しかし……前々から思っていたがエスノバルトはフィトリアとなんとなく被るところがあるな。
まあ、フィトリアに比べて弱いみたいだけど。
聞いてみるか。
「なあ、エスノバルトはいくつなんだ？」
「ワタシですか？　今年で……一五ですね」
微妙な年齢だな。
フィトリアはいくつなのか不明だけど、過去の四聖の時代から生きているとか言っていた。
逆に若すぎないか？　魔物の勇者枠だろ？　コイツ。
「図書兎ってどんな生態なわけ？」
「どうしてそんなに気にするんだ？」
「いや、俺のいた世界の方でフィロリアルっていう魔物、フィーロの種族なんだけどさ――」
俺はグラスをはじめラルク達にフィロリアルに関して説明した。
「あー……霊亀相手に大暴れしてた化け物みたいに強いアイツか。アレがフィーロ嬢ちゃんと同じ種族なのか」
「そうだ。勇者が育てることで特別な育ち方をするらしい。だからフィーロは化け物じみて強いんだ。まあ、この世界じゃその限りじゃないみたいだけどな」
するとそこで、エスノバルトが書物を取り出して読み始める。
「伝説の図書兎という伝承はあります。ここですね」
挿絵にはなんかエスノバルトが着ている服に似た服を着た、ウサギが描かれている。
「全ての図書兎の始祖となった方ですが、過去の戦いで命を落としたと書かれています」
既に故人か。知恵袋的なポジションだったのだろうか？
「ワタシはその方の名を襲名した図書兎です。ですが知識は足元にも及びません。いずれはあの方のように立派な

図書兎になりたいと思っています」
「ん……」
ここでやっと絆が目を覚ました。
で、絆にグラスが事情を説明している。
「へー、どこの世界にも似たようなのがいるんだね」
「似てるとは言い難いが……エスノバルト、お前さ、強くなりたいんだったら……って」
眷属器に選ばれているならもう魔物紋を付けるような飼い魔物にはなれないのかな。
確か使役札だったか？　この世界で魔物を使役するのに必要なものは。
「絆、グラスでもいいから図書兎を使役札で育ててみればいいんじゃないか？　もしかしたら化けるぞ」
「そうなるとワタシの立つ瀬がないのですが……」
「そこはがんばれ」
フィトリアよりもフィーロが強くなるようなもんだ。
……取って代わられそうだな。
「そもそも図書兎に戦闘を期待するのは酷と昔から言われていますが……」
ああ、種族的特徴？　リーシアが量産されているような哀れさが滲み出ている。
「これで勇者が育てたら化けるとかだったら俺のいた世界のフィロリアル枠だな」
「まあ……余裕があったらやってみてもいいけどさ」
「ま、負けないようにがんばります！」
眷属器の所持者が怠けちゃ始まらない。その分がんばれ。
「とりあえず、リーシアと同じく危険なことをせずに、自分のできる範囲で戦えばいい。俺達がフォローする」
「はい！」
話を終えて移動を開始、目的地に着陸すると近くに居た魔物共がいきなり牙を剥いて襲い掛かってきた。
「うわ！」
咄嗟に流星盾を唱えて結界を作り出す。

「ハッ！」
ラフタリアが鞘から刀を抜いてハイクイック状態で居合い斬りをする。
それで近くにいた魔物を倒すことはできたが、騒ぎを聞きつけて増援が来た。
「てぇい！」
今度はグラスが扇で魔物を切りつける。
すると斬撃が飛んでいって、魔物を襲う。
「これは……」
扇と俺を交互に見ている。
「スキルじゃないのか？」
「同じような攻撃はあるのですが、特に何もしていないのに出ました。エネルギーの消費もありません」
「それが尚文からもらったグラスのアクセサリー効果？」
「そのようですね。他のアクセサリーとは次元の異なる優秀な装備のようです」
嬉しそうにグラスは答えた。新武器で心が躍る。そんな顔をしている。
グラスはブンブンと、何度も扇を振るって飛んでくる魔物共を蹴散らす。
「俺もグラスの嬢ちゃん達に負けてられないぜ！」
で、ラルクが強く鎌を振りかぶると、刃がエネルギー状になって魔物を切り裂いた。
「おお！　威力がずいぶん上がってんな。坊主のアクセサリーはスゲーな」
褒められて嫌な気持ちにはならないが、最終的に戦うかもしれない相手がここまで戦いやすいと連呼している姿を見ると複雑な気持ちになる。
どれもずいぶんと優秀な能力を見せている。俺自身驚きで一杯だ。
ただ、ラルクの武器に付けていたアクセサリー……羽飾りなのだが、何度か振るっているうちに煙を出し始めた。
「ラルク、それ以上使うと壊れるから気を付けろ」
「ここぞって時に使った方がよさそうだな」
「みたいだな……しかし、ずいぶんと魔物が来るんだな」
迷宮に侵入すると同時に魔物がワラワラとひっきりなしにやってくる。

おそらく、絆のルアーはその効果を常時出してしまうんだな。
「とんだマイナス効果のあるものを作ってしまったようだ。後で処分だな」
「い・や・だ」
なぜか絆がルアーを宝物のように抱え込んでいる。
「このルアーを使うことで爆釣れになるんだよ！　魔物が来るのがなんだっていうんだ」
「まあ……時と場合を考えれば問題は――」
「あります！　キズナ、そのルアーを私に寄越しなさい！」
なぜか俺の言葉を遮ってグラスが絆に手を差し出す。
絆の方は嫌だとばかりに首を振る。
グラスの気持ちはわからなくもないが、ちょっと反応が過激だな。
何か理由でもあるのか？
「キズナの嬢ちゃん。グラスの嬢ちゃんにそれを渡すんだ」
なぜかラルクやテリス、エスノバルト……それに空気だがクリスも同意しているな。
「ラフ！？」
「一体どうしたんですか？」
ラフちゃんとラフタリアが首を傾げて尋ねる。
俺も同じだ。フィーロやリーシアもこの展開に疑問を持っている。
「坊主、キズナの嬢ちゃんはな、釣りに関してだけは病気だ。なにせ幽霊船でも釣糸を垂らして何が釣れるかと言っていたくらいなんだからな」
もちろん、やめさせたとラルクはため息交じりに告げる。
「戦闘中でも釣りのことを考えてるということか？」
「間違いない」
「そこまでは考えてないよ！」
「ではそれを渡してくれますよね？」
「そ、それは……」

俺は絆と一緒にいるから経験値が入らない。
で、グラス達も眷属器が二名以上近くにいると経験値が入らなくなるそうで、ここでＬｖが上昇しているのはテリス、フィーロとリーシアだけとなっている。
「……おかしいですね」
後衛でリーシア共々援護をしているエスノバルトが答える。
「俺もここには来たことがあるが、こりゃあいくらなんでもおかしいぜ！」
ラルクも眉を寄せて集まってくる魔物に首を傾げている。
それはグラスも同じだ。
戦えないほど強くはないが、いい加減数が多い。
こっちだってスタミナには限りがあるんだから、こんな数を捌いていたらいずれ撤退を考えなきゃいけない。
「は！」
絆が時に包丁で接近戦、釣竿で遠距離……って狩猟具なんだから他の武器も使えと言いたくなる戦闘方法で戦っているのだが。
絆の武器にずーっとルアーが引っ付いている。
そういえば絆が……。
『このルアー凄いよ！　釣竿に付けて投げたら爆釣れ！　入れたら入れた分だけ釣れるんだ！　凄く楽しい！　出発は明日にしよう！』
こんなことを言っていたな。
「絆、お前の武器に付けたルアーを外せ」
「え？　わかった」
絆は武器に付けていたルアーを外す。すると魔物の増援がピタリと止んだ。
「やっぱりそれか」
「どういうことですか？」
「そのルアーが魔物を引き寄せる効果を発揮していたんだ」
ヘイトリアクションというスキルを俺は所持している。

「少し厳しすぎないか？　見張っていればいいだろ」
「この先、休憩中にネズミ釣りと称してルアーを付けるかもしれません」
どんな釣りだよ！
そんな時に付けられたら魔物が押し掛けてくるわけだから……不謹慎というか、状況を考えられないのか？
「船で移動中に何度か魔物が近づいてくることがありました。それが原因だったんですね」
エスノバルトも納得している。
そういやそんなことを言っていたもんな。
「ま、グラスに預かってもらった方がよさそうだな。グラスがいいと言う時だけ使え」
「それじゃあチャンスを逃すかもしれないじゃないか！　グラスがその場にいなかったらどうするの？」
「知るかよ……つーか面倒臭い。後はお前等でなんとかしてくれ」
「ナオフミ様、説得を諦めないでください」
「オレは誰も見たことのない大物を釣り上げる夢があるんだ！」
「勇魚でも釣り上げてろ！」
いや、波の途中で釣りを始められても困るか。
「坊主、右から回れ、俺は左から行く、グラスの嬢ちゃんとラフタリアの嬢ちゃんは逃がさないようにしろよ」
「わかった」
素早く連携し、全員で絆を包囲した。
「な、何をする！　貴様らー！」
ふん、殺してでも奪い取るつもりで絆からルアーを没収するだけだ。
こういうのはキョウを倒して俺達が帰ってからにしろ。
「うわぁあああん！　素敵なアクセサリーを奪われたー！」
とまあ、絆の子供みたいな叫びが響き渡ったのだった。
この台詞だけ聞くと年頃の女の子みたいだよな。

「さてと……」
グラスに駄々っ子パンチをしてルアーを返してほしいと嘆く絆を無視して辺りを確認する。
魔物の方は……うん、戦えないほどじゃない。
アクセサリーの効果の確認に来たんだが、思ったよりも優秀で良い調子だ。
地味に強いが、ここには世界でも有数の猛者である眷属器持ちと、世界こそ違えど四聖が二人いるんだ。突破できないほどじゃない。
「さて、また魔物の出現みたいだな。戦うぞ」
「はい！」
「よーし！　倒して出た素材を使って尚文に色々と作ってもらうぞー！」
「ラルクとロミナにでも頼んでろ！」
絆は本当に懲りないな。
で、戦闘だが……語るまでもなくアッサリと勝利した。
移動するごとに出てくる魔物が段々と強力になってきている。
俺の防御を突破する奴は今のところ出てきていないが、流星盾が破壊されることが増えてきた。
絆やラルク、グラスの疲労も大分蓄積してきている。
「少し休むか」
俺が提案するとみんな嫌がることなく、休憩することに賛成した。
「暗くなってきたし、焚き火でもするか？」
「とりあえず、交代で見張りだな」
「そうだね。じゃあ――」
「釣りは許さん」
「しないよ！」
そんなわけで俺達は交代で休むことになった。
キャンプとかって、過去の俺だったらロマンだな、とか思うんだろうが実際は疲労と見張りの面倒さでウンザリするな。まあ野宿には慣れているから問題はないけどさ。

とりあえず、盾に入っている手持ちの素材を調合に回しておくか。
絆達も大体、そんな感じで色々とやっているみたいだし。
フィーロとラフちゃんが俺に寄り添うかたちで休んでいる。
ラフタリアは休憩中だというのに素振りなんかしているな、熱心なことで……で、リーシアはこの世界の文字の解読をすると言って本を食い入るように見ている。
お前ならできそうだと思えるから凄いな。
インテリリーシア、がんばれよ。
……とは言いつつ、盾に調合の指示をしたら手が空いたな。
寝るにも微妙に気が高ぶって寝られそうにない。
うん。今のうちにやることをやっておこう。
「ラフちゃん」
「ラフー？」
手近な所で休んでいたラフちゃんを抱き起こして、膝の上に置き、盾にある式神強化の項目を呼び出して、手持ちの素材等の材料をもとにラフちゃんの能力強化を図る。
ラフちゃんは式神だからな、Ｌｖなどの概念は今のところない。
色々な技能修得や細かいステータスの上昇を手持ちの素材を使って行うにとどまっている。
バイオプラントのように配分を弄る要素もあって、なかなかに奥が深そうなのだ。
例えば毛の艶なども弄れる。
ただ、数字を弄ればいいだけじゃなくて、硬め、柔らか、ふんわり、すっきり、短毛、長毛等、多岐にわたるな。
だから俺は暇さえあればラフちゃんの強化をしている。
今のところ幻覚の魔法を使って補助をしてくれているにとどまっているが、ゆくゆくはラフタリアに匹敵する俺の右腕として戦ってもらいたい。
「ラフー」
などとラフちゃんを撫でながら考えていると俺の隣に何か大きなものがいることに気付いた。
顔を向けるとなぜかエスノバルトが座ってる。

しかもウサギ形態……地味にデカイから背もたれに丁度良い感じだ。
「なんだ？」
「いえ……なぜかここが一番安心すると言いますか……」
「は？」
「尚文は動物に好かれそうだもんね」
なぜか絆が同意している。意味がわからんな。
「ナオフミ様は面倒見はとてもいいですよ。私もナオフミ様の優しさでここまで来られたのですから」
ラフタリアが誇るように言うが……あんまり嬉しくないぞ。
完全に舐められているようにしか思えない。
「ごしゅじんさまはフィーロのなのー！」
「誰がお前のものになった！」
「ラフー？」
「ペン！」
「フィーロちゃんやクリスもおんなじみたいだしね」
絆に言われて見渡すとなぜかフィーロ、ラフちゃん、クリスにエスノバルトが俺を囲むように寛いでいる。
「ナオフミは異世界とはいえ、盾の勇者なのでしょう？　守ることしかできないので敵ではないと本能で悟るのかもしれませんよ」
グラスがなぜか俺を分析する。
「あと、何かあったら一番安全な所って尚文の隣でしょ」
「そういうもんかね……つーか熱い！」
ラフちゃんを抱えて俺は立ち上がって移動する。
するとフィーロとクリス、エスノバルトは固まって俺の近くで休み始める。
さっきよりは幾分かマシだけど、どうなんだ？
まったく……人外組は訳がわからん行動に出るな。
いや、生存本能から安全な場所で無防備に休みたいとか打算的なことを感じているのはわかるがな。

「俺はじゃれあいをする気はない」

と、ラフちゃんのお腹を撫でて毛並みをチェックする。

「ここまで説得力のない台詞も珍しいと思うよ？」

「何かおかしなことを言ったか？」

「ラフゥ……」

「ナオフミ様、ラフちゃんを撫でるのは程々にしてください」

「なぜだ？」

なぜかラフちゃんに構うとラフタリアは若干嫌そうにやめるように頼んでくる。

「その……私の髪から作られたのがラフちゃんなんですし、その……撫でられているのを見ると恥ずかしいといいますか」

「何を照れているんだ？　お前自体も子供なんだから少しくらい甘えてもいいだろ」

俺がそう返すとラフタリアは若干ムッとしたような表情になって素振りを再開してしまった。

先ほどよりも力が入っている気がする。

「あーあ……ま、尚文らしいのかな？」

「ラフー」

やれやれとラフちゃんが手を上げて首を振っている。

何かおかしなことを言ったか？

ラフタリアは俺の娘みたいなもんなんだし、ラフちゃんはラフタリアに似た可愛らしさを持っているんだから大切にしたいと思っている。そのことにおかしな点などないだろうに。

「一体何なんだ？」

「まあまあ、とりあえず尚文もそろそろ休みなよ。ラルクなんていびきを掻いて寝てるでしょ？」

そういや、ラルクが豪快に寝ている。

あんな音を出していたら魔物を引き寄せるんじゃないのか？

そう思ったところでテリスが寝ているラルクに毛布を掛けて、魔法を唱えて音を消したようだった。

不満はないが、地味に酷いんじゃないか？

直前まで話していたはずのグラスも、妙に静かだなと思ったら絆の隣で寝息を立てている。

「まだ時間はあるんだから、ラフタリアさんとオレに任せて休んでいなよ」

「ああ、はいはい」

まあ元々召喚されてすぐに裏切られて以降、眠りが浅くなってるから休める時に休まないときついもんな。

なんか合宿みたいなキャンプだったな。

翌日の昼には演習を終えて帰還した。

さて、遠征でずいぶんとLvを上げたフィーロに関してここで報告しよう。

まずハミングフェーリーという魔物になったフィーロはいろんな姿に変わっていく。元々がフィロリアルクイーンだった故か、ハミングフェーリーの別種に変身することもできるみたいだ。

「ごしゅじんさまー、この姿は前のフィーロに近いかな？」

「そうだな。どことなく似てるな」

城に帰還し、庭でフィーロがコロコロと姿を変えて俺に見せていた。

俺はラフちゃんにもフィーロのように姿を変える技能が欲しいと思ってるぞ。

もう少し大きければ、抱き枕としても丁度良いし、こう……アニメとかで獣に寄り添って寝るとかあるが、アレができそうじゃないか。

エスノバルトとフィーロでもできないことはないが、俺はラフちゃんでやりたいんだよ。

……脱線したな。

フィーロは現在、絆曰く、ハミングビッグオウルといういうまんまフクロウみたいな魔物に変身していた。

大きさはまんまフィロリアルクイーン形態のフィーロだな。腰回り以外あんまり差がない。

他にハミングエンペラーペンギンという大きなペンギンにもなった。王冠みたいな冠羽があって威風堂々としているな。

絆とグラスの式神、ペンギンっぽいクリスが羨望と嫉妬の眼差しを向けていたぞ。

「フィーロね、最近お歌が上手くなったんだよー」

ご機嫌なフィーロが喉を鳴らして歌い始める。

なんかバックミュージックまで聞こえてきて、かなりにぎやかだ。
どうやってそんな複合音声を出せるのか不思議だな。琴みたいな音まで再現している。
この世界って古風な……日本みたいな音楽が結構あるんだよな。
絆達が拠点にしている国は洋風だけど衣服は和風と洋風が混ざっていて混沌としてる。
酒場で詩人が三味線みたいな楽器を弾いているのを見ると違和感が凄い。まあ……巫女姿のラフタリアが眼福でいいんだけどな。
「ラフー」
ラフちゃんがフィーロの歌に合わせて一緒に踊り始める。
「おー、がんばれー」
俺は魔法の練習をしながら気のない返事をした。
なんか元気が出る歌だとかフィーロが言っていたな。
確かに魔力の回復が早まったし、ラフタリア達の訓練も相当捗ったと聞いた。
特別なハミングフェーリーの歌なのか？
「さて、そろそろ帰るか」
「はーい」
そんなこんなで戦争の準備をしている最中、夜中に就寝していた時……事件が起こった。
思えば、アレだけの事件を起こしたキョウが今まで何もしてこなかったのを警戒しなかった俺達が愚かだったのだろう。
俺がそれを身に染みて理解することになる事件の幕開けだった。

四話　猪のような襲撃者

突如、地震のような揺れと爆発音で目を覚ます。
「な、なんですか!?」

「ラフー!?」
「え？　なになにー？」
「ふぇ!?　イツキ様!?」
俺達は絆の家の部屋でベッドから飛び起きて辺りを見渡す。
外を見る……現在、俺達がいるのは三階だ。一階の方が騒がしい。
「わからん。だが、何か起こっているみたいだ。注意していくぞ」
俺の言葉に全員が頷く。
急いで部屋から出て一階の方へ行くと、絆とグラス、クリスが入り口の方へ向けて構えている。
今、この家にいるのは俺達とこの三人だけだ。
ラルクとテリスは城にいるし、エスノバルトは図書館の方で雑務をしているとの話だ。
今、俺が装備している盾は白虎クローンの盾という、クズ二号を倒した時についでに手に入れた盾だ。それもLvの関係か最近になってやっと解放したんだが、微妙に弱い。
防御能力は霊亀の心の盾に劣る。
が、霊亀の心の盾の変化条件をまだ満たせていない。

白虎クローンの盾（覚醒）
能力未解放……装備ボーナス、スキル「チェインシールド」
専用効果　敏捷上昇（中）　衝撃吸収（弱）　受け流し（弱）

このなんとも言えない微妙な性能。所詮は模造品か。
敏捷が多少期待できるが衝撃吸収や受け流しに関しては問題ありだ。
それでもグラス達の防御比例攻撃に関してだけで言えば若干の緩和が期待できるのが長所と言えば長所だな。
本物の方の素材が欲しいところなのだが、数が少なくて、しかもロミナが素材を殆ど使いきってしまったらしい。
いろんな国が欲した素材だそうで、ラルクの管理する倉庫でも在庫が殆どないとか。
それでも決戦までには準備してくれると約束をしたがな。

まあラルク曰く、今の俺では変化条件を満たせるかどうか怪しいだろうってことだけどな。
カウンター効果がないからあんまり使いたくない。
だけど、霊亀の心の盾に変化させるまでの繋ぎに丁度良いと思って使っている。
この際、最近は錆びてきているような気がするラースシールドを使ってみてもいいんだけど、負担軽減をしてくれていたフィーロが大きく変化してるから試すのも危なそうなんだよな。
フィトリアの羽のお陰で暴走せずに済んでいるが、ここじゃあ効果もなさそうだ。
そんなわけで、防御力はあるけどちょっと頼りない盾を使用している。
ちなみにチェインシールドはチェンジシールドの亜種だな。
エアストシールド、セカンドシールドと続いて出した盾同士を鎖で繋ぐスキルだ。ある程度動かせるのが長所だ。使い方によっては役に立ちそうだけど、今のところ使い道がない。
「新手か……だが、その程度、私の前では無力！」
声の主、ちょうど絆達が戦おうとしている相手を見る。
入り口は……見事に破壊されているな。
で、そこに袴の女が立っていた。
髪はポニーテールだな。背は……グラスと同じくらいだろうか。
整った顔立ちって……なんか最近はこんな表現しかしていない気がするが、とりあえず美人だな。目つきが険しいが真面目そうだ。
「一体何なんだ？　絆、お前の昔の知り合いか？」
集合写真には写ってないぞ。風邪で欠席とかそんな奴だったのか？
それがお礼参りに乗り込んできたとかなら、迷惑極まりないな。
「違うよ！」
「私達も寝ようとしていたところに扉を叩いてきていきなりこんな騒ぎを起こしたんです」
「何か心当たりはないのか？」
「この状況からして、ある方が難しくない？」
「確かに」

俺の方の異世界じゃ、俺を恨む奴なんて星の数ほどいるだろうしな。
いちいちそんなのを覚えていたらキリがないし身に覚えのない恨みだってあるだろう。
「お前は何者だ！」
絆が襲撃者に向かって尋ねる。
それで素直に答えるわけないだろ。
「私の名前はヨモギ＝エーマール！　キョウのため、聖武器の所持者と眷属器の所持者に天誅を下しに来た！」
「……」
なんだこいつ、アッサリとゲロったぞ。
……なんか眉を寄せたくなる。
絆達は警戒を解かず、戦闘態勢で一歩も譲らない感じだが、相手の間抜けさになんか呆れてきた。
素直なのはいいが、これじゃあ完全に馬鹿正直な次元だぞ。本当にキョウからの刺客でいいのか？
「さあ、私がお前達を成敗してやる！　掛かってこい！」
と、ヨモギとやらは怪しげな剣を構えて俺達に向かって襲い掛かってきた。
「掛かってこいと言いながら襲ってくるお前はなんなんだ！」
よくわからん奴だな！
「は！」
速い！　Ｌｖによる補正や今までの経験、そして訓練で培ってきた勘でなければ対処できない速度で俺達に斬りつけてきた。
俺は脊髄反射に近い形で絆達の前に立って盾で奴の剣を受け止める。
直後、盾に衝撃が走った。
「ぐ……」
耐えきれない威力ではなかったが、ずしりという重みで吹き飛ばされそうになった。
やっぱり白虎クローンの盾じゃ衝撃を吸収しきれなかったか。
「雷鳴剣！」
バチバチと雷を宿した斬撃を放ってくる。



「させません！」

ラフタリアが鞘から刀を抜いて居合い斬りをするが——。
「踏み込みが甘い！」
一歩下がったヨモギが剣をラフタリアに向けると、全て受け止める。
くっ……ラフタリアのハイクイック状態に追いついたというのか？
俺や絆ならともかく、一般人だぞ。
「ラフタリアさん！　下がって！」
グラスが扇を振り上げる。
「輪舞攻ノ型・花風！」
扇を広げてから薙ぐようにヨモギに向けて振りかぶった。
すると扇から花を象った光が飛んでいく。俺のアクセサリーの効果も重なって三つも飛んでいる。探索中にも使っていたスキルだ。
場所が家だからな、部屋で大技を放とうものなら大切な自宅がとんでもないことになる。だから警戒して弱めのスキルを放ったのだろう。追撃には及第点だな。
「く！」
ラフタリアに斬りかかろうとしていたヨモギがグラスの攻撃を弾くかたちで下がる。
「一人を大勢で襲うとは卑怯な……やはりキョウの言った通りの悪人共と見て間違いない」
「バカか、お前が夜襲をしてきただけだろ」
「は!?」
我に返ったように俺を見る。そしてなんか汗を流していた。
「そうだったー！　使命を優先して私が卑劣な手を使ってしまっただけだったー！」
……なんだろうか。完全にふざけているようにしか見えない。馬鹿がやってきたとしか思えん。
しかし何なんだコイツは。
ラフタリアの攻撃に反応するわ、グラスの攻撃を弾くわ、動きも妙に素早いし、攻撃も重たい。
気になるのは持っている剣だ。
剣……というところに違和感がある。霊亀の心の盾と似た装飾が施されている。

形状もなんか気になる。柄の部分の宝石や鍔の部分の形状……いろんなところが剣の勇者、錬が持っていた剣に似ているように見えるのだ。そしてスキルっぽい攻撃までしてくるときたもんだ。
「だが、たとえ多勢に無勢となってしまったとしても、私はお前等を倒してみせる！」
「これだけの人数相手に勝てると思ってんのか？」
なんか俺が三下の盗賊みたいな台詞を言っているような気がするが、しょうがない。
「尚文、それ負ける側の台詞」
「うるさい。対人ができない奴はせいぜい下がって援護でもしてろ」
「酷い！」
絆が人間相手に戦えるはずもない。
多分、人間だよな。見た感じ草人でもスピリットでもない。
「やってやる！」
ヨモギが俺に斬りかかってくる。
ま、この中で男は俺一人だし、一番手出しがしやすそうな場所に立っているからな。
「おっと！　エアストシールド！」
ガツンとヨモギの剣をエアストシールドで受け止める。
「何かする気だな！　そうはいかない！」
思い切り踏み掛かろうとしたところで警戒してまたも下がろうとしてる。
またそれか。盾の勇者がどんな奴なのかキョウから聞いていないのか？
「セカンドシールド」
ヨモギが下がる直前、膝の後ろに二枚目の盾を出現させる。
「うお!?」
「ドリットシールド」
思い切り体勢を崩し、仰け反るヨモギにトドメとばかりに胸辺りに三枚目の盾を出現させる。
こう……あまりにも仰け反った体勢だったので、その体勢を維持しようものなら仰向けに倒れそうな感じだ。
かなり体が柔らかくないとできないな。脛だけで立つってのは。

そこから腿と腹筋で起き上がろうとしているところに盾を出したんだから実質押さえつけたようなもんだ。

「ひ、卑怯な！」

倒れてないけど、こう……倒れる直前の体勢でどうにか踏ん張ってるな。

「うわ……凄い体勢」

「ラルクもアレをやられて戦いづらかったと言っていました」

「さすがは盾の勇者だね」

絆とグラスが他人事のようにのんきに話している。

「何がさすがなんだよ。見てないで戦え！」

「行きます！」

「フィーロも手伝うよー」

「ふえぇ……やっていいんですよね？」

ラフタリアがその隙に追撃をしようとし、フィーロが魔法を唱える。

リーシアは……オタオタと札を取り出して投げようとする。

俺は念には念をと剣を持つ手を掴もうとしている最中だ。

……この距離じゃ間に合わないな。

ならば！

「チェインシールド！」

エアストシールド、セカンドシールド、ドリットシールド。

この三つを繋ぐように鎖が伸びる。

鎖がヨモギを捕らえるとヨモギを中心に三つの盾がグルグルと回転し始めた。

「くっ……」

コンボだな。丁度良い、そのまま生け捕りにしてキョウの情報を吐かせてやる。

「はぁ！」

ヨモギが剣を地面に突き刺すと辺りから火が噴き出して鎖と一緒に盾が全て破壊されてしまった。

万能な剣だな、おい。どっかの剣の勇者様もこれくらい強かったらよかったんだがな。

なんて愚痴っていても仕方ない。

「やるじゃないか。だが、私は負けてはいられないのだ！」

ヨモギがそう叫んだところでラフタリアが刀で素早く斬りつけ、絆が擬餌倍針……次の一撃を二倍にする効果のあるスキルのルアーを当てる。

「瞬刀・霞一文字！」

上手くいけば一刀両断だな。

ラフタリアの高速で放たれる横一文字がヨモギに決ま――

「受けるがいい！　龍点闘技！」

剣に力を込めたかと思うとヨモギは残像を残し、ラフタリアの剣線に合わせて斬り裂いてきた。

「な――」

ガツンとラフタリアの刀とヨモギの剣がぶつかり合って相殺される。

「まだまだ！」

「く！」

ヨモギがラフタリアの刀を弾いた後、追い打ちとばかりに懐に入り込んで突きを放つ。

させるか！

「流星盾！」

ガツンと敵の攻撃を弾く結界を生成させて、ラフタリアを守りヨモギを弾き飛ばした。

そこに追撃をしたのがフィーロだ。

「ツヴァイト・ウインドカッター！」

手を振るってフィーロが何度も風の刃を飛ばしたが、その全てが叩き落とされてしまった。

「おー……ごしゅじんさま、あの人強いよー」

「わかっている。今は前に集中しろ！」

「妙な攻撃をして……これが異界の敵の攻撃だというのか！」

「ちっ……それはこっちの台詞だ」

「尚文、あの剣、なんか変じゃない？」

言われて俺はヨモギが持っている剣をよく見る。
剣の宝石部分が目玉のように動いているように感じる。
なんだあれ……？
「もっと！　もっと力を！　キョウが作ったこの武器を私なら使いこなせるはずなんだ！」
カッと剣が赤く発熱して三日月形の光が俺に向けて放たれる。
「ぐぅ……」
流星盾があっても耐えきれるかわからない。
盾を前に出して構えると、流星盾がアッサリと砕かれる。
そして俺の盾にぶつかり、ガツンガツンと音を立てた。
「うらぁ！」
方角を逸らして飛んでくる光を逃がす。
すると弾いた方角にあった壁が切り抜かれる形で空へと飛んでいった。
微妙だと思っていた盾の効果、受け流しに助けられるとはな。役に立たないものなんてないってことか？
「まさかこの攻撃に耐えるとは……だが、お前達のような悪人相手に私は負けるわけにはいかない！」
再度、あの攻撃を放つのか!?
そう思った時、砕けた流星盾の破片が辺りに浮かんでいるのに気付いた。
なんで砕けたはずなのに消えずに漂っているんだ？
いや、考えてみれば俺は盾に完成したアクセサリーを付けていたんだった。
今までの傾向からこれだけで終わりとは思えないが……。
そう思った直後、砕けた破片がヨモギに向けて飛んでいく。
「何!?」
ヨモギは剣を使って飛んでくる破片を叩き落とすが、大きく隙ができた。
どうやら砕けた流星盾が相手に向かって飛ぶ効果があったようだ。
「珍妙な攻撃の後は防御結界を犠牲にした攻撃だと。どこまでも面倒な奴だ」
どうにかして応用する手はないか？

流星盾の長所はクールタイムの短さとSP効率の良さだ。その上、特にカウンター効果のない盾でも砕けた後に攻撃ができるんだから、良いことずくめだ。
だが、いい加減、ストレスが溜まってきていたんだ。暴走の危険性があるからといってためらっていられない。
ラースシールドを使って焼き払うか考えよう。
「グラス、いい加減本気で行かないなら俺が全てを焼き払うがいいか？」
「ナオフミ様!?　まさかアレをやるつもりですか？」
「そうだ。フィーロがどうなるかも注意すべきだがな」
「フィーロもがんばるー」
「やめてください！」
俺が何をするか察したのかグラスが止めに入る。
「キズナと私達の家を吹き飛ばす気ですか！」
「そうでもしないと生半可な攻撃じゃビクともしないだろ」
ラフタリアとグラス、そしてフィーロの攻撃を全て叩き落としたような奴だろ？
リーシアが下手に近づいたら突き殺されそうだし、俺でさえも耐えきるのがギリギリな気がする。
絆は人間相手じゃ話にならない。
まあこれだけ騒ぎを起こしていたら城の方から応援が来そうだけどな。
現在、戦争の準備をしている最中なんだし、こんな状況で乗り込んでくること自体が実際は愚かなんだ。
どちらにしても、この馬鹿を仕留めるには強力な攻撃を放つ必要があるだろう。
それとも……。
「ラフタリア、幻影剣は使えないのか？」
「できなくはないですが、多分気付かれますよ？」
今のところラフタリアは元の世界でのフィーロ並みの戦闘力がある。
最近はスキルばかり連発していたが必殺技を放つことはなくなったよな。
使えなくなったのか？
「陰陽剣とか八極陣天命剣は使えないのか？」

「うわ……本当、尚文はそういうの得意だよね……」
「ですがキズナ、好機なのも事実です」
「うん、わかってる」
いいから早くしろ！
と叫ぶ暇もなく突っ込んできたヨモギの剣を受け止めて……盾だけど鍔迫り合いというのか？ ジリジリと俺が耐える。
そういやこういう状況で盾を変化させたことはなかったな。試してみるか。
カウンター効果のない白虎クローンの盾から……別の、魔象の盾という、この前の波で絆達が戦ったボスの盾に変える。
もちろん強化済みだ。強化素材に関しちゃグラス達が調達してくれているから助かるな。

魔象の盾　C
能力未解放……装備ボーナス、防御力30　騎乗時闇耐性向上　人力車技能向上4
背負い時能力上昇（中）
専用効果　魔象の牙（会心）

元々はフィロリアルシリーズにもあった騎乗能力補正（強）だったけど、重なるから防御力に変化したみたいだ。
他の技能は知らん。誰が人力車など引くか！　論外だ！
背に乗せた奴の能力が上昇するとかあるのだろうが、絶対にやらん。
俺がラフタリアを肩車して戦えとでもいうのか！
なんて考えを放棄して戦闘中に盾を変化させる。
カッと盾が変化してヨモギの剣を受けてカウンター効果、魔象の牙（会心）が作動する。
「何⁉」
盾の装飾となっていた魔象の牙の部分が光を宿して、ヨモギに向かって黒い光の弾を放つ。
「ぐ……だが、まだまだ」

「使えなくはないですよ」
「よし、こちらで時間を稼ぐ。アイツをこの前みたいに刻んでやれ」
「はぁ……わかりました」
ラフタリアは刀を横にして手を添えて魔力を溜める。
「む！　隙あり！」
そこにヨモギが突っ込んでくる。
「それを隙とは言わん、大技の準備をさせただけだ。技が出るまで、俺が守るんだよ」
「ならば貴様を潰せば勝てる！」
「フンッ！　お前みたいな雑魚にできるのか？」
上から目線で挑発じみた言い方をする。するとヨモギは顔を真っ赤にして剣に込める力を強めた。
「なんだと！」
よし、この調子だ。コイツの注意を俺に向けられれば有利に進められる。
ラフタリアの必殺技だけじゃなく、フィーロやグラス、絆が安全に攻撃できるからな。
何より、こんな厄介な奴の攻撃を俺以外の者に受けさせるわけにはいかない。
もっとコイツを激怒させて、俺にだけ怒りを向けさせる。
それには……思いついた。
俺はこれ見よがしに下衆な笑みを浮かべながらヨモギを眺める。
「何がおかしい！」
「いや？　キョウの顔を思い出したら笑いが込み上げてきてな」
「なに？」
「あの口だけの根暗は元気か？　いや、元気ではないだろうなぁ？　お前みたいな奴を送ってきたところを見るに、俺のことが恐くて恐くてしょうがないんだろうよ。あいつが恐いよーたちゅけてーなんてな、ははは」
「貴様ああああぁぁぁぁ！」
掛かった！　ヨモギが先ほどよりも怒りを帯びた鋭い眼光を俺に向けている。
これでコイツは俺を攻撃することで頭がいっぱいになるだろう。

至近距離からの攻撃ではさすがに避けきれまい。
鍔迫り合いをしているお陰か、光弾が何度か飛び、ヨモギに命中するとバシンと良い音がした。
「うぐ……」
ヨモギは強く俺を突き飛ばそうとして失敗し、大きく後ろに下がる。
光弾が当たった肩に手を当てている。打ちどころが悪かったか？
「なんて頑丈で厄介な攻撃をしてくるんだ。私に傷を付けるとは」
どうやら魔象の牙（会心）とは時々、クリーンヒットする光弾を放つ効果があるようだな。
「あー、ごしゅじんさま、フィーロなんかがんばれそうな気がするー」
「ラフー！」
ラフちゃんとハミングファルコン形態に変身したフィーロが事もあろうに俺の肩に乗っかって魔法を唱え始めた。
「フィーロ行くよー、ラフちゃんもあわせよー」
「ラフー」
詠唱が速い。なんでだ？
そう考えている間もなく、二匹が力を合わせて魔法を紡ぐ。
「がっしょう魔法ー『かざぐるま』」
フィーロとラフちゃんが同時に魔法を放つと辺りの明かりが明滅を繰り返して、一瞬にして闇が辺りを支配する。
目がチカチカするな。
ん？　闇の中から風で作られた手裏剣みたいな光る何かがヨモギに四方から襲い掛かる。
「面白い。このような攻撃があるのか！」
なんか戦いを楽しんでないか？　コイツ。
「グラス、お前も黙ってないでやれ！」
「わかっています！」
扇を振りかぶり、闇に乗じてグラスが再度、輪舞攻ノ型・花風を放ってヨモギを追い込む。
「これで私を追い詰めたつもりか！」
ヨモギは地面を再度突く。またあの攻撃で迎撃する気か？

そう思ったが、どうやら違ったようだ。
柄の部分にある目玉みたいな装飾が、瞳孔を広げて光線を放ってくる。
被害が出ないように俺が前に出て受け止める。
「そこか！」
「いいえ……既に準備は終えました！」
闇に隠れたラフタリアが大きく刀を横に向けて一の字に斬った。
なんか凄く格好良く見えるぞ。ヨモギに後ろから斬りつけているけどさ。
「八極陣天命剣！」
ズバッと真横にラフタリアの必殺技が放たれた。陰陽を模した複雑な紋章みたいな文様が浮かび上がって真っ二つになる。
へー……前はあやふやにしか見えなかったが、そんなのが浮かんでいたのか。
これは眷属器に選ばれたお陰で、はっきりと見えるようになったんだな。
「うわ！」
ちっ！　外したか？
そう思ったがヨモギは剣で受け止めていたのか火花が散る。
「く……まだまだ私は諦めない！　ここで諦めたらキョウに顔向けできん」
「あんな奴に顔向けできなくても別にかまわないだろ」
「キョウの悪口は許さん！」
「ナオフミ様！」
ラフタリアに斬りかかるかと見えたヨモギだったが、俺の台詞に激怒したのか俺に剣を向ける。当然盾で受け止めるが……俺はそこで違和感に気付いた。
「おい。お前の剣……」
剣の柄にある宝石……目玉の部分の瞳孔が大きく見開かれていてなんとも嫌な気配を醸し出している。細工師の勘というわけじゃないが、なんか嫌な予感がした。
今すぐコイツに武器をどこかに捨てさせないと危険な気がする。

「お前の武器、暴走しているぞ。今すぐ捨てろ！」
「何を言う！　キョウの作った発明品が暴走などするはずないだろ！」
だが、先ほどから妙に……俺だけなのか心臓の鼓動のような何かが盾を通じて伝わってくる。
それが少しずつ速度を速めているのだ。
……今にも、爆発すると告げるかのように。
「いいからその剣を放せ！」
相手の心配をしているわけじゃない。こんな所で暴走して爆発でもしたら俺が困るからだ。
「敵を前にして武器を手放すおろか者はいない！」
ちっ……強情な奴だ。
ラフタリアに仕留めるように命令を出そうと目を向けたその時。
ヨモギの手に札が命中した。
一瞬、俺とヨモギが同時に札に目を向け、投げたと思しき相手に目をやる。
「あ、当たりました！」
よし！　リーシア、よくやったぞ！　やっぱり投げることに才能があるんじゃないか？
「あつ!?」
ボッとヨモギの手にくっついた札が燃え上がって、ヨモギが剣を手放した。
ヨモギはアッと声を漏らすが遅い。とにかく剣を蹴って距離を離さないと――
と蹴ろうとした瞬間、剣から蔓のような何かが伸びてヨモギの手に纏わりつく。
「な、なんだ!?」
この時に至ってやっとヨモギは自らが使っていた武器の異質さに気付いたようだ。
「う……ぐぅううううう」
なんか嫌な感じにヨモギの手に纏わりついた蔓がヨモギから何かを吸い上げる。
アレは……血か？　ついでに魔力とかいろんなものを吸い上げながら毒でも入れていそうだな。
「はぁ……はぁ……」
目が血走ったヨモギが剣を高らかに掲げて俺に向ける。

「か、体が……勝手に！」
俺は咄嗟に盾で受け止めたが、あまりにも強い力で叩きつけられて後方に吹き飛ばされる。
幸い、転倒することなく済んだが、下手をすれば壁に叩きつけられていたぞ。
ヨモギの持つ剣が少しずつ光を強めている。
「早く手を放せ！」
ヨモギも異常に気付いて剣を持つ手をもう片方の手で解こうとするが、巻きついた蔓がそれを許さず、更に強く締めつける。
「くうう……」
やばいな。なんか爆発とかしそうな雰囲気だ。
この場にいる奴等を守るために、俺は前に立って盾を構える。
敵の命に関しても考えないわけじゃないが、助けるのは無理そうだ。
ならば考えるのは如何にして味方の被害を最小限に抑えるかだろう。
「擬餌倍針」
絆が今にも爆発しそうなほど煌々と光る剣に、ルアーを当てる。
「諦めないで！」
そして鮪包丁に変化させてから懐に入り込み、力を込めた。
「血花線！」
絆の決め技である、魔物限定だが相手をバラバラにするスキルを……怪しげな剣に放った。
が、かなりズタズタにしたものの剣を折るには今一歩足りない。ものすごく硬いな。
ヨモギに至っては無傷。
しかしヨモギの手に巻き付いていた蔓のような何かだけが切り裂かれている。
ガランと剣がヨモギの手から離れた。
「よし！　よくやった！」
俺は素早く剣を掴む。
すると新たなターゲットとばかりに俺に向かって蔓が伸びてきた。

ふん、俺を誰だと思っていやがる。
お前のような変な剣型の化け物の攻撃など受けるものか！
「うりゃあああああああ！」
思い切り勢いをつけて剣を穴が開いた家の外に……投擲した。
「任せてください！」
グラスが更に輪舞攻ノ型・花風を放って、不気味な剣に追撃を仕掛ける。
外に飛んでいった剣はグラスの遠距離攻撃を受けてドンドン空高く飛んでいく。
よく当てるな。ホーミング性能でもあるのだろうか？
やがて……空中で剣が爆発した。
「あんなのが目の前で爆発してたらどうなっていたことか」
「く……キョウの発明がまさかこんなことになるだなんて」
腕に重傷を負ったヨモギは片方の手で腕を押さえて痛みに呻く。
「さて……武器の無くなったお前はこれからどうする気だ？　しかもあの武器に魔力とかいろんなものを奪われて立つこともやっとのようだが？」
それとも、このまま逃げられると思っているのか？
「残念だが俺達には狩猟具……逃げる相手を狩ることに関しては右に出る者がいない聖武器の所持者がいるんだ。逃げるなら逃げるがいい。狩りの時間だ」
「尚文に言われるとオレの武器が外道の道具に見えるから不思議でしょうがないよ」
「キズナ、気にしてはいけませんよ！　この人は、そうやって人を脅す趣味があるんです」
グラスが喧しいな。まあ……若干事実な気がしないでもないが。
「あー……まあ、ナオフミ様にここは任せておきましょう」
「ラフ」
「おっきなお日様だったね。あ、光がご主人様のもとへ集まってくるね」
爆発した光が、まるで雪のように俺に向かって集まるように降ってくる。
これはどういうことだ？

「さて、どうする？」
とにかく、夜襲をしてくるような奴は報いを受けさせねばならん。生け捕りにして拷問でもして情報を吐かせるべきだろう。まあ、素直に話しそうな奴だけどさ。
「く……殺せ！」
降参したのか両手を上げて、すっげーお約束の台詞を吐いたぞ。
「よし、じゃあ脂ぎったおっさんにコイツを犯させるぞ。ラフタリア、近場にオーク……豚の亜人に似た魔物はいないか？」
「どんな拷問だろうと耐えきってみせる！」
ヨモギが悔しげに答える。
「くく、五体満足でいられると思うなよ？」
「どこからそんな発想が出てくるんですか！」
「尚文、何かオタク知識で得たものを参考にしてるでしょ。主に十八禁方面の」
絆が半眼で俺を見る。お約束だろ？
むしろエクレールが言ったらピッタリの台詞だな。奴の役職で敵に捕らえられた時に言う台詞だぞ。
「とにかく、ヨモギといったっけ、君を捕縛させてもらう」
こうして俺達はキョウからの刺客らしき女、ヨモギを生け捕りにすることに成功したのだった。

五話　条件付きの同行

「とりあえず城に連行しようか」
「牢屋だな、自警団の詰め所とかもありそうだが」
牢屋の格子って壊せそうだよな。ステータスとかで。
俺を召喚した方の世界だとLvリセットだけど、この世界だとそういうのはないらしい。
「城に連れてった後は拷問して情報を吐かせるんだな」

「なんでそこまで念を押すのかわからないけど、そうだね」

「理由は戦争に勝つためだろ。キョウの発明品とやらを持ってきた奴だぞ。相手がどのくらい脅威なのか知るには良い機会だ」

「お前等に話すくらいなら舌を噛み切って自害してくれる！」

ヨモギが思い切り舌を噛んだ。

「ツヴァイト・ヒール」

だから即座に顔に手を付けて回復魔法だ。

「ぐ……自害を邪魔しただと!?　おのれ！」

「とりあえず口に布でも入れておくか」

「ムガ——」

ヨモギの口に自害を阻止するためにぼろ布を押し込む。

あ……これ雑巾だった。とんだ拷問だな。やってから後悔した。

ヨモギが苦しそうに呻いてる。

「回復魔法ってこういう時に便利だね」

絆は俺が雑巾をヨモギの口にねじ込んだのに気付いていない。

ラフタリアとグラスは気付いていて、言おう言おうとタイミングを狙っている。

「まあな」

そこに緊迫した様子で兵士がやってきた。

「キズナ様とグラス様！　異界の勇者様一行！　ラルク様が応援を要請しております！」

「一体どうしたの？」

「敵国の先兵が城を襲撃しています。その者達の強さは化け物じみていまして、ラルク様だけでは対処しきれない状況となっております！」

立て続けの襲撃か……キョウからの刺客と見ていいな。

奴の目的は……俺達を倒すことだろう。

となれば単純な嫌がらせだとは考えづらいし、本気の攻撃だろうな。

俺がヨモギの方に目を向けると……なんでお前が驚いたみたいな表情してんだ？

見た感じ猪突猛進馬鹿みたいだから知らなかったとかか？

ま、コイツに作戦を教えたらペラペラ喋りそうなのを見透かされていたんだろう。

ヤクザとかの用語だと鉄砲玉とかいう使い捨ての殺し屋扱いだったとか？

「急いで応援に行こう！」

「そうだな。だが……何か引っかかるな」

俺の言葉にグラスが頷く。

「そうですね。姑息な手段を好む相手です。何か裏があると思った方がいいかもしれません」

考えろ。俺達に対して効果的な攻撃方法とは何だ？

俺がキョウだったら……キョウの国が支配下に置いた国の技術を考えなきゃいけない。

奴はいろんな発明というか霊亀を操るようなことまでできた奴だ。俺の予想を大きく超えるような真似をするに違いない。だからあくまで憶測の次元だ。

それでも、俺達が困ることになる何かをしてきているはずなんだ。

俺の知る範囲でできそうな予防線……これまで絆とグラスがいるこの世界で見聞きしてきたもの……そしてラフタリアと再会するまでいた敵地でのことだ。

どうやらこの世界は様々な新発明がされている世界らしい。

「俺達はどうせラルクの所へ行くだろ？」

「うん」

「その時に使うのは俺のポータルスキルか絆達の帰路の写本だろ？」

「そうだね」

ありそうなのは……俺はポータルシールドを使ってラルクのいる城へ飛ぼうとしてみた。

が、謎のジャミングを受けているのか失敗した。

「今、ポータルは邪魔をされている。相当厄介な状況になっていると見ていいな」

「急いで行かなきゃダメなんじゃないの!?」

焦る絆とグラスを宥めるように両手を広げて前に出す。

「昂人が転移妨害を可能にする機材を設置して、特定の相手以外を帰路の写本を含めて弾くようにしてくださっていますが……」

ああ、帰路の写本はそうやって妨害しているんだったか？

「どちらにしても城は陽動で本命はそっちかもしれない。ラルク達が城で苦戦しているとなれば龍刻の砂時計に何が起こるかわかったもんじゃない」

「とりあえずオレの帰路の写本で砂時計に行って辺りを確認してから城に行こう」

「そうだな。で、コイツはどうする？」

ヨモギを見ると、何やら真面目そうな表情で静かに座っている。

「お前も来るか？　上手くすれば逃げられるかもしれないぞ？」

俺が挑発まがいに言うと激昂したように体を前に出して暴れる。

「何か言いたげだけど舌を噛み切られたら厄介だしね」

「かといって編成で仲間に入れないと転移に混ぜられないしな。面倒だから兵士に預けてここで転がしておくのが妥当か？」

「そうだね」

適当に編成を挑発まがいに飛ばしてやる。

おや？　了承されたぞ？

連れていくわけないだろ。と、その場で弾いてやる。

すると更に激昂したのか、もがいてやがる。

「何やってんの？」

「いや、コイツが連れてってもらえると思ったのか、編成飛ばしたら了承したから即座に脱退させてやったんだよ」

「同行する気があるなら連れていけばいいじゃないか」

「何を言ってんだ？　さっきまで戦う気満々だったじゃないか。そんな奴連れていけるか」

「そうだけど……」

「モガ！　モガモガモガ！」

「何か言ってるね。どうしようか？」

「落ちつけ、これが陽動じゃないと言い切れるのか？」

「ですが悠長に構えている暇なんてないですよ」

「絆、グラス、よく考えるんだ。キョウのいた国はそれぞれ眷属器のあった国なんだぞ？」

刀の眷属器はラフタリアが手に入れたお陰で国の権威は地に落ちているが、鏡の眷属器があった国もキョウは落としたことになる。つまり技術の吸収をしているはずだ。

「奴等の狙いは龍刻の砂時計じゃないか？」

「え？」

「絆も知ってるだろ。ラフタリアにバッサリやられた奴が再現した技術だ。アレを敵軍が実行したらどうなる？」

そう、どういう原理でできるようになるのかはわからないが、帰路の龍脈という技術の再現を俺達に対してしてきたらどうなる？

龍刻の砂時計は国の首都となるべき場所に大体設置してある。

敵国の真ん中に兵士を無限に送りつけるようなことができたら、とんだ兵器の誕生だ。

なにせ移動によるリスクも無ければ物量で攻めることだって可能になる。

もちろん、Lv概念のある異世界での戦争に関しちゃ俺はそこまで詳しくはない。

けれどそんな真似をされたら、いくら絆達が強いといっても相当きついことになる。

いや、もしかしたらこの戦略でキョウの国が勝利していた可能性だってゼロではないはずだ。

まあ発明の前後が逆ではあるが、キョウは既にこの技術を手に入れていた……かもしれないことを誰が否定できる？

「絆、帰路の龍脈の使用条件はなんだ？」

「一度登録した龍刻の砂時計へ、砂時計を使って移動できる」

「特別な機材が必要になるだろうし、再現するのに何か力が必要かもしれないがな」

「そのことは私達も懸念していて、警備は厳重なはずですが……」

まあ、グラス達も考えないはずはない。

既に国の龍刻の砂時計は閉鎖状態で、勇者や眷属器の所持者以外は近寄れないようにしてはいるそうだ。

「警備を突破して登録でもされたらやばいな。いや……既にされていないと断言できるか？」

一応聞いてやるか。雑巾を口にねじ込んだままだったんだしな。
更に自害とか魔法を唱えようとしたりしたら押さえ込めばいい。
俺が布を取るとヨモギはペッと舌を出して呻いた後にキッと俺を睨む。
「なんだ？　何か言いたいなら今のうちだぞ？」
「何が起こっているのだ！」
「さあな。キョウからの刺客はお前だけじゃないってことなんじゃないのか？」
「そんなことはない！　これは私が一人で行ったことだ」
「信用されてなかったんだろ。もしくはいいように利用されていたとかだな」
現にあの発明品はとんだ暴走を引き起こしていたわけだしな。
下手をすればヨモギ自身も爆発に巻き込まれて死んでいた。コイツがキョウにとってどんなポジションなのかは知らないが、上手いこと利用されているのは間違いないだろ。
「確認をさせてくれ！」
「お前、自分の立場がわかってるのか？」
夜襲をしてきて返り討ちにあった奴を、事実を確認させるために連れていけとか何様だよ。
とはいえ、ものすごく素直な馬鹿だからな。真面目っぽいし……。
「キョウがそのような真似をするはずがない！　少し捻くれた発想をしているが、沢山の人を救っている良い人なんだ！」
「お前の中のアイツってどんな人物なんだ？」
ぶっちゃけ、ラフタリアの中の俺みたいに美化されてそうな気がする。
俺はラフタリアの理想というか、良い親代わりでいたいと思うがな。
だがキョウは違う。アイツはリーシアに説教された時に激怒していたからな。
多分、コイツが思っているような奴じゃない。
「どうしますか、ナオフミ様？」
「んー……」
「オレ達の話に聞く耳を持つなら猶予を与えるのも手かもしれないよ」

「何かしたら今度は捕まえることなく殺すがいいか？」
「ああ……私とて敗れた身でこのようなワガママを言ったのだ。どのような結果になろうとも、この身をもって報いを受けよう」
なんで捕まった分際でここまで偉そうなんだ？
コイツのために何かしてやる義理なんて全くないんだが……。
「コイツ、俺達の言うことが間違っていた場合、処刑されるまでの間にキョウが助けに来るとかきっと思ってんぞ」
「私の考えを読みとった!?　まさか……読心術の心得でもあるのか!?」
すっげー単純。そんなの仮にあったとしても使うまでもない。
「じゃあ取引をしようか。オレ達は君に確かめる猶予を与える。君はもしも君の信じたくない結果が真実だったら、君の知る情報を素直に話す。それでいい？」
「わかった。私とて武士だ。絶対に約束は守ろう」
馬鹿正直だもんな。自分の立場をまるで理解していないのに、こうポンポン約束していいのかね。
「絆、グラス、もしもコイツがおかしなことをしたら間違いなく仕留めろよ。俺はそんなに甘くないんだからな」
「わかってるよ」
「ヨモギといったか。自分の信じたくないことを知って現実逃避や逃げの選択をするんじゃないぞ。したら拷問させて吐かせるからな」
「私がそんなことをするものか！」
どうだかな。バカ正直にメルヘンな思考が入った奴かもしれん。
下手に暴れられたら厄介だな。こういう時に奴隷紋がこの世界にあったら便利なんだがな！
「ナオフミ様、リーシアさんをチラ見しながら舌打ちしないでください」
ラフタリアに注意されてしまった。
しょうがないだろ。現状、奴隷紋はリーシアしか使えないんだからさ。
「大方奴隷紋があればいいと思っていたのでしょうね」
完全に読まれてしまった。まあ、便利なものだし。
「ああ、前に言ってたね。じゃあ……」

と、絆が半壊した家の倉庫から札を持ってきた。
「じゃーん、命令札。使わないと思ったけど、案外必要になるもんなんだね」
「キズナ……まさかそれを？」
「ここでヨモギさんが約束を守ることを保証するには必要なものだと思うよ？」
ヨモギは絆が持ってきた札を見てから静かに頷く。
「承知した。これで約束をしてくれるのなら喜んで苦難を受け入れよう」
なんだ？　なんか便利そうだな。
なんとなくフィーロが無理やり付けられた使役札に似てる気がする。
「なんだそれは？」
「言うなれば魔法で相手に命令する札だよ。品がないとは思うけど。尚文の認識だとキョンシーとかわかる？」
ああ……顔面とか帽子に札が垂れ下がったゾンビね。
「重度のものだと付けられると意識が沈み込んで意のままに操られるんだ。これを上手く使えば命令違反時だけ動けなくすることができるよ」
「危なそうだな。特に俺達とか付けられたらアウトじゃないのか？」
「抵抗できないものじゃないし、聖武器の持ち主や眷属器持ちには効かない。術者よりも力が高ければどうとでもなるしね」
ふむ、どうやら奴隷紋よりも劣る品みたいだな。
「抵抗されたらどうする？」
「札を破り捨てるまでの間に仕留めるしかないね」
なるほど、抵抗している間にトドメを刺せば問題はない。
ヨモギは奴隷の立場に落とされるが、付けられた札を剥がそうと思えば剥がせる。
その間に、俺達が仕留めれば余計なことはできない。
「じゃあ、オレから離れたら罰則が働くように調整して貼り付けるとしようか」
と言いながら絆がヨモギの額に札を貼り付ける。
この時、かなりの魔力を入れているのに気付いた。

パチパチと静電気を起こしながらヨモギに貼り付いた札が垂れさがる。
カッとヨモギの足元に東洋風の魔法陣が浮かび上がっていた。
グラスが絆の唱える魔法の補助をしているように見えたぞ。
最後に絆が札に血を塗りたくって文字を刻む。ヨモギも若干苦しそうに呻いている。
「で、禁則事項を設定して……これでよし。まあ、目立つから付けている間は公共設備とかの使用は不可能に近いけどね」
「上手いこと使えるのがあるんだな。量産して兵士とかを意のままに操ったりできそうだな」
「ある程度耐性はあるけど火に弱いし水にも弱いからね……そこまで便利な品じゃないよ」
「これで私が同行を許可してもらえるなら、剥がそうとする理由もない。さあ、連れていってくれ！」
ま、奴隷紋みたいに信用できるものかどうかわからないが、多少の保険になるならいいか。
「よし、じゃあ行くぞ」
「うん、行こう」
絆が帰路の写本を唱える。
俺達は絆の帰路の写本で龍刻の砂時計に着いた。
辺りには見張りの兵士が待機していて、一応……目立つ敵の襲撃はなさそうではある。
何があっても龍刻の砂時計の警備を怠るなと命じているからな。
城で何かが起こっているにもかかわらず、命令に従っている点は有能なんだろう。
俺の方の世界だと、警備が手薄になるイメージがあるな。なんかその辺りザルな感じだし。
「見た感じ……大丈夫そうだね」
「どこかに先兵がいてタイミングを見計らっている可能性は否定できないな」
「ちょっと注意深すぎない？」
「俺がキョウだったら間違いなくやる。誰かがここで待機すべきだ」
「だから違う！　キョウはそんな卑劣なことはしない！」
俺の提案に反発するヨモギをよそに、グラスと絆は腕を組んで考える。
「そうだな。信頼できる相手……ラフタリア、お前が待っていてくれるか？」

「ですが……」
ラフタリアなら腕も立つし信頼もおける。少し不安だけど、任せておいて問題はない。
「……私がここでしばらく見張っていましょう」
「グラス!?」
グラスが俺の提案を了承して手を挙げ、絆が声を裏返して驚いた。
ふむ、グラスなら信用できる。知恵も武術も状況に応じて使い分けられるだろう。
それにどちらかと言えば部外者の俺達よりも、この国を守る理由が強いしな。
「確かにナオフミの言葉も一理あります。アレだけの騒ぎを起こし、並々ならぬ技術を習得しているキョウがどのような手で来るかを考えたら、ここを守るのも重要だと思えるのです」
「だけど……」
「もしも私の力が必要でしたら照明弾を三つ上げるように城の者に告げてください。急いで駆けつけます」
絆は煙の上がる城を見やってから頷く。
「わかったよ。グラス、ここを任せる」
「クリス、私の代わりにキズナの力になるのですよ」
「ペン!」
ぶっちゃけ役に立っているか非常に怪しいクリスが敬礼して絆の足元に立つ。
「さ、尚文、グラスをここに残させるんだからその分、がんばってよ」
「わかっている。よし！ みんな行くぞ！」
「「はい！」」
ラフちゃんとフィーロを肩に乗せて俺は走り出し、みんなついてくる。
リーシアが転ばないか心配だったが、ついてきているみたいだな。
俺達は煙の上がる城へ走る。見た感じ……城下町はそこまで被害がないようだ。
せいぜい騒ぎに便乗しようとした連中が捕縛されただけっぽいな。
どうなっているんだ？
そう思いながら城門を潜ると、そこでラルクとテリス、そして城の兵士達が、複数の……なんだ？ 人型の化け物を相手に悪戦苦闘していた。

城内では煙が上がり、あちこちで戦闘が行われているようだ。
「だりゃああ！」
ラルクがテリスの魔法援護を受けてスキルを放っている。
が、敵の動きが素早く、避けられてしまっている。
眷属器の所持者であるラルク達よりも素早いというのか？
そんなラルクの隙を衝いて、懐に入ろうとした敵に向けて俺はスキルを唱える。
「エアストシールド！」
ガツンと敵の……ツメによる引っ掻きからラルクを守るように出現させた。
俺が作り出した隙をラルクは衝いて、敵に鎌を振りかぶる。
が、これも避けられてしまった。
「坊主！ それにキズナの嬢ちゃん達！」
「助かりました！」
ラルクとテリスの表情が明るくなる。
「流星盾！」
流星盾を展開して俺はラルク達を守るように前に出る。
すると敵共がピタリと足を止め、俺達を凝視し始めた。
「異界の勇者！ ここで会ったが百年目！」
ん？ なんだ？ 俺達に憎悪の目を向けてくるぞ？
ターゲットはラルク達と俺達か？
相手をよーく見る。若干暗くてよく確認していなかったが人型の化け物……じゃない。
なんだ!? 顔の半分が獣人のようで残り半分が人間、それは体の方も同様だ。
まだらに人と獣人を合わせたような造形をしている。正直、かなり異形だ。
先頭にいるのは白い虎柄の獣人みたいな要素が混じった、片方に纏めたポニーテールの女。
目は半分が釣り目で、もう片方は野獣のような目をしている。

服装は胴着のようだが、戦闘の影響か所々が破けている。
顔の作りは……人の部分だけで言えば良い方なんじゃないか？
他の連中も似たような奴が多い。
だが……なんなんだ？　鳥みたいな羽毛の奴、亀みたいな甲羅を背負った奴もいる。そのどれもがまだらに獣化したみたいな感じなんだ。手もそれぞれ動物っぽい。
こう……俺の世界の方にいる獣人とは根底から何か違う気がする。
あっちはこんな不自然な格好ではない。
人間の部分、顔……こいつ等、どこかで見たことがあるな……どこだ？
「な――」
ラフタリアやリーシア、そして絆が絶句するように相手を指差している。
「どうして君達がそんな姿になっているんだ!?」
絆が叫んだが、う～ん……やばい、俺には誰かわからないぞ。
「ラフタリア」
俺はラフタリアにそれとなく近づいて耳元で囁く。
「あいつ等、誰？」
「覚えていないんですか!?」
「覚えていないだと！　どこまでもふざけたことを！」
ラフタリアの返答に気付いたのか敵は激昂している。
そのまま高速で俺達に向けて持っている武器……薙刀で突いてくる。
「おっと」
流星盾がアッサリ砕けて、破片が漂う。
そして貫通してきた薙刀を俺は盾で弾いてから柄を掴んで受け止める。
すると、周りの連中が更に憎悪を滾らせて突撃してきた。
「死ね！　みんな！　こいつ等を皆殺しにするんだぁあああ！」
「――ですよ。私を盗人扱いした刀の眷属器を欲した人と一緒にいた人達です」

ラフタリアに教えられてやっとわかった。あのクズ二号の取り巻き共か。
奴等の大声で名前がまた聞こえなかったぞ。
どうもクズ二号の名前は耳に入らんな。認識していないわけじゃないんだが。
散らばった破片がクズ二号の取り巻きに向かって飛んでいく。
突撃してきていた奴等は避けきれないが、そのまま受け止めて走る者、甲羅を出現させて防ぐ者と様々だ。
即座に戦闘が再開されてラルクが鎌を振りかぶり、テリスが魔法を放つ。
ラフタリアは抜刀して居合い斬りで数名斬り伏せる。
絆は相手が対人に当たるかわからないので、俺の後ろでヨモギと一緒にいる状態だ。
フィーロとリーシアにも飛び火しないようにしないとな。
「行って！　クリス！」
絆がクリスを投擲した!?
クリスはまるでフィーロのスパイラルストライクみたいに回転しながら突き進んでいく。
掠っただけで、奴等の服や鎧を切り裂いて血を滴らせていた。
なるほど、絆ができる使いやすい攻撃だな。
「ラフ？」
俺はラフちゃんと目を合わせる。キラキラと光るラフちゃんの目。
やってほしいのだろうか？　残念だがラフちゃんはそこまで強くないので、俺の肩に掴まっていてもらおう。もしくはラフタリアの背中にでもくっついていた方がいいな。
「ごしゅじんさま！　フィーロもやってみたい！」
今のフィーロはあんまり近接能力は高くない。正直に言えば援護していてほしいな。
歌を謳うと魔法効果があるみたいだし。
「我慢だ」
「ぶー……」
「その代わり、ラフちゃんと一緒に魔法で援護を頼むぞ」
「はーい！」

フィーロとラフちゃんを背に乗せた俺がクズ二号の取り巻きの攻撃を時に受け止め、時に避ける。
「シールドプリズン！」
盾の檻に閉じ込めて時間を稼ぎ、ラフタリアと鍔迫り合いをしているリーダーらしき女を見る。
「なぜ、あなた達がそんな姿に⁉　一体何があったんですか⁉」
「ふふ、素晴らしい力だろう。お前等に私達の大事な方を殺され、絶望のまま国は友好国であったはずの国に占領されてしまった。もはやこれまでかと思っていたところ、キョウという本の眷属器の所持者が協力してくれたのだ」
「なんですって⁉」
「私達を支配するつもりはない。私達に復讐の機会をくれると……私達はお前等を殺すためなら力を貸す約束をしたのだ」
「そ、それで……？」
「今までの私達では眷属器の所持者にも聖武器の勇者にも勝てない。だから……あの方が残した遺産である四神・四聖獣の複製技術を流用し、キョウは私達に大いなる力を与えてくださったのだ」
「まさか……それが今の君達の姿だというのか⁉」
絆が唖然として言った。
すると女共は頷いた。
「そうだ。お前等を倒せば、キョウは元の姿に戻してくださると言っていた。お前等さえ倒せばいいと、占領されて居場所さえ失った私達に道を指し示してくださったのだ！」
「「だから！」」
クズ二号の取り巻き共は力を強めて各々……人間とは思えない攻撃を放った。
「「死ね！」」
虎のような奴は風を纏い、武器に宿らせて突いてくる。
鳥のような奴は羽から火を立ち上らせて、飛ばしてくる。
亀のような奴は岩を作り出して俺達に降り注がせた。
龍のような奴は……いないみたいだ。
「エアストシールド！　セカンドシールド！　ドリットシールド！」

更に流星盾を展開させてそれぞれの攻撃を防御させる。
俺は意識を集中し、ツヴァイト・オーラをラフタリアから順に唱える。
「こんな……非人道的なことをキョウがするはずがない！」
そこで大きな声を出してうろたえているのはヨモギだった。
絆の肩を掴み、負傷している手とは反対側の手で転がっている剣を握りしめる。
「狩猟具の勇者、頼みがある。私に……戦う許可をくれ！　キョウがこのようなことをし、復讐する機会を与えるなどという世迷言を言う者を止めねばならない」
「オレ達に攻撃しようものなら罰を与えるけど、いい？」
「もちろんだ！」
ヨモギの言葉に絆は頷く。
そしてヨモギが飛び出し、ラフタリアと戦っている相手に斬りかかった。
「邪魔をするな！」
「力によるごり押し……避けられなくはない！」
ヨモギは敵の攻撃を紙一重で避け、ラフタリアと共に斬りつけながら怒鳴る。
「お前等、本当にキョウがそのようなことを仕出かしたというのか⁉」
「私達は嘘を言わない！」
若干トリップしたような表情でクズ二号の取り巻きは答える。
「そしてお前等を殺せば――をちゃんと蘇らせてくれるとおっしゃったのだ！　私達は確かに見た。二つに裂けた――様が息を吹き返したのを！」
「死者の蘇生⁉」
「そんな技術までキョウは使えるようになっているのか⁉」
ある意味凄いぞ。死んだ奴が蘇るとか、創作物の世界でも禁忌とか言われていたりするぞ。
せいぜい、昔のＲＰＧくらいじゃないか？　だが、それならなんでクズ二号を刺客として使わない？
何か裏があるはずだ。
「お前等の言うキョウを名乗る奴は私の知るキョウではない！」

そう言ってヨモギはラフタリアが困惑する中、クズ二号の取り巻き代表を追い詰める。

「おのれ！　まだだ！　まだ、私達は力を出し切れていない！」

怪しげなオーラとでもいうのか？　なんか奴等の獣の部分が発光してボコボコと膨れ上がっていく。正直、かなり怪しい。

俺の方もクズ二号の取り巻き連中の攻撃を受け止めるのに苦戦してる。

数が多い。更に全員、それなりに強いのが理由だ。

霊亀の核があった、あの部屋での戦闘に似ている。

霊亀の使い魔（親衛型）がこれくらい強かった。

「ツグミ！　受け取って！」

そこで新たにやってきたクズ二号の取り巻きがラフタリアとヨモギが戦っている女相手に、槍を投げ渡す。その槍を見て俺達は絶句してしまった。

「アレは⁉」

そう……ヨモギが先ほどまで使っていた怪しげな武器とほぼ同じ雰囲気を宿した槍が、クズ二号の取り巻き代表の手にあったからだ。

六話　改造された者達

「はぁあああ！」

ツグミと呼ばれたクズ二号の取り巻き代表は槍を掲げて大きく回転させた。

ただ、それだけだったのに強力な衝撃波が巻き起こって、ラフタリアとヨモギが吹き飛ばされる。

「ぐう……」

「く……」

辛うじて受け身を取った二人だが、所々出血している。

危ないな。咄嗟に前に出ようと思ったが間に合わなかった。

先ほどのヨモギの動きから考えるに、あの武器を持つだけで能力が強化されると見ていいだろう。

今のヨモギは言っては何だが、普通だ。

ラフタリアよりも速度、力で劣る。能力的な感覚で言えばエクレールと同等か。

いや、エクレールよりは強いな。

刀の眷属器に選ばれる前のラフタリアくらいと表現するのが一番近いかもしれない。

こう……地味に能力が高い。眷属器の所持者にも仲間を育てた時の能力向上はあるらしいから、キョウの仲間としての能力の上昇があったのだろう。

しかし、強いことは強いんだが、決め手に欠ける。

フィーロの方が切り札となっていた頃のラフタリアと同じだな。

そんな、地味な強さを持っているヨモギと、眷属器を持って強さとしてはグラスより若干低め程度にまで伸びたラフタリアが避けられずに吹き飛ばされたとなれば、ものすごい能力を得ていると判断していいだろう。

しかも軽く薙ぎ払っただけでこの威力、スキルなのか技なのかよくわからないあの攻撃を放たれたら痛いだけじゃ済まない。この場合、俺が耐えてどうにか押さえつけるのが最善だ。

だが、それよりも大きな問題が転がっている。

「そんな……キョウがあの武器を授けている……」

ヨモギの顔色が悪くなってきた。

キョウの本性に気づいてしまったのか、あるいはそれでも希望に縋ろうとしているのかは知らないが、平常心を保てない奴を守れるような状況じゃない。

「落ちついてください」

ラフタリアが呼びかけるとハッと我に返ったようにヨモギが頭を振る。

「その武器をどこで手に入れた！」

「知れたこと……お前達聖武器の勇者と眷属器の所持者を葬り去る切り札としてキョウが与えてくださった」

ヨモギはブンブンと首を横に振る。

「嘘だ！　いや、仮にそうだとしてもその武器は非常に危険だ。キョウはその危険性を知らずにお前達に与えてしまったんだ！」

「坊主、あの武器が何か知ってるのか!?」
クズ二号の取り巻きと戦いながらラルクが俺に尋ねてくる。
正直、混戦状態で会話をしている暇はないが、あの武器がヨモギの使っていた武器と同じならば戦闘中に暴走し、大変なことになる。
少しでも刺激しないようにして処分しなくちゃいけない。
「おそらく霊亀から採取されたエネルギーで作られたもので、魔物みたいな武器だ。所持者に驚異的な力を宿すみたいだが、しばらくすると暴走して爆発する」
試作品だから暴走するのか、それとも最初から仕込まれているものなのか……どちらにしても霊亀の使い魔（擬態型）を武器化させたようなものに間違いないだろう。
「今ならまだ間に合う。私も先ほど、その武器が暴走して死にかけた。早く手を放せ！」
だが、ツグミはヨモギの言葉に、攻撃という形で返答してきた。
俺は反射的に流星盾を張り直し、更にエアストシールドを唱えて守りに徹する。
「はぁ！」
「く……」
一撃で流星盾、エアストシールドが砕けて盾から火花が散り、防御を突破して俺が着用していた鎧に僅かに傷が入る。攻撃力だけなら化け物並みにあるじゃないか。
正直、かなり厄介な相手だ。
「はぁ！」
「キョウの正しさを証明するためにも、その武器を使用してはいけない。私の信じるキョウは喜ばない！」
ラフタリアとヨモギが俺が作り出したツグミの隙を衝く。
が、化け物じみた反射神経でツグミはラフタリア達の攻撃を紙一重で避ける。
「抜かせ！　貴様等はここで死ぬんだ！」
く……。
「セカンドシールド！」
と、俺はセカンドシールドで遮り、穂先を紙一重で避け、ツグミの槍の柄を脇で挟み込んで押さえ込む。
元康との戦闘での経験が役に立つな。
まあ、イメージ練習をしていただけのところもあるが上手くいった。
槍の短所は接近されると途端に使いづらくなることだ。柄で薙ぎ払うくらいしかできないからな。
この程度なら……辛うじて押さえ込める。
「まだまだ！」
ぐ……柄であろうとも乱暴に振るだけで衝撃が俺に来る。
かなり痛い。
「テリス！」
魔法で自分の援護をする余裕がない。ここは魔法担当のテリスを頼るしかないな。
『遍く宝石の力よ。私の求めに応じ、顕現せよ。私の名前はテリス＝アレキサンドライト。仲間達よ。彼の者に強固たる守護の力を授けよ！』
「輝石！　凝守！」
テリスの援護魔法を受けて俺の防御力が跳ね上がる。
よし、痛みが殆どなくなった。どうやらテリスが唱えた魔法は倍率で掛かるタイプのようだな。
元々能力の高い項目だとより能力の上がりが良い。
「さっきよりも更に硬くなっただと？　おのれ、異界の勇者め！　キョウの話では守ることしかできないということだったのに邪魔ばかりしおって！」
情報の伝達もできているのか。前回のように俺が反撃できると思い込んでいてくれたらよかったのに。
俺が掴みかかろうとしたら武器を捨てて逃げるとかしてくれたらまだ良かったんだがな。
「ごしゅじんさま！」
「ラフー！」
「おい！　お前等！」
「く、こざかしい！」
フィーロとラフちゃんがツグミに飛びかかっていった。
槍を持つ手の片方……獣のようなツメのある手を振りかぶり、ツグミはフィーロとラフちゃんを引き裂こうとす

る。
「危ない！」
「ラフ！」
攻撃が届く直前、ボフンと音を立てて、ラフちゃんとフィーロが煙となって消えた。
どういうことだ？
「危なかった！」
僅かに離れたところに、フィーロがラフちゃんを抱えて滞空している。
「ラフフ！」
どうやらラフちゃんの幻覚魔法で上手く避けたみたいだな。
「気を付けろ。今のお前らじゃ危険だ」
「大丈夫だよごしゅじんさまー、よく見ていれば避けられるよー」
フィーロはハイクイックが使えるからな。魔力をチャージする必要はあるがフィトリアから教わった節約モードの方で戦っているのかもしれない。
それでも相手が悪い。今のフィーロとラフちゃんじゃ危険だ。
「じゅうでんー」
なぜかこの二匹が俺の肩に乗る。
「ごしゅじんさまの肩に乗ればしばらく強くなるんだよ」
ああ、背負い時能力上昇（中）のお陰か？
今までの傾向からして馬鹿にはできないだろうな。
「ツグミ！」
クズ二号の取り巻きの女共が目標を代表と戦っている俺に定める。
「おっと！　坊主に攻撃を集中させるわけにはいかないぜ」
「そうだね。そんなことをさせるわけにはいかない！」
「ええ、ナオフミさんを喪失することは大いなる可能性の損失。もっと宝石を加工してもらわないといけないのです」

「お前は何を言っているんだ？」
こう……テリスが非常に危ない領域に入り込んでいる気がしてしょうがない。
ラルク、ちゃんと手綱を握るんだぞ。
ってそんな状況じゃないんだよ。
「ふぇえええ！」
ここでリーシアが滅茶苦茶に札を投げる。
「な――」
「う!?」
これが仲間に当たらずに、クズ二号の取り巻きで防御がおざなりの奴に命中して若干驚かれていた。
なんか地味に役に立ってるぞ。
弱そうでみんな無視するんだけど、無視したら意外なところで伏兵となる感じだ。
とりあえず、今はツグミの槍を押さえつけている状況だがいつ突破されるかわかない。強靭な防御力で強引に相手をねじ伏せる戦い方を最近はしてきたが、どうも通じる気配がないな。
いや、カルミラ島から続く連戦ではねじ伏せられた方が少ない……か？
今まで様々な接戦を経験してきたが、これに該当するのは……と思ったところでツグミが槍を握る手を強める。
するとバチバチと槍の穂先が輝き始めた。
その溜まっていく光に俺は後ろからチリチリと少しずつ焼かれていくような感覚を覚える。
この状況、覚えがあるぞ！
教皇だ。教皇が勇者の武器をコピーした武器を使った時と似ているんだ。
く……しょうがない！
「フィーロ！　もしも何かあったとしても堪えろよ！」
「うん！」
「ラフー！」
俺が何をするのか察したフィーロがラフちゃんを掴んで羽ばたいて逃げる。
「ナオフミ様！」

「坊主がアレをやるっていうのか！ 全員距離を取るんだ！」
「え？ え？」
絆がラルクに手を引っ張られていく。
「ナオフミ様！」
「大丈夫だ！ ラフタリア、お前はヨモギやフィーロ達を守るように努力してくれ！」
最近使ってなかったが、コイツの必殺攻撃に耐えられる手段を俺は持ち合わせていない。
霊亀の心の盾に変化させる条件……おそらくこの世界でも使えるだろうが、それよりもラースシールドの方がまだ強いはずだ。
リスクは承知の上で……コイツが放とうとしている攻撃からみんなを守るために必要な手段を取らなければいけない。
俺は盾に手を添え、できる限り使わずにいた禁じ手に手を染める。
ラースシールド……またお前に頼らねばならない時がきてしまったな。
できればもう使いたくなかったがな！
「な、なんだ!?」
「異界の勇者は何をしようとしているんだ!?」
ヨモギがラフタリアに引っ張られて距離を取らされ、ラルクに向かって尋ねる。
「坊主は今、アイツ等の攻撃を受けるために代償のある武器に変化させたんだ」
「代償……そんな武器があるのか」
「キョウは使ったことがないの？」
雪辱を果たすためにと、後方に下がる絆やラフタリア達に追い打ちを掛けようとする者、孤立する俺に向かって群がる者、とクズ二号の取り巻きが各々攻撃を繰り返す。
「うおおおおおおおおおおおお！」
「喰らえ！ 『貫くもの！』」
槍の柄を握りしめ、盾に穂先をぶつけてツグミが放った必殺スキル、光線のような力の波が放射され、それを俺は受け止める。

どしりと重い一撃だが、どうにか耐えることはできる。
まるで蛇口を指で中途半端に塞いだように光が飛び散った。
その光は必殺の一撃であり、城の外壁を貫き、地面を抉り取るほどだ。
だが、ここから先は通さない。
「く……おおおおおおおおおおお！」
ツグミも俺を消し飛ばすために力を強める。
刺激しないようにと考えていたが、コイツに必要なのは何をしようとも俺達を倒すことができないと絶望させること。まずは……そこからだ。
槍が発熱し、宝石のような目玉がぎょろぎょろと動き出す。
「みんな！ コイツに攻撃を集中させろ！」
「「おう！」」
「やれるものなら……やってみろ！ 俺を攻撃したらどうなるか、お前等は身をもって知れ。
槍の穂先を強引に振り回してクズ二号の取り巻きに捩らせる。
「きゃあああああああああ！」
「うああああ――」
それだけで大ダメージだ。
幸いにして奴等は肉体改造のお陰か焼け焦げるだけで済んでいる。
回復魔法を掛ければどうにかなるかもしれない程度だな。
「どこまでもしぶとい！」
「防御だけが取り柄なんでね」
などと俺は鍔迫り合いに近い間合いでツグミの攻撃を耐え続けた。
まあスキルの方は長時間放っていられる攻撃ではなく、すぐに効果が切れたようだがな。
ブシューッと空気が抜けるような音を立てながら、ツグミの持つ槍の穂先が煙を出している。
「いい加減、諦めろ！」

そろそろ奪わねば危ないだろう。

「断る！」

「そうか……じゃあ、報いを受けろ！」

俺は今までこいつ等に受けた痛みを思い出させてやろうと、感情を高ぶらせる。

「テリス！　防御魔法を展開しろ！　フィーロも手伝え、その場にいる奴で参加できる奴はできる限り、みんなを守るんだ！」

「は、はい！」

俺の言葉に応じてテリスや城の者達が魔法で防壁を作り出す。

もしかしたら全てを焼き尽くしかねない威力になるかもしれない。

まあ、本気でやってもグラスに大ダメージを与えた程度なんだから、そこまで入念にしなくてもいいかもしれないが念のためだ。エアストシールド等も守るために展開した。

「くっ……！」

盾が心を侵食してくる。

全てを殺せと、恨みを晴らせと訴えている。

だが、今の俺には守らねばならない者達がいるんだ。

ラフタリアやフィーロだけじゃない。

教皇を倒した後、様々な出来事があって守るべき対象が増えた。

それに呼応するようにこの盾を使用する頻度は減っていった。

……霊亀相手に戦った時、オストはこの盾から憎悪の感情を抜き出し、力としたり、盾の力を増加させてくれたりした。

そう……今、俺の怒りは方向性を持っている。

世界を憎む心ではなく、ただ一点に集約する……。

みんなを守るため、憎しみを……制御するんだ。

──恨み、憎しみ、嫌悪、憎悪、怨嗟、憤慨。

それらの感情を周囲に撒くんじゃない。

俺より後ろに向けるな。前方にだけ向けるんだ。

「うおおおおおおおおお！」

ダークカースバーニングSが盾から発せられる。

「な、防御しかできないんじゃなかったのか!?」

「お前は俺をちゃんと見ていたのか？　反撃は……できるに決まってるだろ！」

黒い炎が盾から生成され、扇状に前方だけを焼き焦がした。

「うわあああああああああああ！」

「ぎゃあああああああああああ」

今までで一番の出力だったんじゃないかと思うほどに憎悪の炎は辺りを焼き尽くした。

「ふう……」

「凄い……これが尚文の禁じ手……」

「キズナの嬢ちゃんの奥の手とは別の意味で厄介な攻撃、だろ？　グラスの嬢ちゃんが魂穢水で強化されていてやっと戦えたんだぜ？」

「いいから、お前等！　戦え！」

僅かに怒りが収まるのを感じるが、この憎悪はすぐに再度燃え上がるだろう。

これはそういう類の攻撃だ。

耐えるだけでさえ気が狂いそうになる俺自身の記憶との戦いだ。

だが、今の俺はラフタリアやフィーロ、他にも色々な守るべき仲間がいる。

……少し臭いが、俺にとって大切なものを守るため、怒りに飲まれるわけにはいかないんだ。

「く……くそ、まだ私は諦めるわけにはいかない！」

おお、アレだけの威力の反撃を受けてまだ槍を持つ手を放さないとは。



それほどの執念を俺は受け止めないといけないのか。
クズ二号、お前はとことんゲスだったが、こうして思ってくれる女共がいるのだから、良いこともきっと沢山してきたんだろう。自分の思う通りに世界を、発明を悪用しなければ……こいつ等もこんな日に遭わずに済んだんだ。
あと、最後にグラスは忠告したはずだぞ。
動くなと。
それを無視して動いたせいで死んだくせに、その報いを俺達に押しつけるなボケ！
おっと、ラースシールドに意識が侵食されている。
気を付けろ……まだ怒りに飲まれている場合じゃない。
「もっと！　もっと私は強く……こいつ等を殺す力を捻り出すんだ！」
憎悪の炎で焼かれて倒れていた連中がムクリと起き上がる。
そして、まるで焼かれた部分を補うように獣の部分がみるみる侵食していく。
くそ……どれだけやればこいつ等を倒せるんだ？
「はああああああ！」
やばい！　槍がヨモギの時のように発熱し、蔓を伸ばしてツグミの手に巻きついている。
が、それもギミックなのか、改造された所為なのかツグミ自身は疑問に思っていない。
どうする？　前回は絆が蔓を切り裂いてどうにかなったが……。
「血花線！」
絆が素早く俺のもとに駆けつけてツグミの腕に巻きつこうとする蔓を切断する。
が、斬ったその場で蔓は再生してツグミの腕に巻きついていく。
気付いていないのか？
ぐ……さっきよりも盾に掛かる力が強くなっていやがる。抑えていられるのも限界が……近い！
「コレで、トドメだ！」
まだ攻撃による硬直が解けていないだろうに、ツグミは……まさか……槍から星が瞬き始める。
間違いない。これは元康の持っていた武器のコピー品！
おそらくさっきのはブリューナクとかいう、教皇が放とうとしたスキルで、今は流星槍を放とうとしてる。

「ははははは！　今度こそ！　シネ！」
と、俺の手を無理やり引き剥がしたツグミが槍から光を放とうとしたその時。
ピキッとなんか肉が裂けるような音が響き渡った。
「あぎゃあああああああああああ!?」
そして、笑みを浮かべていたツグミがのたうち回り始めたのだ。
「ツグミ!?」
「な、何が!?」
クズ二号の取り巻きが唖然とした表情で動きを止め、近くにいた奴がのたうち回るツグミに駆け寄る。
「あが……ああああああ、い、あああああああ!?」
ビクンビクンと痙攣して白目を剥いているぞ！
これは槍の所為か？
そう思ったのと同時に、ラルクやラフタリア達に襲い掛かっていた連中もまるで薬が切れたかのように悶え始めた。
「い、一体何をした!?」
「俺達が何かしたと思ってんのか！」
呪いの炎で回復遅延効果はあるが、こんな症状は考えられない。
悶える仲間を見てクズ二号の取り巻き達はさすがに視線を逸らした。
「その肉体改造の代償だと思わないの？」
絆が真剣な目で言う。
が、今はそれどころじゃないだろ。
「絆、今はコイツ等よりも大きな問題があるだろ！」
「……!?　そうだね！」
ツグミの手に未だに絡みつき、悶えるツグミから力を奪い続ける暴走した槍だ。
ヨモギにくっついていた時と同じ……まさに暴走して爆発寸前の状態のものが足元にある。
く……投げる余裕があるか？

それよりも気になるのは目玉のような宝石部分だ。
ヨモギの時よりも強く、煌々と輝いている。
これは……もしかしたらヨモギの時の暴走よりも広範囲の爆発を引き起こすんじゃないのか？
「絆！　待て！」
「どうしたの？」
「下手に蔓を切るな。もしかしたらそれが引き金になりかねない」
ヨモギの時は特に警戒していなかったが、これまでの出来事から考えると、そろそろ爆発してもおかしくはない。
「もしかしたら所持者から力を吸収している時はまだ爆発まで猶予があるのかもしれない」
「でも、こんな状態の子を放っておいてどうしろって言うんだ」
確かに……悶えて痙攣しているということはもう限界を超えているんだろう。
冷酷に切り捨てるのなら、コイツ等ごと安全な場所に移動させて爆発でもさせるんだが……。
絆やラフタリアはその選択肢を取ることを拒むだろう。俺だって気の毒だとは思うが時に切り捨てるのも手だ。
だが、問答をしている余裕はない。
「「「ううう……があああああ」」」
薬が切れたように悶えていた奴がむっくりと起き上がり、野獣のような咆哮を上げて暴れ始めた。
獣のように四つん這いになり、各々元となったらしき魔物の動きで攻撃を放ち始める。
「く……コイツ等！　どうなってやがる！」
困惑しながらもラルクやラフタリア、ヨモギが暴れる連中を押さえつける。
先ほどのような知性ある動きがない分、対処はできているが動き自体は速くなっているようだ。
「ふぇえええええ！」
「ラフー！」
ラフちゃんが尻尾を膨らませて暴れる者達に魔法を掛ける。
すると、魔法を掛けられた連中が何もない所で勝手に暴れ始めた。
おそらく、幻覚で幻の敵と戦っているのだろう。
ゲームとかの知識を元に判断するのもなんだが、野生的な相手ほど幻覚の効果が大きい場合が多い。

まあ逆に効かない相手もいたりするんだけどな。
「やめて！　ツグミが大変なの！　今は復讐よりもツグミを助けるために行動しましょう！」
取り巻きの連中が騒ぎ出すが、理性を失った連中は聞きいれる様子がない。
「お前等も気を付けろ。きっともう少しで同じようになるぞ。できれば、力を使わずにいた方がいいだろう」
取り巻きの連中は俺の言葉を聞いて、戦意喪失して大人しくなる。
「そうだね。暴れ出したのは特に好戦的だった人達ばかりのようだし」
「……」
「あがあああ……あああ」
まるで水分を吸い取られていくかのようにツグミの頬や体の各所が削げていく。このままではすぐにミイラ化してもおかしくない。
おそらく改造による理性を失う暴走と武器による力の吸収が拮抗して、こんな状態になっているのだろう。コイツの命が尽きた時、武器が爆発すると見ていいな。
「ポータルは使えない」
実はポータルには奥の手がある。
仲間限定なのが短所だが、俺自身を飛ぶ指定に入れずに位置を記憶した場所に送ることもできるのだ。上手く使えば、この状況を打破できるかと思ったが、前提として仲間じゃないといけない。
そして、きっと肉体改造に使われた白虎の影響でポータル自体にジャミングが掛かっている。
絶望的な状況だ。
だが、まだ手はある。
「回復魔法をコイツに掛け続けろ。魔力とＳＰの回復も忘れるな！」
「な、何をするつもり!?」
「人のいない所へコイツを置いて逃げる。じゃなきゃ武器の爆発で全員死ぬぞ」
「そんな！　ツグミはどうするの？」
「もちろん、時間稼ぎをしている間に策を――」
と、言い切る前に、武器の目玉の部分から不吉な笑い声が聞こえてきた。

「させ――ると思っ――てんのか？」
ブツッと時々音声が途切れるが、これはキョウの声だった。
聞くまでもない。本当に時間はないらしいな。
「ど――ら、失敗――みてぇ――、お前等を消し飛ばすには十分――況の――だな。これは――だ！」
カチンと音がしてヨモギの時と同じく武器全体が光り始める。
「キョウ！　お前！　まさかこれを狙っていたというのか！」
ヨモギが呼びかけるが、既にキョウの声は聞こえなくなっていた。通信を切ったのだろうか？
武器の光り方がヨモギの時の比じゃない。間違いなく爆発する。
「は！」
絆がツグミに巻きついていた蔓を切り裂く。
なんて、状況を見てる暇はない。
俺は武器を持って空へ投げようとしたところで、武器が爆発寸前なのを理解した。
……間に合わない。手榴弾を投げ返そうとした兵隊とか、こんな気分なんだろうか。
どうする？　どうすればいい？
時間の流れがスローに感じる。
このままじゃ、みんな死ぬ。
見た感じ……この槍型の魔物は自爆直前には死んでいるようだ。
ヨモギの時もそうだった。なんとなくだが、盾に入れることができる気がした。
あの時は、そんなことよりも投げることを優先したが、今は投げても間に合いそうにない。
ならば――俺は槍を盾に強引に入れこんだ。
最初、僅かに抵抗を感じたが、盾が察したのかズブッと滑る感触と共に槍が盾に入っていく。
「ナオフミ様!?」
「え？」
「このままじゃ間に合わない。一か八か素材として盾に入れる！」
「そんな無茶な！」

「無茶でも何でもやるしかないんだよ。この前の爆発時に光が俺の盾に吸い込まれたみたいに、今度も……！」

そうだ。この武器はおそらく霊亀のエネルギーをもとに作られている。

爆発時の光が俺に降り注いだのは、俺が持つ霊亀の心の盾へと戻るためだったに違いない。

視界に槍のアイコンが浮かんできた。盾の中に異物があるとかそんな感じか？

視界の中で槍が赤く煌々と光っている。

盾自体が壊れるかもしれない。もしもそうなったら、俺もどうなるかわからないな。

それでも、この場の被害を最小限に抑えるのが先決だ。

「シールドプリズン！」

「ナオフミ様！」

「ラフー！」

「ごしゅじんさまー！」

駆け寄ってこようとしたラフタリア達から離れるようにして俺は自分を閉じ込め、万が一の爆発の衝撃を抑える障壁を展開させる。

「坊主――」

「尚文、やめ――」

「ナオフミさ――」

各々の声を確認しながら、爆発からみんなを守るために全身を使って盾に覆い被さった。

一番強いラースシールド……この爆発する武器をどうにか抑えつけてくれ！

視界に赤く光る不気味な槍のアイコンが明滅している。

そこに霊亀の心の盾のアイコンが出現し、淡い光を出して槍の力を吸い込んでいくように見える。

直後、ドンと、槍が爆発したのか、まるで体の中で何かが炸裂したかのような痛みを覚える。

「ぐ……」

まるで俺の中に劇物があるかのような不気味な感覚がジワリジワリと俺を侵食し、支配していく。

やばい、死ぬかもしれない。

今度こそ、キャラじゃないが誰かを守って死ぬとかやっちまいそうだ。

死んでも御免だと思ってんのにな！

シールドプリズンの効果時間はそんなに長くない。

なのにいつまで経っても消える気配がない。

これは……何かしらの原因でシールドプリズンの効果時間が延びているのか、もしくは俺自身の時間の感覚が遅くなっているのか。

後者だとしたら一秒が一分以上に長く感じる状態だぞ。

冗談じゃない……こんな地獄のような時間をどれだけ堪えればいいんだよ！

気が狂いそうだ。

ラースシールドに変えている時とは別の痛みを堪えながら俺は蹲って耐えしのぶ。

やがて……槍は淡い光を出しながら……溶けて消えていった。

どうにか、抑え込んだか？

「う……」

なんだ？　目眩がしてよろめきそうになる。

毒でも盛られたかのような違和感だ。

意識が遠のく……。

まだだ、まだ……プリズンの外には敵がいる。ここで俺は倒れるわけにはいかない。

そこで……俺は幻を見たような気がした。

ぼんやりと、陽炎のように、オストが倒れそうになる俺を抱えて立たせようとしているのだ。

喋ってはくれない。

けれど、目だけで俺に意思を伝えている。

俺の意思を汲み取って、力を与えてくれているかのようだった。

どうにか俺は踏み止まって、思い切り立ち上がる。

気が付いたらオストはいなくなっていた。いや……最初からいなかったのかもしれない。

でも、あの世から俺の力になるために来てくれたんだとか、正常だったら鼻で笑うかもしれないことを考える。

俺はオストに頼まれたことを達成しなくちゃいけない。

だから、こんな所で倒れるわけにはいかないんだ。
プリズンの効果時間が切れると、ラフタリア達が涙目で俺に飛びついてきた。
「ナオフミ様！　大丈夫ですか!?　なんともないですよね？」
「ああ、問題ない。さすがにちょっと危なかったがな」
死ぬかと何度も思った。が、今は若干の気だるさがあるが、どうにか立っていられる。
「それよりも！」
俺の声にラフタリア達が即座に臨戦態勢に戻る。
「ガアアアアアアアアア！」
見ると暴走したツグミが立ち上がって、暴れ出そうとしていた。もはや死ぬ寸前にもかかわらず。
「もうやめて！　私達は騙されていたのよ！　今は休戦しましょう！」
ツグミの仲間達が呼び掛けるが、全く応じることなく、暴れ続けている。
目に入った者全てを殺す勢いだ。
「お願いします。身勝手かもしれないけど、助けてください」
何を言ってんだ、と俺が言うよりも早く、絆が前に出て頷く。
「わかったよ。君達もキョウに利用された哀れな被害者だ。そして、オレ達は君達の大切な人を殺した責任がある」
「自業自得だと思うがな」
俺が呟くと絆は黙っていろとばかりに口元に指を置く。
へいへい……憎まれ役は黙ってればいいんだろ。
「戦っていて気付いたんだけどさ。オレは狩猟具の勇者で人間を傷つけられない。同様にラフタリアさんみたいな亜人も傷つけられないんだ。だけどなぜかな？　君達……とは戦える気がするんだ」
「ほう……まあ、改造人間みたいな連中だもんな」
「そういう意味じゃなくてさ、尚文がどうにかみんなを守ろうとした時、オレも心が震えた。尚文みたいに皆を守りたい、皆を救いたい、オレにも何かできることはないの？　ってね。するとさ、声が聞こえた気がするんだ。答えはオレの中にある」
絆は……本人の言葉通り心を震わせたような表情をしている。

まどろっこしいな。結局、何なんだ？　悠長に話している時間はないんだぞ？
策があるなら早くやれ、と言いたい気分だ。
絆は武器を鮪包丁に変えて、暴走するツグミに向けて構える。
「オレの名前は風山絆、四聖、狩猟具の勇者で人を殺せない。勇者の名に懸けて……オレは君達を必ず助ける！」
そして素早く駆ける。
俺は意識を集中して、絆が戦いやすいように援護魔法を唱える。
「ツヴァイト・オーラ！」
そして絆は暴れまわるツグミの懐に入り込んで、こう叫んだ。
「解体技、鱗落とし！」
ズバン──と、一瞬の出来事だった。
何本もの剣閃がツグミを切り裂いた。
こう……絆の攻撃は速さを魅せるスキルが多い。
「ガアア──」
ツグミは絆に斬られて硬直する。
「まさか……斬られて……下手に動かしたら──様みたいに」
小さな声で聞きとりづらいっての。
そう思ったところで、パシュッとツグミの獣化している部分だけ毛が刈り取られる。
いや、肉も斬られているのか、血が舞う。
「「きゃあああああああああああ！」」
悲鳴が響き渡ったが、俺はツグミの死体を確認に行った。
ん？
「お前等心配しなくてもいいみたいだぞ。どうやら……コイツはずいぶんとしぶといみたいだ」
俺は死んだと思われていたツグミを持ち上げて女共に見せる。
顔半分の皮膚は切られてしまって、大けがをしているが息はあるようだ。
「ツヴァイト・ヒール」

とりあえず顔だけでも治しておいてやろう。
回復魔法を掛けると人間らしい顔に戻った。獣の部分だけなくなった感じだ。
駆け寄った女共は容体を確認して安堵の声を漏らしていた。
「だが、完治には程遠そうだな」
まだ白虎のような部分が所々あるが、今までのような妙な雰囲気や肉体をむしばむような動きはない。
治療に時間は掛かりそうだけど、どうにかできそうな感じだな。
さすがは人間は傷つけられない狩猟具の勇者と言うべきか？
暴走する四聖獣の部分だけを切り取るとか、器用なことをするもんだ。
しかも鱗落とし……魚の鱗を削ぐ行為だぞ。むしろ解体武器の勇者じゃないのか？
「さて、お前等……まだ戦う気があるか？」
暴走していない女達は各々顔を見合わせてから……静かに座り込んでこう告げた。
「降参です。私達は利用されていたんですね」
「恨まれる覚えはあるが、信じる相手は考えるんだな」
まあビッチ元王女に騙された俺が言えたことではないが。
「とにかくこれでお前等は命が助かったわけだ」
「……」
「俺としてはお前等をここで始末しておきたいところだが……」
女共はビクリと恐怖という文字を顔面に張り付けた。
「ここの大将はお前等に生きていてほしいみたいだ。部外者の俺には何も言えないな」
俺の腕にはツグミがいるから、どっちにしろ手が出せないけどな。
いやー卑怯者でいると気分が良いな。
「尚文……」
「ナオフミ様……」
俺の言葉に絆とラフタリアが感動したような顔をしている。
いや、そういうの本気でいらないからな。

「ラフー」
「フィーロ疲れたー」
「とにかく、話をしようぜ。俺達は争う状況じゃねえと思うからよ」
ラルクがそう締める。
クズ二号の取り巻きも戦闘を継続する気は失せているのか、完全に白旗を上げたようだ。
「絆、他の連中も同じ要領で処理しておけよ」
「当然！」
そう言って絆は女共に近づいていった。
はぁ……戦争を前にしてとんだ襲撃があったもんだ……。
「そうだ！　グラスの方は!?」
絆の言葉にクズ二号の取り巻き達がハッと声を漏らす。
「その！　キョウに言われていた作戦が――」
おいおい……まだあるのかよ。
「私達が城を攻めている間に龍刻の砂時計へ行く部隊が……」
はぁ……やっぱりか。なんとなくだがキョウの考えそうな浅い作戦というか、俺達がやられたら嫌なところを攻めてくるのは容易く想像できるんだよな。
「尚文の言う通りになっちゃったね。急いで向かおう！」
「嫌なことにな。お前等、自分の仲間達を説得できるか？」
コクリと女共は頷く。
「暴走していたらオレがグラスと一緒に止めるまで！」
「とにかく止めに行くぞ！」
「おうよ！　城の連中は怪我人の救助と損害報告をまとめておけよ！」
ラルクが筆頭になって指揮をする。
「俺も行くぜ！」
「ああ、なにせお前の国みたいだしな。いい加減攻められっぱなしってのもウンザリだ。サッサと終わらせるぞ！」

「はい。一刻も早く騙された方々に真実を告げましょう」
ラフタリアが刀を鞘に収めて応じる。
「うん！　帰路の写本！」
絆を筆頭にして俺達は龍刻の砂時計へ舞い戻った。
視界が一瞬にして龍刻の砂時計のある建物内に変わり、建物の外の喧騒が聞こえてくる。
「輪舞零ノ型・逆式雪月花！」
グラスの声と共に外では桜吹雪が舞い、人影が薙ぎ払われている。
近くには負傷した兵士が呻き、戦場と化している。
グラスが栄養剤を飲むOLの如く、俺の渡した魂癒水の瓶の先を咥えてスキルを連打している。
絆は絆でかなり強いがそれに匹敵するのがグラスだからな。
ラフタリアの持つ刀の眷属器の強化方法を習得してから更に能力が伸びたとか言っていたし。
やはりグラスが守りに残って正解だったな。
一歩も敵を建物内に侵入させていない。
まあ、元々敵も数をそこまで割けていなかったのが幸いしたな。
クズ二号の取り巻きもそこまで多くなかったということか……。
俺達が来たのを見て戦意を喪失、もしくは既に暴走状態で作戦もクソもない状態のようだ。
「みんな！　落ちついて！　この狩猟具の勇者様が我を忘れて暴れる子を助けてくれるから、戦うのは諦めて！」
「私達は……キョウに利用されているのよ！」
クズ二号の取り巻きの、城の方にいた連中が呼びかける。
すると、襲撃組で理性が残っていた取り巻き連中が振り返る。
「だけど！　それじゃあ――様はどうなるのよ！」
暴走した連中の所為でまた名前が聞こえなかったぞ。
俺がクズ二号の本名を知ることはないのか？
「貴方達もわかってるんでしょ？　こうして暴れ出す子がいる。城の方じゃツグミに渡された武器が爆発しかけてみんな殺されそうになったのよ！　私達はキョウの掌で踊らされてたのよ！」

「そんな……だけど……」
「諦めたくない奴はいつまでも戦っていろ。ラフタリア、絆、ラルク、グラス、みんな、それが奴等の流儀なんだ。今の俺達に付き合っている暇はない。生け捕りでも何でもいいから……今は被害を最小限に抑えろ！」
「わかったよ。話し合いをするにしても……君達を止めてからだ！」
絆が走り出して、暴走する女共の獣化した部分を削ぎ落とす。
それだけで不死身かと思えた女共は倒れ、意識が残っている者達は、痛みこそあれど侵食は止まる。
戦闘を継続している奴等は、ラフタリアやラルクに撃破され、沈黙した。
数の力は素晴らしいな。俺も数を揃えたいもんだ。
「それでお前等、龍刻の砂時計に何をしようとしていた？」
俺の言葉に捕まった襲撃犯の連中がペンダントを見せる。
これって冒険者が使っているドロップとかを確認する宝石だったよな。
「これにこの国の龍刻の砂時計を登録すれば……私達は勝てると……」
「まあ、そんなことだろうと思っていた。帰路の龍脈の再現だったか。軍隊を敵国のど真ん中に無尽蔵に送りつけられるんだからな」
物量で一方的に攻められたら一巻の終わりだ。
いくらグラスやラルク、ラフタリアが一騎当千だったとしても限界が来るだろう。
「まさかと思っていましたが、本当にそうなるとは……」
「アイツらしい戦略だな。しかも三段構えときたもんだ」
俺と絆辺りを狙ってヨモギを使って襲撃させ、城の方はクズ二号の取り巻きの大半を投入、龍刻の砂時計にも刺客を送りつけて、いつでも攻め込めるように登録をしてから防壁を破壊か書き換えでもしようとしたのだろう。
「とにかくお前等、今は絆のお陰で症状が抑えられているが、いつ暴走するかわかったもんじゃない。俺達を恨むのは勝手だが、お前等の大将がどんな経緯で死んだのかを……ちゃんと理解しろ」
俺は背を向けてから付け加える。
「……薬で治せるかもしれない。城の方で用意してくれるかどうかは知らんがな。勇者補正で治せるか試すぞ」
「ホント尚文は素直じゃないね」

「そこがナオフミ様の良いところなんですよ！」
「ラフー！」
「坊主はそれが一番だな」
「うっせー！」
こうして、クソ騒がしい夜襲事件は幕を下ろした。

七話　バルバロイアーマー

翌日から捕らえられたクズ二号の取り巻きの治療をする羽目になった。
「……」
ツグミはやはり重傷だ。
様々なものをあの武器に吸われてしまっていて、立つこともやっとの状態だった。絆が辛うじて削ぎ落とした、改造された箇所に治療薬を塗ることで、改造痕が快復に向かっているところだ。
霊亀の使い魔に寄生されたような状態に近いのだろうか？
俺達に命を助けられ、屈辱を感じているのかツグミはだんまりだ。
「ま、別にお前の口から聞く必要はない。いつまでも自分の信じる理想でも追うがいいさ」
「ナオフミ様……」
恨まれる覚悟くらいはある。
「だが、よく考えるんだ。お前等の愛おしい奴がしたことを……あの人の言うことは絶対って、お前等は洗脳でもされていたのか？」
気に食わないからといって、ラフタリアを殺そうとした連中だ。
ラフタリアの時だけおかしなことをしたとは考えづらい。
少ししか会話しなかったが、何かおかしなことをしているはずなんだ。
「うるさい！」

「痛いところを衝かれたらそれか……」
俺がラフタリアを残して死んだら、ラフタリアもコイツみたいになってしまうのだろうか？
「ラフタリア、間違っても俺を無条件に信じることはないようにな？　俺だって間違えるし暴走もする、その時に止めるのはきっと、お前だ」
「……努力します」
せめてクズ二号の取り巻き連中の中で誰か一人でも注意することのできる奴がいれば、奴は死ぬことは……なかったと信じたいな。
「……私達には優しかったが、権力や強さに関して尋常でなく固執していたと思う。確かに、そのことは否みようがない」
「……」
確かに変な奴だった。
言ってはなんだが強さに対する要求という点でいえば、三勇者共に似た雰囲気があったかもしれない。
相手が強いのはズルをしているんだ、みたいなことを言い出しそうな奴だった。
思い通りにならないことへのワガママも……。
ネットゲームをしていた時、サーバー内でも所持する人が少ない希少で強力な武器を所持する俺の仲間に嫉妬し、匿名サイトで晒したユーザーと雰囲気が……似ている。
偶然なのだろうが、俺の経験に当てはまる。
自分こそが選ばれた存在なんだと相手を出し抜くことに力を入れる。
気持ちがわからないわけじゃない。
ネットゲームユーザーは大小はあれどそういった願望がある。
自分が主人公になったような気で行動するんだ。
だが、アイツは……現代社会の人間じゃない。
なのに俺の勘がまるでアイツを――
「その……なんで私を殺そうとしたのか、もう少し詳しく聞いてよろしいですか？」
ラフタリアが尋ねる。確かに、あまりにも固執している。俺の脳裏を突飛な疑問が過る。

「眷属器が新たな主を選んだ。その結果が気に食わないからと処刑するのは、前例がないわけじゃない」
「あってもおかしくはないな」
なにせ俺がその被害者だ。
メルロマルクって国は盾の勇者が宗教上の敵で、俺を排除しようとしたわけだしな。
「だが、自分が選ばれなかったからと処刑するなんて聞いたことがないのも事実だ」
確かに俺も疑問に思っていた。
眷属器とは言わば岩に刺さった選ばれし者が抜くのを待つ聖剣のようなものだろう。
エクスカリバーだって、その剣を抜くはずだったのはアーサー王じゃなくて俺だとか言って挑戦するのは間違いなく三流のクズがやることだ。
既に所持者は選ばれている。
なのに自分こそ選ばれし者だと権力を使って……なんて普通はしない。
「こっちも交渉の窓口を用意はしていたんだぞ。別に戦争がしたいわけじゃない。丁重に扱ってほしいとグラス達は言ったんだろ?」
「ああ……だが、それは叶わなかった。こんな結果になるなら、別に刀の眷属器などに選ばれなくてもよかったのだ」
好きな相手が死んだ原因だしな。
「どうしてそんなにも固執していたんだ？　お前が代表ならわかるんじゃないか？」
「……わからない。私は幼い頃から一緒にいたが、アイツの考えていることがわからない時が多々あった」
ふむ……聞けば聞くほど謎の多い奴だな、クズ二号は。
「女の尻ばっかり追ってそうな奴だよな。お前の仲間を見てると」
と、俺が言うとなぜか女共が全員コクコクと何度も頷く。
「事あるごとに女性の内情に介入しては強引な手腕で助け続けていた！　私は何度も自重してほしいと注意したが聞き入れなかった！　そしてあっちでやってはこっちでやるを繰り返す！」
あ、こりゃあスイッチが入ったな。完全に俺に向かって愚痴を言ってる。
女好き、それで画期的な技術を開発する魔術師で、剣術もお手のもの。

とんだ天才だな。
それだけで充分だろ。眷属器に選ばれたら波で戦わないといけないのに、もの好きな奴だ。
「私はアイツにどれだけ困らされたか！」
「愚痴は程々にしておけよ」
もう破局寸前の関係だったみたいじゃないか。
「だが……好きだったんだ。アイツみたいな奴は他にはいない！」
クズ二号みたいな奴がそんなにいっぱい転がっていても嫌だけどな。
そこへヨモギが絆達と一緒にやってきた。
「お？　どうした？　キョウに上手いこと利用された刺客その一」
ムッとした表情でヨモギは俺を一瞥する。
「私は……キョウに真実を問わねばならない。そのためにお前達に協力する」
「約束だもんな」
話が逸れそうなので、無駄に偉そうなのは今だけは見逃してやる。
「それもある。だが、私はキョウがこんな真似をさせようとしたと信じたくはないのだ……私の知るキョウを信じてお前達に情報を提供する」
実際はどんな人物かを知らずに利用されている典型だが、理想のために俺達に力を貸すか。
「私はキョウが他の世界まで行って災害を引き起こしたという話を聞いた。それは、本当なのか？」
「ああ、そうじゃなければ俺達はここにいない」
ヨモギの武器、ツグミの武器からそれぞれ盾にエネルギーを変換することに成功している。
おそらく、霊亀から奪ったエネルギーだ。
霊亀の心の盾がそのエネルギーを受け止めてくれたと見ていいだろう。
「俺達の世界に存在する守護獣を乗っ取り、大量の犠牲者を出した。俺はそのキョウを追いかけるために、本来許されていない別の異世界への渡航を許されている」
「本当です。私達の世界であの方は高笑いをしながら霊亀を操って人々を蹂躙しました。それを咎めたグラスさんに笑いながら『どうせ滅ぼす世界なんだからいいじゃないか』と言い放ったんです」

「……」
ヨモギは静かにその話を聞いていた。
が、そこで俺はヨモギとツグミを見比べる。
なんかこの二人、性格を含めて似てないか？
自分の信じた男をやみくもに信じる二人、その応答。
「なあヨモギ。お前の知るキョウってどんな奴なんだ？」
「ん？　私の知るキョウは知識に優れ、国中の様々な困難な案件を自らが研究した分野の発明品で解決する。魔法の腕も一級品。私もキョウに助けてもらってから信じるようになったんだ。それから——」
ツグミがヨモギの台詞を聞いて首を傾げる。
そりゃあそうだろう。
ツグミが言うクズ二号の栄光とずいぶん似てんだからな。
「よかったな。こんな近くに似た奴がいて」
「違う！　アイツとキョウを一緒にするな！　お前！　いい加減にしろよ！」
ツグミはヨモギの胸ぐらを掴もうとして崩れ落ちる。
ああもう……まだ回復してないんだから暴れるなっての。
「しかし、妙な話だね。ここまで似てる雰囲気を持ってるなんて」
絆がグラスやラルクに尋ねる。
「ラルク、お前、前に人を見る目はあるみたいなことを言ってただろ」
カルミラ島に行った時、そんなことを言っていた。
樹の仲間にいる鎧がいつか問題を起こすとかそんな感じの話だ。
俺が盾の勇者だって見抜くのにずいぶん時間が掛かったけどな。
「ああ、それがどうした？」
「キョウとコイツ等の男を見てどう思った？」
「長年人を見ちゃいるが、アレは同じ穴の狢、同類って感じだな」
「そうか……」

ラルクは俺と話をしただけでビッチを強姦なんてしてないと見抜いたんだ。
そんなラルクが同類だと言うのだから間違いはないだろう。
俺もこの二人は共通項が多いと感じる。
「とにかく、キョウが死者を蘇らせるなんて発明を本当にしているかを確かめることくらいはしてやるが……あんまり信じていい相手じゃないことくらい、今のお前らならわかるんじゃないか？」
「……」
さすがに仲間全員が使い捨てで重病人にされた状況で否定することもできないか。
しかも捨て駒にしようとしたのは明白なわけだしな。
「ゾンビとかこの世界にもいるんだろ？　四聖獣を利用した技術で一時的にそう見せかけただけかもしれないぞ？」
「そうだな……もう、死んだ者は帰ってこない。強さを追い求め、無謀で身勝手なことをした罰が当たったのかもしれない」
諦めにも似た感情が読み取れるな。
復讐相手に救われたとあっては、そういう気持ちになるのかもしれないが。
まあいい、今はコイツ等から情報収集だ。
「ヨモギ、お前はどういった経緯で俺達のところへやってきたんだ？」
「ある日、怪我をして帰ってきたキョウが激怒しながら扇の眷属器の連中にやられたって。私はキョウを傷つけたことを許せないと、キョウが開発していた武器を持ち出して……」
「よく持ち出せたもんだな」
「キョウは私に勝手に持ち出すんじゃない、と言って、目の前で何度も出し入れを繰り返していたから……」
よくやるな。一見、ヨモギの勝手な行動のようだが……ヨモギの性格を知ってるなら誘導したように見えなくもない。
キョウは追いかけてくることはなかった。
もしも俺がキョウでラフタリアがヨモギだったら止めに行くぞ。
いくら相手の足が速くても直接な。

しかし……外交でヨモギやクズ二号の取り巻きを捕縛したことを告げたのに、相手は沈黙を貫いたままだ。そんな事実は存在しないとばかりに。

「そういえば、あの時帰ってきてから、あの武器が突然出来上がった気がする。それまではあんな武器はなかった」

「それはいつ頃ですか？」

「約三週間と少し前だ」

「俺達がこの世界に来た時期と符合するな」

ヨモギも薄々勘づいているんじゃないか？

お前の信じるキョウがどんな人物であったかを。

「とにかく、私はキョウに真実を問わねばならない」

「もしも俺達が告げる事実が真実だったらお前はどうするんだ？」

「その時は……」

ヨモギが拳を握りしめる。

「報いを受けさせる。私の知るキョウは人が喜ぶ発明をする人だ。そのような災害を起こすのなら決して許されるものではない」

「話は決まったな。どうせ俺達はキョウに報いを受けさせて霊亀から奪われたエネルギーを取り戻さなきゃならん」

考えてみればこんな所でグチグチと考えてる暇なんてないんだ。

この世界で発明家と呼ばれる人種のいかがわしさを垣間見たな。

「絆、グラス、ラルクも覚えておけ。似たようなタイプの発明家が二人も問題を起こした。二度あることは三度あるという。他にもいるかもしれないぞ」

「……そうだね。警戒しておこう。異世界に迷惑を掛けるような人をこれ以上、出すわけにはいかない」

「ええ、行動には十分注意しておきましょう」

「ああ、世界を守る眷属器が間違っていると告げてるんだ。奴を止めるのが坊主のところへの俺達の罪滅ぼしだぜ」

「やりましょう」

ラフタリアの声に俺は頷き、この場にいる者は戦いを決意したのだった。

「それでヨモギとツグミ、キョウはどこにいるのか知っているか？」

俺の問いに絆が地図を出して広げる。

そう、なにも戦争をしている時にキョウが戦場に出てくるとは限らない。

作戦本部にいるかもしれないし、首都に籠もって後方で指示を出しているかもしれない。

いちいち捜していたらキリがないんだ。

そのためにアルトや絆の仲間達が潜入して捜しているんだが、その消息を一向に掴めていない。

俺達は戦争をするために戦っているわけじゃないんだ。

「キョウの研究所は……」

「ここだ」

と、ヨモギがキョウの居場所を地図で指差す。

それは首都から外れた地方だ。森林地帯に見えるが村もあるな。

「過去に封印された屋敷にキョウは研究所を作ったんだ。ここは人を惑わす霧が立ち込める森がある。まさに難攻不落の要塞だ。選ばれた者じゃないと行くことすらできない」

ずいぶんご立派なところに隠れてるもんだ。

だが、場所さえわかれば行けないことはない。

なにせこっちには空から移動する手があるんだからな。

「よし！　じゃあ出発に備えて準備を整える。戦争の方も力を入れなきゃいけないがな」

「そうだね。こんなことは終わらせなきゃいけない。世界を守るはずの眷属器の所持者を罰するのは聖武器や眷属器の役目だ」

ま、やることは一つだよな。

どちらにしても戦争であることに変わりはない。

ただ、倒すべき敵であるキョウを倒せばこんな茶番も案外アッサリと終わるかもしれないな。

「そうそう、ロミナが尚文を呼んでいたよ。色々と準備ができたんだって」

「ほう……」

「ああ、坊主のために素材も集めたから準備しとけよ」

「ラルク、お前もな」
「わかってるに決まってんだろ？　俺を誰だと思ってんだ？」
「若」
「いい加減、思い出したようにそう呼ぶんじゃねえよ！」
お前の役職だろうが。
「まったく……ナオフミ様と一緒にいたら緊張が長続きしませんね」
「俺は至って真面目なつもりだがな」
「時々、ものすごくボケますよ!?」
おや？　何かおかしなことを俺は言ったか？
俺達はラルクと絆達を置いてロミナの工房へと向かった。

「や、昨日は散々だったね」
「そうだな……下手すりゃ大惨事だったな」
あの武器が爆発でもしようものなら城とかなくなっていそうではある。
自分でもよく抑え込めたなと感心したくなるほど、やばい橋を渡った気がする。
「で？　準備とやらはどうなってんだ？」
「そうそう、やっとできたんだよ」
ロミナは言うと、工房の奥から一つの鎧を持ってきた。
俺が前に装備していた蛮族の鎧に形状が似てるな。
ただ、色合いが若干異なるし、所々に白黒の毛皮みたいな素材が付けられている。肩の部分は亀甲か？　首回りの素材は若干赤い……羽か何かを使っているっぽい。
「ずいぶんと高そうな鎧だな」
「もう希少になってる四聖獣の素材を僅かに使ってるからね。これだけでずいぶんと強化されるんだよ。後はコアとなる竜帝の核石の部分だけどね。見てごらん」

ロミナが鎧の胸辺りにある宝石の部分を指差す。
俺が装備していた核石よりも大きいぞ？
で、陰陽の形をしていた部分の黒かった場所の比率が増えてる。全体的にちょっと和風と中華が混ざった感じだ。こう……三国志とかを舞台にしたゲームとかの将軍が着てそう。
「ナオフミが前に持ってきた蛮族の鎧っていう機能不全に陥っていた鎧をもとに作ってみたんだ」
「ほう……ずいぶんと優秀な鎧になったみたいだな」
驚きだ。武器屋の親父以外はまともに俺の鎧を修理というか改修できないと思っていたのに、ここまでの品を作り出すとは。
「案外難しいんだよ、四聖獣の素材を加工するのって。下手をすると素材の癖が悪い方へ発動するからさ」
「ほう……」
絆達が名工と言っていたが、確かに腕は良さそうだ。
「さっきの話に戻るけど、未知の素材や技術で作られてるから私も結構苦戦したんだ。核となっている竜帝の核石をキズナ達が手に入れて保存していた核石と合わせることでどうにか干渉して効果が出るようになった感じだね」
「だから核が大きくなっていると？」
「うん。かなり希少な素材でできてるから大事にしてよ」
「ああ」
とはいえ、キョウを倒したら俺達は元の世界に戻るんだよな。
その時に世界を跨いだ影響で文字化けとかしたらどうなるのだろうか？
「ま、上手くいけば元の世界に戻っても使えるかもしれないから大事にね。使い捨てにされたら私の名誉にかかわるし」
「はいはい。で、この鎧の名前はなんて言うんだ？」
武器屋の親父にも同じ質問をしたな。
目利きでもまだ名称が決定してないのか上手く表示されない。
いや、俺の目利きではまだ完全に識別できないというのが正しいか？
「キズナが言ってたんだけど『元が蛮族の鎧ならバルバロイアーマーでいいんじゃない？』だってさ」

「バルバロイは蛮族とはちょっと違うんだが……」
それでは蛮族ではなく野蛮人だぞ。
まあ、似たようなものか。人間至上主義のメルロマルクにとって亜人の神である盾の勇者はある意味、蛮族であり、野蛮人の神か。
武器屋の親父も皮肉な装備を俺にくれたものだ。
ある意味、ピッタリな装備だったんだな。

バルバロイアーマー＋2　(呪)
防御力アップ　衝撃耐性（大）　斬撃耐性（大）　火耐性（大）　風耐性（大）　水耐性（大）
土耐性（大）　HP回復（弱）　魔力回復（弱）　SP回復（弱）　魔力上昇（中）
竜帝の反逆　四聖獣の力　魔力防御加工　自動修復機能　成長する力

凄い付与だな。闇耐性がなくなった代わりに色々と増えている。
どんな効果か検証しなきゃわからないものまでけっこうある。装備したらどうなるんだろうな？
ただ……名前の後にある（呪）が非常に気になる。
「相当使い手を選ぶものになっちゃったから使えるかどうかわからないんだよね。問題があったら作り直すことになると思う」
「あんまり聞きたくないが、どう問題があるんだ？　一度装備したら外れないとかか？」
「んー……そうじゃなくて、装備すると着用者を締めつける呪いが付いちゃってるんだ。脱ごうとすればどうにかなるんだけどね。部下に試しに試着させたら大変なことになったよ」
「ふぇえ……」
リーシアが脅えている。
お前は本当に臆病だよな。ラフタリアなんか鎧を見て目を輝かせてんぞ。
あ、ラフちゃんもだ。さすがは同じ遺伝子。
「ピカピカー」
フィーロもだな。アレは光りモノを見つけた時の鳥類独特の目つきだ。
「それでも、着けてみる？」
「まあ、試しにならな。ちなみに締めつけるってどんなもんなんだ？」
「試着者の肋骨が全部バキバキに折れるくらい」
「完全に不良品の呪い装備だろ！」
もはや意志を持った締まる鎧じゃねえか。あんまり試したくないぞ。
「着ずに処分するか？」
だが、この効果は惜しい。どうにかして呪いを外すことはできないのだろうか？
「まあまあ、ナオフミは防御力が高いんでしょ？　ナオフミなら使いこなせるんじゃないかと思って処分を保留しておいたんだから確認してみてよ」
「人体実験に付き合うつもりはないが……」
「上手くいけば次の戦いの役には立つと思うよ？」
む……言われてみれば確かにそうだな。正直、今の繋ぎ装備では心許ないと思っていたところだ。
何だかんだでバキンバキンと壊される流星盾とかツグミの攻撃を受け止めた所為で若干破損した脇の部分とかを考えると修理か改造が必要になってくる。
この鎧は何だかんだ言っても俺が愛用していた蛮族の鎧をもとに作ったものらしいからなぁ。
だがなー……なんだろう。キラキラと光沢があるが、俺には黒いオーラみたいなものが時々浮かんで見える気がする。
こう……ラースシールド使用時の蛮族の鎧みたいな変化というかなんというか。
「試着して俺が重傷を負ったらどうするんだ？」
「急いで治療するしかないね。腕の良い治療師を紹介するよ」
「まったく保障になってないが……しょうがないか」
虎穴に入らずんば虎児を得ずというやつだな。
俺自身の防御力に期待して……仮に装備できたとしても新しく出た盾の解放条件を満たすために盾変更はできそうにないな。

「無理そうならすぐに脱いでくださいね、ナオフミ様」
「わかってる。目を輝かせていた奴が言う台詞じゃないっての」
俺は鎧を持って工房の奥にある更衣室に入り、着用してみる。
うん、特には……。
と思ったところで視界の隅に『呪』って文字が浮かんでるのに気づいた。
ラースシールドの時に浮かぶ時計とはまた別だな。
が、特に問題はなさそうだ。なんかギューッと締めつけられるような気がしなくもないが、ベルトで締める程度の窮屈さだな。
とりあえず着こんでからみんなのもとへと戻る。
「どうだった？」
「サイズは驚くほどピッタリだ。ただ、なんか締めつけるような蠢きを僅かに感じる」
着心地は正直、安心できないって感じだ。
少しでも隙を見せようものなら俺を絞め殺そうとする鎧ってのがしっくりくる。
「部下は三〇秒で肋骨が折れたけど、それだけ着けてて平気なら問題ないかもね」
「腕は良いらしいが、呪い装備を作るんじゃねえよ」
今のところは特に不自由はない。
ステータスを見ると……ずいぶんと防御力が上がってんな。
パーセントで防御力を変動させるのか？　前の鎧では足元にも及ばないほどに防御力がある。
盾と連動する防御力上昇と見ていい。下手な盾の強化よりも倍率が良さそうだ。
「時間経過で締めつけが厳しくなるかのテストのために出発までできる限り着ててね」
「はいはい」
人体実験に付き合わされる方の身になってもらいたいな。
「後は着ぐるみだね」
「アレか……」
リーシアが愛用していたフィーロ着ぐるみだ。

どう改造しようと碌な結果になりそうもないが……。
と、思ったらなんか二つの装備品が運ばれてくる。
なんで二つ？
「一つは胸当てに打ち直してみた。残ったのは端材に……なるのかな？」
片方は桜色のフィーロに当てはめると胸辺りの部分を切り取ったような胸当てだ。
他は山吹色と青を基調として……雅な感じのかなり質の良さそうな作りだ。
「その子の二面性を意識して作ってみたんだけどね。元々おかしな素材で作られていたからバルバロイアーマーよりも苦労したよ」
「ほう……」
正直、作りは良いんじゃないか？
「名前はどうする？」
「まだ決めてないね」
「そういやフィーロは天女ってことで見世物にさせられていたよな」
「じゃあ天女の胸当てでいいんじゃない？」

天女の胸当て
防御力アップ　敏捷上昇（大）　衝撃耐性（小）　風耐性（大）　闇耐性（小）
HP回復（弱）　魔力上昇（中）
自動修復機能　牽引技能向上　積載量向上　覚醒する力

フィーロ着ぐるみをそのまま抜き取ったみたいな良いところ取りの胸当てが完成したな。
外見も悪くない。
これだけ見るとロミナってたしかにかなりの名工なんじゃないかと思えてくる。
ま、俺を絞め殺そうと必死のバルバロイアーマーは無視するとしてだ。
「残りはなんだ？」

と、なんか端材で作ったというフィーロ着ぐるみの残骸を広げる。
……俺はロミナを凝視する。するとロミナはサッと視線を逸らした。
そこにはフィーロ着ぐるみをそのまま流用したと思しき寝巻きがあった。頭の部分はフードに改造されている。
俺はこれをフィーロ寝巻きと命名しよう。

フィーロ寝巻き
防御力アップ　敏捷上昇（大）　衝撃耐性（小）　風耐性（大）　闇耐性（小）
HP回復（弱）　魔力上昇（中）
自動修復機能　牽引技能向上　積載量向上　形状変化　種族変更　隠された力　隠し武器

しかもだ。フィーロ着ぐるみにあった魔物着用時の問題がちゃっかり解消してやがる。
そもそもこの隠された力って何なんだよ？
これも着るとサイズが変更されるのか？
「なんと言いますか、着ぐるみが魔改造されているのがわかりますね」
「様々な鍛冶師の手を渡って凶悪化していく装備……いや鍛冶師の悪ふざけの結果というべきだな」
「メルちゃんが受け取ったら喜んでくれるかなー？」
「まあ、アイツなら喜びそうだな」
フィーロの親友だしな。
「さて、この二つを誰が装備するかだな」
俺はラフタリアとリーシア、フィーロ……そしてラフちゃんに目を向ける。
持ち帰ってグラスとか絆辺りに着させるとかも考えたがな。
ラルクもありだろ、この寝巻きは。奴に着させて苦渋に満ちた顔をさせてやりたいような気もする。
宝石をチラつかせればテリスも賛成するだろう。
「私は胸当てがいいです」
「ラフタリア、お前は巫女服があるだろ？」

「確かに優秀な装備ですが……」
この胸当てを着けたラフタリアを想像して、今の巫女服のラフタリアと比べてみる。
うん、見栄えからしても巫女服の方がいいだろ。
ラルクも地味に金を使ってくれたのか、この巫女服には結構いろんな効果が付いてるし。
若干性能で劣るが、付け替えるほどではない。
むしろ、俺の目の保養のためにラフタリアは巫女服を着るべきだ。
「期日までにラフタリアに似たような効果の巫女服を用意できないか？」
「ナオフミ様、拘りすぎです」
む、ラフタリアに注意されてしまった。だが、しょうがないだろう？
「ラフタリアさんの方はラルクから頼まれてるよ？」
こっちと、ロミナは巫女服を持ってくる。裏地に白虎の皮が使われているのか？
「前に作った白虎の法衣を巫女服に仕立て直したものだよ」
お？　目利きが上手く発動しない。だが、名前だけならわかるぞ。

白虎の巫女服

色合いは殆ど変化がないな。
ラルク、何度も思うがお前は良い仕事をしているな。
「つまりラフタリアの装備もあるということだ」
「はぁ……どうしてナオフミ様達がこの服に拘るかわかりませんが、わかりました」
「ラフー！」
ラフちゃんがスポッとラフタリアが着ようとしている巫女服の裾に入り込んで顔をのぞかせる。
ああ、可愛いな。
「ラフー」
ラフちゃんの頭を撫でる。

「つまりこの二つは……」
俺とラフタリアはリーシアとフィーロに目を向ける。
というかフィーロは着ないか。完全に余ったぞ。
「ふぇええ……」
「どうしたの？」
ラフタリアと内緒話をする。
「どっちを着るか？　って聞いてリーシアはどっちを選ぶと思う？」
「寝巻きではないでしょうか？　顔が見えなくていいと言っていたじゃないですか」
そうだな。俺はラフタリアの意見に頷く。
「よし、じゃあリーシアには――」
「フィーロも着てみたいー」
空気を読まずにフィーロが手を挙げる。
「お前、鎧とか嫌がっただろ」
「えー？　でもあまるんでしょー？」
まあ、余りはするな。ラフちゃんがこんなの着られないだろ。
いや、ラフちゃんにフードを被せるとかどうだ？
すごく似合いそうだ。それとも茶釜とか着せて分福茶釜とかにさせてもよさそうだ。
おお！　なんかイメージだと凄く似合いそうだぞ。
式神繋がりでクリスはサンタ帽だな。完全にベックルと一致する！
「ナオフミ様、何か別のことを考えてませんか？」
「そんなことはないぞ」
「凄く怪しいです。なんで視線がラフちゃんに向かうんですか」
ギクッ！　……完全に勘づかれてる。ラフタリアも察しが良くて困るな。
「フィーロはどっちを着てみたいんだ？」
話題を逸らそう。じゃなきゃラフタリアに怪しまれる。

「こっちー」
よりによって寝巻きの方をフィーロは指差した。
俺はリーシアの方を見る。
「いいのかリーシア？」
「ふぇえ……」
「顔が隠れた方がいいんだったな。フィーロが欲しがっているが我慢させるぞ」
「ぶー」
「ふぇえええええ！」
「どんな言い争い？」
そこにアルトがロミナのいるカウンターの方からやってくる。
いたのか。全然顔を出さないから忘れていたぞ。
「フィーロって子の方が似合うと思うよ、その寝巻き。で、胸当てはそっちの子に着けさせた方が自然だよ」
「ふん、どうやら商人としての問題を察する能力は低いようだな」
「なんでそうなるの!?」
あ、アルトが突っ込んできた。
「いいか、リーシアは実は人見知りで顔が隠れる着ぐるみを愛用する変態なんだ。その変態がいる状態でどっちを選べばいいかを俺達は悩んでいるんだ」
確かに見た目を重視するならフィーロに寝巻き、リーシアに胸当てだろう。
だが、リーシアの問題を加味するとリーシアに寝巻き、フィーロには我慢してもらって胸当てが一番だ。
「ふぇええええええ!?」
だから奇声を上げるなというのに！
「我慢してもらうってのはできないの？」
「無理だろ。リーシア、実は恥ずかしくて戦闘に集中……できてなかったんだろ？」
「なんかナオフミ様が強引に寝巻きをリーシアさんに着せようとしているように見えてきました」
「心外だな。俺はリーシアのことを考えて言ってるんだぞ」

「とか言いつつ、フィーロって子がもう寝巻きを着てるよ」
「何⁉」
「じゃーん！」
なんか誇らしげにフィーロが人型で寝巻きを着てる。外見年齢相応の子供っぽさが強調されてるな。
「なんかすっごく元気になるよー」
徐にステータスを確認する。
何⁉ フィーロにしては頼りなかった今までのステータスが軒並み上昇してる……だと⁉
どうなっているんだ？
そう思って着ぐるみの効果を思い出す。
……もしかして種族変更と盾の補正がここにきて効果を発揮したんだろうか？
考えてみればリーシアが着ていた時も効果を発揮していた。
その効果が切れてしまったのは異世界を渡った所為で、この着ぐるみの方は効果が復活したと考えれば納得がいく。
「ますますリーシア向けの装備だ。フィーロは脱げ！ 頼りないリーシアにはそっちが一番だ」
「やー！」
く……フィーロの奴、ハミングファルコンに変身しやがった。
すると寝巻きも形状を変化させてフードみたいになってフィーロの動きを全く阻害しなくなった。
「おのれ！ そんな効果があるならラフちゃんに着せるのも視野に入れるべきだ」
「あ、あの！ 私は胸当てでいいですから」
「ナオフミ様、落ちついてください！」
「適当に作ったはずの寝巻きを取り合う状況っていうのは、鍛冶師として微妙に嬉しくないんだけど……」
「これが異世界人の摩擦というやつじゃない？ キズナの時もあったじゃないか」
「キズナは潮と大らかなのに釣竿にはうるさかったね」
なんてロミナとアルトは俺達が言い争いをしている最中、なんか黄昏ていたのだった。
結局、リーシアは胸当て、フィーロは寝巻きになった。
おのれ、いずれラフちゃんのためにその寝巻きを奪ってみせるぞ。
覚えていろよフィーロ……。

八話　二刀流の使い方

俺が舌打ちしてフィーロを睨んでいると、ロミナがアルトと一緒に店の奥から武器を持ってきた。
「ん？ まだあるのか？」
「まあね。ラルク達に頼まれて色々と預かってきたんだよ」
「ほう……」
「アルトにも結構がんばってもらったんだから感謝してよ？」
運び込まれる武器に盾がないのに関して色々と問い詰めたいところなんだがな……。
「何を持ってきてるんだ？」
「ナオフミとラフタリアさんはコピーをすればいいんでしょ？」
「ああ」
「だから、ちょっと持ってほしいんだよね」
で、運ばれてきたのは二本の刀だった。かなり豪華な装飾が施された鞘に収まっている。
相当の業物であるのが一目でわかるぞ。俺の持つ目利きでも名前しか出てこない。

白虎ノ太刀
朱雀ノ小太刀

「これは……？」
「一本は私のところで作って売ったものを一時的に借りてきた。というのも四聖獣の素材は希少でね。作る武器が限られてる中で辛うじて作られたものだよ」

まあロミナが担当しているのはグラスやラルク、絆だからな。刀は滅多に作らないのだろう。
「結構苦労したんだよ？」
アルトが胸を張って言った。
ロミナが白虎ノ太刀を持って鞘から抜く。
スッという音と共に、刀から何かが飛び出して通り過ぎたような気がする。
刀身は白く光沢があり、反りが光を吸収し、増幅させているかのように輝いている。
遠くからでも一目でわかるほどの光を宿していると言えば……いい。
「なかなかの逸品だと思うけど、どう？」
「そうだな」
村正とか正宗とか、ＲＰＧなんかに出てくる優秀な装備の類に勝るとも劣らない逸品なんじゃないか？
四聖獣を素材にした武器……か。
俺の方の世界だと四霊を素材にした武器とかが作られるんだろうか？
「かなり癖のある素材で、その問題をクリアするのは骨が折れたんだから」
「どんな癖があったんだ？」
「白虎は皮や骨を使ったんだけど……あ、骨の破片でも金属に溶け込ませるだけで効果が出るんだけどね。耐久力とか振るうだけで怪我をするとかの問題が結構あったんだよ」
「ほう……」
「その問題を解決して作り出したのがこの一振り。他は一応、グラス達の武器になってるよ」
じゃあグラスが使っている武器も四聖獣のものなのか？
雰囲気は少し違うような気がするが……と思って見ていると。
「それでも癖があるしね。確かグラスの逆式雪月花は白虎の素材で作った扇で出たとか言ってたね」
道理で強いわけだ。俺達よりも良い武器を使っていたということじゃないか。
「今使ってるのは確か……魔竜の扇とかその辺りだったと思うよ。癖がなくて使いやすいんだってさ」
「そっちはないのか？」
「生憎とね。キズナ達が倒した竜帝を使った素材だし、この国の一部の鍛冶師しか使用を許可されなかったものだから」
と言いつつ、ロミナは俺の鎧を指差す。
「キズナが使ってる釣竿とかは一段下の魔竜をそのまま素材にしたものだと思うよ」
便利な素材だな。
あいつ等の武器って示し合わせたように黒いものばかりだったが、そういう理由があったのか。
「ナオフミの鎧にも使われてるよ。まだ出現してなくて行方不明だけど青龍の部分が魔竜の素材で再現されてる。竜帝の核とかもね」
「じゃあ盾はないのか」
「時間があれば作ったんだけどね。素材もごく一部しか手に入らなかったし」
まあ、腕の良い鍛冶師に鎧と防具を作ってもらったんだから文句は言うまい。
盾は……どうにかなると思うしかないな。できればラースシールドには頼りたくない。
「刀となるとラフタリアだな」
「はい」
ロミナが白虎ノ太刀を鞘に収めてラフタリアに手渡す。
パチッと静電気を受けたかのようにラフタリアは指先を一瞬震わせたが、刀を強く握りしめてからロミナに返却する。そしてすぐに持っていた刀の眷属器を白虎ノ太刀に変化させた。
これはウェポンコピーだ。
魔物の素材とは別……店などで売られている市販品を手に持つだけで同じ武器が使えるようになる。
俺の盾と同じく、刀の眷属器に選ばれたラフタリアが使える能力だ。
「これが白虎ノ太刀……凄い性能です。今の私でもギリギリ変化させられる業物です」
刀を抜いたラフタリアだが、その手が震えている。
すごく重たそうで、額には汗が浮いている。
「どうした？」
「変化条件は満たせているのですけど、使いこなすのに必要な力が足りません」
あー……あんまり気にしていなかったが俺の盾にも存在する。



条件と使いやすくなる能力とでは差があるというか、普段は気にも留めない要素だ。使えないわけじゃない。だけど性能を引き出すには力が足りない。
なるほど、グラス達が使わない理由はそれか。
優秀な武器となると、そういう問題点もあるわけだ。
「地道に能力を上げていくしかないだろうな」
「はい」
「それで？　どんなスキルが内包されているんだ？」
「えっと……技能ですね。二刀流です」
うわ……これまたベタな能力が入ってるな。
ラフタリアが刀から左手を離すと空中にもう一本の刀が出現する。
……あ、持ち切れずに両手共、地面に刃先が付いている。
スッと音を立てて地面を斬ってるけど。
「ちょっと、人の工房の床を斬らないでよ」
「すいません。重くて……」
「どうにかできないか？　まだ解放してないなら別の武器に変えるとかさ」
「ええっと」
そう言いながらラフタリアは刀を変化させる。
……右手の方は軽そうな刀に変わったが、左手は白虎ノ太刀のままだ。

おい。つまりこれってかなり便利なんじゃないか？
「ラフタリア、左手の刀を鞘に収めろ」
「わかりました」
スッと刀を鞘に収め、残った右手で一本の刀を持つ。
おお、同時に二本の刀を持っていなくてもいいのか。
これって二本装備していれば解放に必要な時間が短縮できるだろうし、鞘に一本入れてハイクイックの時間をチャージできる、と良いことずくめの状態なんじゃないか？
大変かもしれないけど、ラフタリアの能力を向上させるためにやってみる価値はあるかもしれない。
「こっちの刀はどうしましょうか……？」
斬れないように竹光に変えているけれど、右手の刀をどうするか悩んでいる。
「もう一本、鞘を作ればいいな」
急だけど作る価値はありそうだ。
「じゃ、次は朱雀ノ小太刀の方だね」
同様にロミナはラフタリアに刀を渡した。
すぐにウェポンコピーが作動する。
「いやー……眷属器は便利だよね。武器を持ってもらうだけで複製できるんだから」
「そうだな。これで手から離れれば無限増殖ができるのにな」
「あ、やっぱり考える？」
アルトと頷き合っているとロミナが眉を寄せる。
「そうなったら鍛冶師として商売あがったりなんだけどね」
まあ、そうなるよな。俺も無限増殖する薬とかアクセサリーがあったら嫌だ。
ん？　よく考えたら増殖させられたら値段こそ下がるが、その分たくさん売れるから俺は困らないぞ。
しかも俺が主導で増殖させられるなら操作も容易い。
「俺は困らないな。増えれば増えた分だけ売れる」
「君はそう言うだろうと思ったよ。ホント、アルトよりも商才があるのは納得できるね」

「どこで納得したか知らないがな」
「あの……こっちの刀は変化条件さえも満たせないのですけど」
あー、まあ業物だろうしな。
「いいんじゃないか？　今は使いやすい刀を使っていけばいい」
「はぁ……どっちにしてもＬｖをもっと上げなきゃいけませんね」
「いやいや、俺達は目的を果たせたら元の世界に帰るんだぞ？　この世界でのＬｖは殆ど不要だ」
まさしく不必要でしかない。
「そうなのですけど、帰る時に手から離れてくれると思いますか？」
「……」
正直、かなり不安だな。
手から離れず、元の世界に帰った後、こっちの世界の波が起こってラフタリアが目の前で消失とかしそうで怖い。
「あの、ナオフミ様？」
「気にするな。テリスとかグラス辺りに頼んで最終的に刀が手から離れるよう、説得してもらおう」
よく考えたら俺の盾も同じく呪いの装備みたいなものなんだ。
強くなったと喜んでいないで、全てが終わった後のことを考えるべきだろう。
「キラキラー」
フィーロが相変わらず光りモノに目を光らせてるな。
「借り物だろうから決戦に備えてリーシアに持たせるとかできないんだよな？」
「ゴメンね。さすがにそこまでされるとこっちが困るんだ」
と、アルトは謝罪してくる。
知ったことかと借りパクして逃げるのも手かもしれない。
世界が大変なのに相手の事情など知ったことではないからな。
だが……ラフタリアでさえ使うのが大変&変化させられない業物をリーシアが扱えるとは思えない。そして、俺達の中で刀を扱える仲間はいない。
「既に使う人は決まってるからね」

「なんだ、いるのか」
「キズナの仲間にね。戦争で使ってもらう予定」
なら没収するわけにもいかないな。
しかし、そいつも使いこなせるのか？
よくわからんな。
あ！……でも眷属器みたいに強化とかできないんだから、そこまで強くはならないか。
「後は素材だね。こっちに来てくれればいいから」
そう言われて俺達はロミナ達と絆達が集めたらしい素材を譲ってもらって武器に収めた。
ああ、その工程で白虎とかの複製の付かない盾は手に入ったぞ。
まあ部位でしかも破片みたいな素材だから、白虎の皮の盾とかだったがな。
血とか肉がないのが惜しいな。
ちなみにステータスは確かに優秀だった。

白虎の皮の盾の条件が解放されました！
白虎の牙の盾の条件が解放されました！
白虎の骨の盾の条件が解放されました！
etc……

白虎の皮の盾
能力未解放……装備ボーナス、気配察知（中）
専用効果　敏捷上昇（強）　衝撃吸収（中）　受け流し（中）　援護無効　風圧発生

白虎の牙の盾
能力未解放……装備ボーナス、SP30
専用効果　敏捷上昇（強）　受け流し（中）　援護無効　風圧発生　白虎の牙

援護無効は痛い。俺の役割を放棄する厄介な専用効果だと思う。
風圧発生は何かと思って変化させたら俺の周りに風の膜が作られるものだった。
これで魔法や攻撃を弾けるとかだったらよかったんだが、単純に扇風機に近い風を起こせるだけの代物だ。
しかも俺の方は轟々と音がしてかなりうるさいだけという始末。
能力自体は覚えている限り、ソウルイーターシールドよりも高めではある。
だが！　援護無効が痛すぎる。
ただ、使った感想だと敏捷の上昇が馬鹿にならないのと受け流しが上手くいけば優秀そうだ。
やり方次第で化けそうだが……確かに癖の強いものだな。
牙の盾は反撃能力を持った盾だ。まだこっちの方が役に立つだろうな。
とはいえ、どっちにしても援護無効が厳しい。
他に朱雀と玄武のシリーズをもらった。
ただ、今の俺では変化条件を満たせないものが多い。
やはりLvか？　ゲームじゃないが、ボスに備えて事前に上げておくべきか？
「後は素材だけだけど……」
そう言ってロミナは黒い鱗と骨をくれた。
あと……前にも見たことのある核石だ。
試しに盾に入れてみる。
するとバチッと盾がスパークした。
な、なんだ？　今までこんなことなかったぞ？

ロックされています。

「なんかロックされてると出たのだが……」
考えてみればあっちの世界でもドラゴン系の盾は出たためしがない。

そりゃあ最初はＬｖが足りないのかとか思ったが、いくらなんでもおかしい。
で、ロックって何が起こってんだ？
「あれ？　出なかった？」
「みたいだな」
ラフタリアももらった素材を武器に入れる。
するとラフタリアの方は黒い、グラス達が使っている武器に似た感じの刀に変化してる。
「あ……凄い。確かに癖がなくていいですね。しかも必要Ｌｖが少なめです」
なんでだ？　正直羨ましい。
何が理由だ？　何が理由でその武器が使えないんだ？
心当たりがない……わけじゃない。
盾はこの世界の聖武器じゃない。だから手に入る技能も違えば出現する盾も違う。
だから、出せない武器があっても不思議ではない。
だが……今までいろんな武器が出せたのに、魔竜、ドラゴン系の素材でだけ何も出ないのはおかしい。首を傾げる。
すると鎧と盾が鼓動したように感じた。
「な、なんだ？」
バチッと盾が震える。
やがて――

魔竜の盾の条件が解放されました！

と、一つだけ盾が解放された。

魔竜の盾
能力未解放……装備ボーナス、スキル「アタックサポート」
専用効果　竜の鱗（大）　C魔弾　全属性耐性（中）　魔力消費軽減（弱）　SP消費軽減（弱）

ステータスもなかなか優秀だ。
癖がない。しかも軽減と全属性耐性が付いている。
総合的に見てもこれ一本でいいだろうと思える水準を満たしている。
困ったらこれ、と言える装備だ。
しかも必要Ｌｖも低い。万能すぎるぞ、この盾。
「むー……」
「どうしたフィーロ？」
盾を凝視しているとフィーロが唸った。ラフちゃんはそんなフィーロを見て首を傾げている。
「わかんないけど、なんかムカムカするの」
「食いすぎて胸やけでもしてるんだろ」
このアタックサポートとは何なのだろうか？
「アタックサポート」
そう呟くと俺の手に小さな棘が出現した。
とりあえず持って何度か見る。
矢じりみたいな感じでＶの字の先端が付いてて……ダーツみたいに投げつけられそう。
あ、消えた。一定時間、謎の棘を作り出すスキル……か？
クールタイムも若干長めだ。三〇秒は必要だな。
何に使うのかよくわからない。後で試すとしよう。
「なんか絆達が使っている武器とも統一感があるな」
「そうですね」
「まあ、色々と礼を言う」
何だかんだで色々ともらったからな。
「いいのいいの、結局は私達のために戦ってくれているわけだし、キズナを見つけてくれたお礼も兼ねてるから」

ロミナとアルトは気軽な感じで愛想よく言った。

「ナオフミが見つけてくれなかったらきっと、まだキズナを見つけられていなかったよ。だからこっちも相応の礼をしなくちゃ悪い気がするんだ」

「グラスやラルクもナオフミには感謝しきれないほどの感情を抱いていると思うよ」

「ま、絆と知り合ったのは偶然だけどな」

運悪く敵の策略で落とされた場所に偶然、絆がいただけに過ぎないのに礼を言われるとなんとなく微妙な心境になる。

結果的に絆を連れ戻すのに協力するかたちになっただけなんだからな。

「それでもさ。これから大変な戦いになるんでしょ？　こっちは任せて、がんばってこの世界に来た目的を果たして」

「ああ、言うまでもない。俺達は俺達のできることをするだけだ」

そうだ。キョウとの決戦の日は刻一刻と近づいてきている。

戦争。国の陰に隠れているキョウの居場所へと向かい、報いを受けさせるんだ。

こうして俺達は準備を整えてから出発することになった。

翌日、城へと行くと絆達とエスノバルト、ヨモギが俺達を待ちわびていた。

留守番をするらしいツグミも松葉杖でだが、待機している。

「じゃあ行きますよ」

「船の眷属器で途中まで行くのか？」

「いえ、乗り込みます」

「作戦を決めよう。一応、聖武器、眷属器の所持者同士の戦いを想定してる」

その言葉を聞いてヨモギが拳を握りしめる。

まあ状況証拠だけで判断すると間違いなくキョウが犯人だが、それでも信じたいと思っているといったところか。

「キョウと遭遇後、話し合いができるなら事情を聞く……まあ、上手くはいかないだろうね。その後、キョウを倒

したら守護獣のエネルギーを尚文に返却し、戦争を早急に終わらせて、この戦いは終わりにしよう」

「単純だが、やることはそれしかないな」

だが……何だろう。何かが引っかかる。

キョウは正直に言えば考えが卑劣で罠を張り巡らせるタイプだ。

俺と似てるわけじゃないが、奴ならどんな手を打ってくるのかを考えると自然と思い浮かんでくるのだ。

俺はグラスの方に目を向ける。

何か……キョウを仕留めるための材料が足りない気がする。

リーシアが剣を投擲して突き刺しても死ななかったような化け物だ。

仮にグラスやラルクの切り札を使っても勝てるかどうか怪しい。

それでも、仮に勝てたとしても……なぜか倒せないような気がする。

なぜか俺にはキョウとクズ二号が重なってしまう。

この二人は共通項が多く、同類にしか見えない。

クズ二号はなぜ、動くな、死ぬぞと言っているのにもかかわらず殺せと連呼していたんだ？

なぜ……クズ二号の取り巻きの中にグラスのようなスピリットはいなかったんだ？

え？　今、俺は何に気付いた？

……スピリットがいなかった？

なぜいない？　いや、あの時はいたはずだ。

なのに今ここにいないのはなぜだ？

「絆、今回の襲撃者に確認を取っていいか？」

「え？　うん」

俺はクズ二号の取り巻きだった奴の方へ顔を向ける。

「お前等の好きな奴の恋人のうちスピリット……魂人はなんでこの中にいないんだ？」

「突然行方不明になった。捜しはしたが見つからない」

……何だろうか。パズルのピースがかちりと嵌ったような錯覚を覚える。

「グラス」

「何でしょう？」
「スピリットは確か魂……幽霊とは違うんだよな？」
「ええ、似て非なる者ですね」
「絆、幽霊はこの世界に……いるよな？」
「そうだね。幽霊船で戦ったと言ったでしょ？」
つまり、ぶっちゃけ怪しい要素であった魂の概念はこの世界には存在する。
もしもクズ二号やキョウが俺の想像通りのタイプの人種だったら絶対に研究している類のものだ。
「ついでに質問だ。グラス、スピリットは魂とか見えるのか？」
「ええ、普通の人よりも強く見ることができますよ。式神を使えばナオフミにも見えます」
「何かおかしいことでもありますか？」
グラスとクズ二号の取り巻き等が同じく首を傾げる。
「お前等の好きだった奴が死んだ時、スピリット共は魂を追いかけようとしただろうな」
「……ああ。スピリットの中には肉体の死を別れと思わない者もいる」
俺の推測は突飛だとは思う。
だけど一つはまぐれでも当たったんだ。
「ちなみにキョウを捕らえた場合の罪状とかも聞いていいか？　この世界独自の罪とかあるんだろ？」
「そうですね……殺してもアンデッドとして蘇ったり、ゴーストになられたりしたら困るので——」
俺が何を意図しているのかグラスは気付き、ヨモギとツグミも察したようだった。
「おそらくお前等の勘は当たってるかもな。同時にお前の愛した奴はキョウに消されている可能性も高いことを覚えておけ」
「う……」
クズ二号の取り巻き等は涙ぐんで顔を逸らす。
「ですが死んでもいいように準備してるのがなんだというのですか？　厄介になるだけですよ？」
「奴はアンデッドになるわけじゃない。俺の勘が正しければ……だけどな」
俺はキョウが行っているであろう研究に関して説明した。

「……過去に似たような話を聞いた覚えがあります。まさか……」
「ありえなくはないね。オレも似たようなアクションゲームをしたことがあるよ。確かに、いつ死ぬかわからない状態で、予防線を張れるのに張らないのはおかしい」
「おいおい……いくらなんでも大げさすぎねえか？　そんなのおとぎ話の次元だぜ？」
「眷属器に選ばれた奴が何を言ってんだ。そもそも、おとぎ話に匹敵する様々な不思議が異世界には溢れてるんだよ」
現代日本だったらありえない話だが、ここはファンタジーの世界だ。
ラルクは眉唾だと思っているようだが、間違いない。
後は奴の研究所に乗り込んだ時にでも証拠を見つければいい。
奴を取り囲む包囲網をこっちも準備するまでだ。

俺達はエスノバルトの船に乗り込み、移動を開始した。
途中までは龍刻の砂時計同士の流れに乗って移動する。
時々飛ぶ魔物や敵軍の飛行師団とやらと戦闘になったけど、グラスとラルクに渡しておいたアクセサリーのお陰で快勝の旅となっている。
順調すぎるほどの旅だったな。
そんなこんなで三日目のこと。
「あそこがキョウの研究室がある屋敷だ」
ヨモギが指差す……霧の立ち込める大森林の上空を旋回していた。
「どこにあるんだよ？　霧で見えないのも然ることながら一帯が森だぞ」
「外からではわからない」
「この先は霧があって進んだら危なそうですね」
エスノバルトが言った。
「入っても侵入者を追い出す迷いの霧が待ち受けている。この鈴がなければすぐに外へはじき出されることになるだろう」

と言ってヨモギは鈴を俺達に見せる。
そんな便利な道具があるのか。
……しかし使い捨てにされた奴が持っている道具が果たして役に立つのか？
「これを持って霧の中に入ればすぐに屋敷が見えるはずだ」
「じゃ、とりあえず行ってみるとするか」
「……わかりました」
エスノバルトが短く答え、ヨモギが鈴を振って音を出す。
そのまま俺達は霧の中に入り、しばらく船は前に進んでいく。
「……？」
ラフタリアが首を傾げていたが、気にせず進むなか、ヨモギの持っていた鈴は鳴り響いていた。
が──霧が晴れて辺りを見渡すとどうも入った時の場所に戻ってきてしまっているように見える。
「これが霧の中か？」
「い、いや！　そんな馬鹿な！　やり方を間違えたに違いない。もう一度だ」
ヨモギの言葉にエスノバルトは船を操作して再度霧に入る。
だが、すぐに外へはじき出されてしまった。
まあそうだよな。俺がキョウでも同じことをすると思う。
「どうやらその鈴は役に立たないみたいだな」
「そんな……キョウ……」
いきなり立ち往生か。厄介な所に逃げ込みやがって……確かにそこなら戦争で負けたとしてもどうとでもやり直せそうだ。最悪、どこかの国に取り入ることもできるしな。
「どうにかしてこの霧を晴らすことはできない？」
「できるぞ」
俺はバイオプラントの種を絆に見せつける。
「尚文、まさか……」
絆が青ざめて俺を指差した。

「ああ、繁殖性とかいろんな部分を凶悪にして森に撒くんだ。きっと数日でこの辺りはバイオプラントに汚染されるだろうな。そうなったら果たして防衛装置は機能するかな？」
「大陸も一緒に汚染されそうだよ？」
確かにな。だが、そうやって逃げようとしてきたキョウを俺達で倒せばいい。
新手の城攻めだ。キョウを倒した後、戦争の方で使うのも手だな。
「大陸が汚染されそうになったら、大々的に魔法とか使って焼き払うしかないな。除草剤で処分する手もある」
後はバイオプラントには核となる木がありそうだから、そこを潰せば問題ないだろう。あとはバイオプラントに弱点でも作っておけばどうとでもなる。
「いや──……さすがにその手は使いたくない」
「また倫理観か。だが、どうする？　まさかどこかの遺跡にヒントがあるから、とか長ったらしい謎解きなんかしないよな？」
「環境を考えて！」
俺と絆が言い争いをしているとラフタリアとラフちゃんが手を挙げる。
「あの……もう一度、挑戦していいですか？」
「ん？　何かあるのか？」
「はい。エスノバルトさん、私の言う通りに進んでください」
「ラフー」
「わかりました」
飛行船は再度霧の中に突入する。
そして少し飛んだ頃……。
「右へ、次は左、えー……次はそのまま進んでください」
ラフタリアとラフちゃんが指差す方角へとエスノバルトは進んでいった。
ずいぶんと霧の中にいる時間が長いな。
「斜め右、そして……下がってください」
「下がる？」

「わかりました」
そしてラフタリアの指示通りに……飛行船が後ろに下がっていく。
すると……後ろから霧を抜けて、霧の壁に覆われた森の中の屋敷がぽつんとあるところへ入ることに成功した。
「おお！　よくわかったな」
「なんとなく幻覚魔法に近い霧だって感じて……迷路みたいに張り巡らされた道を進んでいっただけなんですよ」
ああ、迷路なのか。壁にぶつかったらスタートに戻る的なやつだったのだろう。
ラフタリアとラフちゃんは幻覚魔法の使い手。だから迷いの森的なギミックは通用しないってわけだな。
「よし！　ラフタリアのお陰で上手く侵入することができた。行くぞ！」
「「おー！」」
俺達の雄叫びと共に飛行船は屋敷の庭に着陸し、俺達は屋敷に乗り込んでいくのだった。

九話　キョウの研究所

「ここがキョウの研究所か……」
何というか……古びた洋館って感じだな。和風の国なのに。
どう考えても地下とかどこかの隠し部屋とかのような面倒な仕掛けの先にいそうな気がする。
「こっちだ」
ヨモギが案内しようとしてる。よく知っている場所なのだろう。
それにしても……。
「女の取り巻きが見当たらないな。いたら色々と問い詰めるところだが」
「……相手も想定済みだったんじゃないの？」
辺りを見渡して、俺も同意する。
「もしくは取り巻きは出撃してるか、避難させているのかもな」
もう一つの可能性に関しては考えないようにしよう。

さすがに自分の女共さえ実験の犠牲にしたりは……しないと思う。
「血の気が多い者が戦争に出ているのは否定しない。が、元々ここに来るのはごく一部だ」
「ここには住まないのか？」
「キョウは特別な信頼関係のある者以外はここには連れてこないのだ。アイツは人助けはしてもあまり自分の内面に触れてほしいタイプじゃないからな」
裏表のある人間の典型じゃないか。
表面上は優等生だけど、裏では悪事に手を染めている、みたいな。
「だからここを知っているのはキョウの仲間でも一部だけであるはず……だった」
ヨモギは自分が特別だったとでも言いたげだな。
つまりキョウの取り巻きを人質にするのは事実上不可能ということだ。
もしくは説得が不可能な、キョウと同じ穴の狢だ。キョウに都合がいいように洗脳とかされてそうだ。
ヨモギやツグミみたいに。
「ま、どっちにしてもだ。ここにキョウがいさえすればいいだけだ。いなかったら研究しているものを拝借して戦争に備える。ここは破壊すればいい」
逃げている可能性もあるんだからな。
「く……」
「忘れるなよ。お前は敵国に助けを求めたんだ。個人ではなく国単位での戦いでもあるんだ」
ヨモギが強く拳を握りしめる。
「卑怯な！」
「お前さ……戦争で相手の国を支配しようとすることは卑怯じゃないとでも思ってんのか？」
自分達の論理が正しければ何をしてもいいとか思っているタイプか？
都合のいい正義を信じてるなんてそれこそ樹みたいなもんだぞ。
「坊主、程々にしておけって。何が真実かは……ここを調べたらわかるだろ」
「……そうだな」
なんて言った直後、獣の雄叫びが辺りに響き渡った。

声の方に目を向けると、クズ二号が研究していたらしい白虎の複製体や赤い鳥……朱雀や蛇の尻尾を持った亀、玄武っぽい奴が現れる。

「ガアアアアアアア！」

他に……どう見ても人体改造されて暴走状態にある改造人間もいるな。

もはや人間と呼べるか怪しいラインまで侵食され、自我も喪失しているのか完全に据わった目でこちらを睨み、口からは常時涎を垂らしている。

「どうやらキョウの手による真実とやらがお出ましのようだな。しかも手遅れっぽい奴までいるぞ。絆……助けられるか？」

「……わからないけど、やるしかないね」

「キョウ……お前は、本当にそんな非道な真似をしたのか？」

ヨモギが絆から与えられた刀を鞘から抜いて構える。

俺達をサポートする形で動くらしい。

「というわけだ。行くぞ！」

「ガアアアアアアアア！」

獣の叫び声をゴングにして俺達は襲い来る魔物と改造人間を蹴散らしていった。

「く……侵食が酷すぎて、もう人間として聖武器が認識してくれない……」

絆が改造人間を助けようと斬りつけたが、バッサリと斬り伏せてしまった。

この中で、単純な攻撃力という点だけで言えば絆が一番高い。

それこそ、今までの旅路を見れば一目瞭然だろう。

グラスのスキル、逆式雪月花を消費なし、クールタイム最少で常時相手にぶっ放せるくらいの強さを持っている。

唯一、対人能力がないという短所さえ除けば完全に化け物なんだ。

斬り伏せられた改造人間は斬られた瞬間、何か呟いたように見えた。

それを聞いて絆やグラス、ラフタリアは目を潤ませる。

「どうした？」

「絶命する瞬間、オレ達に感謝の言葉を言うんだよ」

「くっそ！　やりづれえな！」

ラルクもその意味を理解して、戦いを躊躇している。

俺は攻撃を受け止めてから頷く。

「同情はしない方が身のためだぞ。コイツ等のためにもできることをするしかない」

助けられる命と助けられない命を俺達は常に選択しているんだ。

傲慢だとは思うが、全てを救えるほど、俺達は強くない。

「絆、他の奴等もわかってるだろ？　俺を召喚した方の世界でも、霊亀の使い魔に寄生されて手遅れになった奴や殺された奴もいる。半分は霊亀がしたことだろうが、残り半分は……」

俺の言葉に絆は深く頷いた。

「オレは尚文達の言葉を話半分でしか聞いていなかったってこと……か」

「坊主の世界での被害も激しいもんだった。確かに……俺達の覚悟が甘かった」

「それでも助けたいと思うなら……がんばって戦闘不能にでもさせておくんだな」

とはいえ、再生力も半端ないから四肢を飛ばす程度じゃ侵食を強めて襲ってくる。

そんな甘いことを許さないとばかりにな……。

「うー……」

フィーロが困ったような声を出す。

フィーロはこういうの苦手だからな。

気持ちはわかるが、しょうがない。

「はぁ！」

ラフタリアが振るっていた刀を鞘に収め、もう一刀を収めていた鞘から抜刀し、辺りの魔物と改造人間を薙ぎ払う。

「そうです！　こんなことをした方を私達は許すわけにはいきません。そのために少しでも前へ進みましょう！」

ラフタリアが檄を飛ばすように言い放った。

確かにそうだな。躊躇していては俺達がやられる。

その結果、誰もキョウを止めることができなかったら意味がない。

「……ああ、俺達の行く手が血に塗れた道であろうとも、その先に人々の幸福があるのなら行くしかねえな。坊主達に教えられるとは思わなかったぜ」

「勘違いするな。俺は俺の好きなように、俺に振りかかる全てを薙ぎ払ってきたに過ぎない」

そうしないと利用されるだけで終わっていた。

陰謀を巡らせて俺を抹殺しようとしてきた三勇教の連中、自らの世界のために俺を殺そうとしてきたラルク達、多大な犠牲の上に世界を守る結界を生成する役割を持った霊亀。

その全てと対峙し、自分の未来を守るために前に進んできた。

後悔がないわけじゃない。

だが、それでも前に進んでいかなければ、これまで犠牲にしてきた者達に失礼だ。

「俺は、俺達はオストの犠牲のもとにここにいる。いくら戦いづらい相手だからといって、ここで立ち止まるわけにはいかないんだよ」

「坊主らしい答えだな。嫌いじゃないぜ」

ラルクが大きく鎌を構え直す。

「……そうですね。ワタシも嫌いではないですよ」

エスノバルトが眷属器を中型の船に変えてから言う。

何をする気だ。

「ワタシ自身の強さはあまりないですが……それでも少しでも役に立つのなら援護します」

船に積まれた大量の大砲が辺りの敵に狙いを定めた。

「一斉射撃！」

そして激しい轟音と閃光により、一瞬、目が眩む。

エスノバルトの能力は低めだと聞いている。

そして敵はエスノバルトの攻撃などものともしていない。

確かに……この結果が能力の低さを物語っている。

魔物と暴走した改造人間達が、爆音と目くらましで蚊ほどとはいえ痛みをくれた相手に対して狙いを定める。船の高度を上げてエスノバルトは俺達に手を振る。

「ワタシが注意を引いておきますので、皆さんは早く行ってください」

「だけど——」

絆達が心配そうにエスノバルトに向けて届かない手を伸ばす。

朱雀のコピーは空を飛べるし、様々な足場を駆使して白虎のコピーは船にへばりつこうとしている。玄武のコピーは遠距離攻撃ができるのか岩を放って狙い撃ちをしているのだ。

こんな所に置いていったらまさしく兎が危険な野生動物に狩られるようなもんだぞ。

「大丈夫です。ワタシも眷属器の所持者なんですよ？　少しでも皆さんの役に立つために、がんばります」

「エスノバルト！」

「ペン！」

クリスが白虎のコピーや朱雀のコピーを足場にしてエスノバルト目掛けて跳躍する。

そして船の舳先に飛び乗った。

「クリスさん」

「ペン！」

そして絆達に手を振る。まるでここは任せろとばかりに。

「ナオフミさん、お願いします。キズナさん達を任せましたよ」

「……わかった」

「ふぇええ、置いていくんですか？」

「ああ。絆、早く行くぞ」

「でも！」

「ここでもたもたしてたら何が出てくるかわからん。最悪、キョウに逃げられてもいいのか？」

エスノバルトの決意を無駄にしてはならない。

なに、クリスがいるんだ。最悪の事態は回避できることを信じる。

「ほら、今のうちに行くぞ！　エスノバルトの決意を無駄にするな！」

俺の言葉に全員、後ろ髪を引かれる思いで屋敷の方へ駆け出した。

振り返ると、エスノバルトが森の方へ逃げながら俺達に手を振っていたのだった。

屋敷内は一応、生活臭がした。
少し前まで人が住んでいたかのような雰囲気がある。
「ごく一部の奴等しかここにいなかったんだったか？」
俺が尋ねるとヨモギは頷く。
「ああ。そして屋敷の奥へ行ける者は更に限られていた」
「魔術師とか錬金術師っぽい奴だったからな。独自の研究に没頭してたとかだろ」
「その認識で間違いはない。しかし異界の勇者はよくキョウのことを理解しているな」
「あくまで想像だ」
いるんだよ。ゲームとか漫画とかにクレイジーな研究者キャラってやつが。
だが、そのキャラと断定するにはキョウの人間性にはわからないことが多い。
どちらかというと……自分の考えた素晴らしいアイデアを実践してるだけのように見える。
「む……鍵が掛かっている」
「その鍵は？」
「これだ」
ヨモギが鍵を出して鍵穴に差しこむ。
……案の定開かない。
「お前って本当にキョウの仲間だったわけ？」
「い、いや！　これで開くはずなんだ！」
さっきから失敗しまくりだぞ。
あれだな。仲間だと思っていたのはヨモギだけだった、みたいな展開が想像できるな。
「落ちつけ。こういう時は何をしたらいいかわかってるだろ？　絆、ラルク」
「おうよ！」
ラルクも調子がいいな。俺の意図を完全に察している。

「謎解きだね！」
絆もわかったつもりで自信を持って答えたが、残念だが外れだ。
「絆、お前はゲームの世界にでも行ってろ。もう帰ってこなくていいぞ」
「酷い！」
ボキボキと指を鳴らしてからラルクが扉を鎌で切り裂いてぶち破る。
さすがにラルクはわかっていたか。
「案外丈夫な素材で作られてんな」
「撤収する時に回収して、溶かしたものを武器にするか」
「坊主、俺はそんなつもりで言ったわけじゃねぇよ」
「あああ……」
「嘆かわしい……」
絆が唖然とし、グラスが呆れている。
ラフタリアはそんな絆達の態度に首を傾げているな。
「鍵の掛かった扉は全部、後で回収できるよう綺麗に切って開けていきますか？」
「ラフタリアさん!?」
絆はラフタリアの反応を意外に感じているようだ。
ラフタリアは割と現実的なところがあるからな。
「何かおかしなことを言いましたか？」
「悠長に構えている暇はねえしな。ちゃっちゃとやるしかねえだろ」
ラルクも状況を理解したみたいだな。
そうだ、今の俺達は屋敷の探索なんて面倒なことをしている暇はないんだ。
「謎解きなんて鍵を開けさせるために解かせることが前提だろ。俺だったら予備の鍵とかそんなものを用意しない」
侵入できるような謎解きを設定してなおかつ鍵を掛ける奴がいたら、そいつの頭はおかしい。
それよりもサッサと扉を壊して犯人であるキョウを見つけて報いを受けさせないと。

そのためにエスノバルトとクリスが敵を惹きつけているんだ。
今のうちに炙り出せばいいんだよ。
「実際、全員で屋敷をぶち壊す手だってあったんだぞ……ヨモギもまだキョウを信じたいみたいだから、こうして侵入してんだ。これくらいは我慢しろって」
扉をぶち破ったことで唖然としていたヨモギが悔しそうに呻いてから答える。
「く……だが、キョウが無実だったら弁償しろよ」
「はいはい」
限りなく黒に近いグレーだからヨモギも強く出られない。
やるなら今のうちだな。
「こういうのは得意だぜ」
「だろうな。ラルクは壊すの得意そうだもんな」
「坊主、俺を壊すのが得意なだけの男だと思ったら大間違いだぜ？」
「何が得意なんだよ。まさか作戦とか言うつもりはないよな？」
「それも得意といえば得意だが……」
チッチッチとなんか微妙に気になる挑発をラルクはした。
「俺は冒険が大好きなんだぜ」
「……あっそ」
何だろう。実は料理ができるぜくらいのどうでもよさだな。
しかも得意ではなく、大好きと答えた。意味がわからん。
「遺跡探索は夢だよな、テリス」
「そうね！　でも宝探しよりも今は新たな宝を作ることも覚えましょう！」
「……おうよ」
あ、なんかラルクが俺を羨ましそうな目で見てくる。
「お前偉いんだからさ、選り取り見取りだろ？　なんでそいつなわけ？」
「色々あるんだよ！　言わせんな」

ラルクとテリスの関係はどうもわからん。
まあ大切にしてるって気持ちは伝わってくるがな。
こうして鍵の掛かっている扉は全てぶち破って俺達は屋敷内を進んだ。
途中、四聖獣コピー共と遭遇はしたが、どれも今の俺達の敵じゃない。
正直に言えば相手の力不足だな。
特に絆相手だと話にならない。遭遇と同時に撃破だ。
鮪包丁で骨すら容易く切り裂いて一刀両断にしていく。
「しかし……魔物共を放ちすぎだろ」
一部屋ごとにいるのはなんでなんだ？　アクションRPGじゃないんだぞ。
「ヨモギ、キョウの研究室はどこだ？」
「こっちだ」
ヨモギの指差す方へと向かう。
時々落とし穴とか吊り天井とかいろんな罠があるが、この面子じゃ引っかかっても抜けるのは造作もない。
まず俺が先頭に立って矢とかの罠を流星盾で弾き、落とし穴に気付いた瞬間、エアストシールドで足場を作る。
鉄球とかギロチンが落ちてきても、全て弾けるから問題ない。
トラップハウスかってくらいいろんな罠が張り巡らされているけど、如何せん相手が悪かったな。
「この先が地下になっている。キョウの研究室はその先だ。ただ、地下は地上よりも区画が多いし、私も知らない部屋が沢山ある」
「そうか」
ヨモギの顔色が悪い。
自分が親しんでいた相手が、四聖獣のコピーを使って暴れてるんだもんな。
しかも人体改造をしたであろう証拠も多々出てきている。
こんな状況じゃ疑わない方が難しいだろう。
まあ、使い捨ての駒扱いされてもなお、信じようとしている辺りは評価してやるけどさ。
信じる相手が悪かったのは元康と同じだしな。

「く……ここまで来たのか！」
で、地下研究所に入ったところでまだ自我のある改造人間共と遭遇した。
ヨモギの仲間か？
俺が視線を送るとヨモギは首を横に振る。
ツグミの仲間だろうか？　あんなのいたか？
ラフタリアやグラス、ラルクの方に目を向けると首を傾げられたぞ。
「待って！　オレ達は争いに来たんじゃないんだ。君達は利用されているに過ぎない。その利用してる奴を倒しに来ただけなんだ！」
「黙れ！　ここでお前達を止めないと、アルバート様が殺されてしまう！」
誰？　いや、ホント誰のことだよ。
名前すら聞いたことがない。本当に知らない。
「なあグラス、コイツ等は誰のことを言ってるんだ？　もしかして俺達に全く無関係な奴を人質にしてコイツ等にここを守らせているとかか？」
ぶっちゃけ俺達に因縁のある奴を選んで使う必要はないんだしな。
それこそ思い通りに使える奴隷とかを使役して警護させればいい。
「アルバートは確か……鏡の眷属器の所持者の名前だったと思いますね」
ああ、確かラフタリア達がクズ二号からの逃亡劇をしている最中にキョウにやられた眷属器の所持者だったな。
グラス達とは関係が悪い奴だとか聞いた気がする。
「まだアルは生きているのよ！　だから私達は一歩も引くわけにはいかない！」
なんて言いながら……改造人間共はヨモギが持っていたあの寄生機能持ちの武器を手に襲い掛かってきた。
「うわ！」
流星盾にガツンと衝撃が走った。
おお……耐え切った。地味に魔竜の盾とバルバロイアーマーが効果を発揮してんな。
「その武器は危険なんだ！　使っちゃいけない！」
「爆発機能を搭載しているか怪しいが……」

こんな所で自爆するのか？
もしも搭載しているようなら、ここが重要施設ではないことになる。
そもそも鏡の眷属器の所持者って殺されたとか聞いたが事実は違うのか？
……まだ確信できない。
「絆、コイツ等を追い詰めてみてくれ。爆発するか確かめたい」
「坊主、どういうことだ？」
「もしも自爆機能を搭載している場合、その規模にもよるが大規模に爆発しそうならここはキョウにとって重要じゃない」
「自分の領地で爆発したら危険だもんね」
「ああ、キョウが俺の思った通りの奴なら、間違いなく搭載していない」
手段を問わずに俺達を殺そうと考えているような馬鹿ではなく、知恵を巡らすようなタイプだと俺は読んでいる。
これまでの経験で大体理解した。
「武器の方はどうするの？」
「今のお前等なら砕けるんじゃないのか？」
流星盾を突破できない程度の武器だ。少しずつ能力が向上しているこの面子なら破壊できるだろう。
意識を集中してツヴァイト・オーラを順番に掛ける。
「わかった。やってみるよ！」
絆が魂癒水でブーストしたグラスと肩を並べ、武器を構えて突進する。
戦闘時間は僅かなものだった。
絆が改造人間達の改造された箇所を切り裂き、グラスが武器を破壊する。
扇……鉄扇という類の武器は俺の知る歴史上の武器の中でも武器破壊に使われることが多い。
ソードブレイカータイプの武器だ。
ヨモギは武術の心得があるのか、グラスの武器破壊を弾いていたけれど、ここに居る連中はその対処ができない程度の腕前だったようだな。
そして絆に関しては対人こそできなくても相手の武器ぐらいは破壊できる。

相手の武器が眷属器や聖武器でない限りはな。
それでもあの武器はものすごく硬くて絆すらも手こずるようだが。
「ガハ⁉」
「うぐ⁉」
改造人間の女共はそれぞれ大きく能力を減退させ、武器は容易く折られる。
折れた武器が気色悪く蠢いて触手のようなものを伸ばして所持者に絡みつこうとする。
そして折れた半身と接合しようとしているのを――
「させるかってんだ！」
「はい！」
「悪いがその武器は使ってほしくない。ナオフミ、絶対に取られないで！」
ラルクとラフタリア、ヨモギが追い撃ちを掛けて、俺の方へ投げる。
武器はまるで俺に近づくのを拒むかのように空中でもがきながら霧のように消え去る。
残されるのは霊亀の僅かなエネルギーだ。
元々何かしらの魔物的な要素の部分に霊亀のエネルギーを付与して作られているんだ。
魔物の部分は絆とラルクが仕留め、残された部分で再生を試みようとしたところで妨害、エネルギー自体が霊亀の心の盾を持つ俺に吸われたら、あとは塵も残らず消滅するとかそんなところなのだろう。
「おお、俺に投げるといい感じに消えるみたいだぞ」
「そ、そんな！」
「私達は何もできないというの？」
「諦めない！」
鏡の眷属器の取り巻きらしい女共が懲りずに襲い掛かってくる。
「させないよー」
「ええ、貴方達が悪いわけじゃないのはわかっています。ですが、諦めてください」
そこにフィーロ、テリスが各々魔法を唱えて弾き飛ばす。
「すみません。貴方達にも守る者があるのでしょうが、私達はそれを乗り越えていかねばならないのです。輪舞攻ノ型・花風」
トドメにグラスが素早くスキルを放って無力化させた。
「やっぱりな。どうやらまだキョウはここにいる」
「ええ、じゃなければ自爆させていたでしょう」
確信を得たな。今頃、悔しげに呻いてるんじゃないか？
「これだけの布陣に本気で攻められて対処できると思っている時点で凄い度胸だよな」
だって強化済み聖武器の勇者二人、眷属器の所持者三人だろ？
外ではエスノバルトが牽制してくれてる。
計六人の勇者が一堂に会して討伐にあたっているんだ。
何か勝算でもなければ、とうに逃げているか、やけくそになっているはずだ。
だが、実際にやっているのは罠を仕掛けて四聖獣コピーを配置して改造人間に試作品を持たせてるだけだろ？
それとも何か裏でもあるのか？

「ああ！　その先の部屋に行ってはダメ！」
鏡の眷属器の所持者の取り巻きが言う。
人が嫌がることをすることに意味があるんだ、とか言おうかと思ったが黙っておこう。
扉を開け、さらに何枚もの扉を抜けた俺達は……キョウの研究を目の当たりにした。
「こ、これはなんだ⁉」
「……ありえた結果だよな。グラス、お前もそう思うだろ？」
俺の言葉に一緒にいた連中の殆どが息を呑んだ。
そう、俺達の前に何があったかというと、廊下の壁に並んだ透明なタンクだ。
このタンクに何が浮かんでいるか、まあ俺の想像通りのものだ。
具体的には人間……とは違うか？
錬金術師とかの夢、ホムンクルスだな。
「ホムンクルスですか？」
リーシアが脅えながら尋ねる。ああ、こっちの世界にもある概念なのか。

タンクに浮かぶのはクズ二号とそっくりの男達。
他にも何種類かいるみたいだが、概ね似た人物だな。
「ん？　これは……」
真っ二つに切断されたクズ二号がタンクに浮かんでいる。
これはクズ二号本人じゃないか？
「あ……」
グラスが目を見開いて奥に鎮座しているやや大きめのタンクを指差す。
そこには胸に鏡を持った、長髪の美形の男が浮かんでいた。
髪色は黒っぽいな。和風で……年齢は二十代半ばか？
「あれは……鏡の眷属器の所持者です！」
「どうやら生け捕りにでもされたようだな」
と、俺が言うのが早かったか……その部屋にいたホムンクルス&本人が目を覚まして俺達を見つめる。
「意識まであるのか？　上手く話が通じればいいが……」
バキッとタンクが砕かれてホムンクルス共が出てくる。
ホムンクルスなんて実在するんだな。
まあ四聖獣コピーが出てくる時点で可能性はあったが。
言葉が通じるのか、洗脳されているのか、それとも――
「ガアアアアアアアアアアア！」
ピキキ、とホムンクルス共はそれぞれ変身する。四聖獣に。
うん、完全に改造人間の上位互換的な雰囲気を持ってるぞ。
で、クズ二号と鏡の眷属器の所持者……アルバートだったか？
そいつを見ると変身はしてない。だが、戦う気はあるみたいだな。
クズ二号本人はゾンビの如くふらふらで白濁した目でこっちを見てる。
気持ち悪いな。
「会話はできるか？」

「ヴァ　ヴー……」
どうも通じそうにないな。
ゾンビみたいな声しか出せないみたいだ。
だが、戦闘の意志だけはあるようで鏡を光らせて俺達に向けて構える。
「これは――」
「なんだ!?」
絆やラフタリア達は各々所持する武器を見つめる。
「どうした？」
「ナオフミ様、眷属器から助けを求める声が聞こえます。あの者は……既に魂の半分以上がなく、強制的に眷属器と繋げられています」
正直に言えば、魂が欠けているというおぞましい事実よりも、眷属器と無理やり繋げられていることの意味が気になる。
「つまり所持者の死亡と同時に離れるはずの眷属器を持って戦えるってことだね」
絆が補足する。俺は言わなくてもわかるが他の連中に確認を取ったんだろう。
「キョウの僕としてはこれ以上ないほどの優秀な駒だというわけだな」
厄介だな。これでキョウの陣営にはもう一人、眷属器持ちがいるってことか。
まあ、強化方法の共有とかしなきゃ脅威には――
「月……詠！」
鏡から大きな……満月のような光弾が飛んできて俺の流星盾を呆気なく破壊した。
くそ、どうやら強化方法の共有、もしくは霊亀のエネルギー、あるいはそれに準ずる何かを織り込まれていると見てよさそうだ。
「おやおや、ここまで来るとは、ちょっとやりすぎなんじゃねえか？」
そこに……いやーな感じに声が響く。
見るとアルバートの後方にある床が割れて、そこからキョウが光の床を足場にして姿を現した。
しかも周りには霊亀の使い魔（親衛型）を引き連れている。

コイツは本当に多勢で待ち受けるのが好きだな。

十話　信頼が失われる時

「まったく、人の研究所にまで来るとか……蛇みてぇにしつこい奴らだぜ」
「それはこっちの台詞だな」
「ハッ！　馬鹿なくせにしつこくて粘着質、ウンザリする」
「それも俺が言いたい言葉だな」
いい加減ウンザリしてるのはこっちだ。そろそろお前との因縁も終わらせてもらおう！
「お前は自分がどれだけのことを仕出かしたのか自覚がないようだな。その報いを受ける時が来たんだよ！」
「は！　どうせお前の後ろにいる連中が滅ぼす世界だったんじゃねえか。無駄のないようにしてやっただけありがたいと思えよ」
「違うね。尚文がいた世界を滅ぼすなんてオレが帰ってきたからにはさせない。君が取ったものは今すぐ返すんだ」
絆が一歩踏み出してキョウに言い放つ。
「おやおや、長らく行方知れずだった、四聖勇者様の登場じゃないか」
「うん、グラス達……いや、この世界の四聖や眷属器の所持者が共通して認識している波では、オレに死なれちゃ困るはずだよね？　君が世界のために戦っていると言い張るなら、オレを傷つけることは間違っていると思うけど？」
グラス達の理屈では四聖の勇者を失ってはならない。
もちろん、死なない程度に痛めつけるとかなら別だがな。
「四聖は他に三人もいるんだ。一人減ったくらいどうってことない。俺だって世界のために知恵を絞ってんだよ。波なんて注意すれば怖くねーよ。アップデートだアップデート」
一人でも失ったら大変だって言われているのに、コイツは何を言っているんだ!?

絆の世界の四聖勇者と同じことを言ってんぞ。もしかして意味をちゃんと理解してないのか？
「キョウ！」
そこでヨモギが大きな声で前に出る。
「他世界の守護獣を操って大災害を起こしたというのは本当なのか!?」
「あ!?」
不快そうにキョウはヨモギを睨みつける。
「挙句、守護獣のエネルギーを奪って逃げ、他の眷属器の所持者をこんなにした後、その仲間達を改造したのか!?」
「うっせーな！　ギャーギャー騒ぐんじゃねえよ！」
「キョウ!?」
「俺に指図すんじゃねえよ！　前々から思ってたんだが、お前ウゼーんだよ。お前は俺の親かっての！　昔からの付き合いだからって正妻面しやがって！」
堰を切ったかのようにキョウはヨモギに向かって言い募る。
言われたヨモギの方は絶句して顔を青くしてんぞ。
「いい加減ウゼーから、上手いこと刺客として爆弾付きの武器を持たせてやったのに、事もあろうにここにコイツ等を誘導しやがって。最低のビッチだな！」
「そ、んな……じゃあ鏡の眷属器の仲間や彼の国の術師の仲間を改造したのは善意ではなく……」
「別の男のものだった中古女を大事にしてどうするんだよ。ま、一部良い感じに俺のことを好いてる奴がいたからそいつらは見逃してやったけどよ」
中古女……とんでもない言葉が出てきたぞ。
誰かのものになった女はいらないって処女厨か！
「その顔を見られただけで少しは気が晴れたけどな。あいつ等にはヨモギ、お前が殺されて、俺が仇を討ったことにしておいてやるから安心しろよ！」
ふるふるとヨモギは震える。
信じていた奴の本心を聞いて、絶望でもしたか？
「……どうやら私の目は曇っていたようだ。こんな奴に熱を上げていたとは」



「あ!? 気に食わない返答をしたから殺すってか？ 完全に病んでるなお前！ 俺はお前の思う通りになんかなんねー ってのー！」

聞いてるだけで不愉快になる奴だ。

自分を本気で心配してくれて、自分が間違った時に注意してくれる相手をビッチだと？

ヨモギがビッチなら、貴様はどうしようもない外道だな。

俺の宿敵であるビッチの男版みたいな下衆野郎だ。

こんな奴にオストの使命は踏み躙られたんだ。激しい憤りしか感じない。

カチャッとヨモギは刀をキョウに向ける。

「お前如きが俺に勝てると思ってんのか？ 天才であるこの俺に」

「勝てるかどうかではない。キズナ達の言葉を頑なに信じなかったことへの罪滅ぼしだ。キョウ……せめて私の手で、お前を討つ！」

ヨモギは絆達に目を向けてから再度言う。

「キズナとその仲間達……異界の四聖勇者一行。どうかキョウを止めるのを手伝ってくれ！」

「言うまでもないよ。オレ達はそのためにここにいるんだから」

「そうだな。いい加減、問答をするのもウンザリしてきた。自分のしてきたことを後悔しながらの死こそコイツには相応しい」

正直、話せば話すだけ不快になる奴は世の中にいる。

中途半端に会話が成立する分、性質が悪い。

こう……なんでコイツはこんなにも三勇者共と重なるのか。対立する奴に似たようなのが多い理由に関しては謎が多い。

だが、コイツとそれを話しても意味がない。ならば俺のすることは一つしかない。

報いを受けさせるというただ一点のみだ！

「あ!? まあいい……どうせお前等はここで終わるんだからよ！」

キョウが手をかざすと、アルバートとクズ二号、そしてホムンクルス共が一斉に襲い掛かってきた。同時に、キョウの放つ本の眷属器のページが部屋を舞う。
「まずは一番後ろにいるアイツを狙え！」
キョウは後方で拳を握りしめて自分を睨んでいるリーシアを指差した。
「どこまでも……知れば知るほど、私は貴方を許せないと思います！」
おお？　リーシアの奴、エンジンが掛かっているのか、既に怒りが頂点のようだぞ。
さすがはヒーロー体質。今度から主人公と呼ばせてもらおう。
後は上手く操作してこの状態が維持できればいいのにな。
今のリーシアは眷属器の所持者ではないが、多少なら役に立つ程度の能力を持っていると見ていいな。
「流星盾！」
「おめーはそれしかないのか？」
俺が流星盾を展開するとキョウは挑発的な表情を浮かべて言う。
「便利なスキルだからな」
「そんなやわな結界でどうするってんだ？」
「こうするんだよ」
クズ二号とホムンクルス、そしてアルバートの攻撃で流星盾は砕け、破片が宙を舞う。
「ラフタリア！」
「はい！」
ラフタリアが刀を抜く。
「おっと、いくら速くてもここまで来られるかな？」
「行く必要ないだろ？」
俺の意図を察したラフタリアが、ハイクイックが掛かった状態で魔法の詠唱に入っていた。
そう……素早く動けるのなら何も相手に斬りかかるだけが能ではない。
「ドライファ・ライト！」
飛び散る破片に向けてラフタリアは光の魔法を放つ。

「ラフー！」
お？　ラフちゃんがタイミングよく魔法を唱えた。
飛び散った破片にラフタリアの魔法が乱反射し、凝視していたクズ二号とアルバート、ホムンクルス共の目が眩む。
「ふん。この程度、造作もない」
「どうだかな？」
守りに入ったところで流星盾の破片が辺りに飛び散る。
その僅かな隙を仲間達は見逃さない。
戦闘とは始まりが大事だと誰が言ったか。
俺とラフタリアが作り出した隙に一番早く対応したのは絆とグラスだった。
「擬餌倍針！」
絆が、与えるダメージが二倍化するスキルをアルバートに当て、まるで打ち合わせたかのようにグラスが魂癒水を含みながらスキルを放つ構えを取る。
そう、グラスの放つスキルの中でも上位に位置する高火力攻撃。
「輪舞無ノ型・月割り！」
二つに分かれた扇をそれぞれの手で握りしめ、満月のような軌道を描いて力強く振り下ろす。
「月……詠！」
負けじとアルバートも月のようなスキルを放って応じるが、グラス達の方がはるかに早かった。
相手の放った月のような光弾を切り裂き、貫いていく。
が――僅かに足りず、アルバートの肩を切り裂くに止まった。
「おっと……コイツにはまだ働いてもらわねえといけねえからな」
キョウの持つ本のページが、出血するアルバートの肩を押さえつけて強引に接合する。そして緑色の光を放ってくっつけた。
おそらく、回復系のスキルか魔法だろう。
「坊主や嬢ちゃん達に負けてられるか！　テリス！　いくぜ！」

「ええ！」
その隙にラルクが鎌をエネルギー状に変え、更にテリスの魔法援護を作動させてぶっ放す。
「鉀石！　爆雷雨」
テリスお得意の雷の雨を降らせる魔法だ。
ん？　リーシアも持っている小太刀を掲げて魔法を付与してるぞ？
「合成技！　雷電大車輪！」
「はあああああ！」
ラルクの声に被せて、リーシアが居合いのように小太刀を脇に収めてから水平に放った。
エネルギー化して更に強化された鎌から放たれる巨大な雷電大車輪の後を追うように……いや、雷電大車輪が取りこぼした雷を吸い込んで膨れ上がりながらキョウの方角にいるホムンクルス共を薙ぎ払っていく。
うわ、手足が吹き飛んでんぞ。どんだけ威力のある攻撃なんだ。
「フィーロも行くー」
「待て、お前は魔法援護だ。ついでにハミングフェーリーの歌で俺達に援護しろ。なにか……魔法の詠唱とかを速くさせる歌とかないか？」
「えー……わかったー歌うね」
フィーロはハミングファルコン形態になって俺の肩に乗り、歌を歌い出す。
さすがに馬鹿にするかと思ったが、キョウの奴、フィーロが何をしているのか察して忌々しそうに俺とフィーロを睨んでいる。
俺は援護魔法であるツヴァイト・オーラを唱え続けているところだ。
心なしか魔法を唱える時の行程が軽く感じる。
ゲームとかだとどういう原理に当たるのかわからないが、なんだか喉の調子が良いような感じで流れるように魔法を発動させられる。
「ガアアアアアアアア！」
近づいてきた改造ホムンクルスをラフタリアが斬り裂き、絆とグラスに隙が生じたらヨモギが応戦して隙を埋める。

連係とはこうして成立するもんだ。
「ち、群れなきゃ何もできないくせに」
「群れることもできないぼっちが人形遊びで俺達に喧嘩を売っているようにしか聞こえんな」
「減らず口が」
「どっちが。悔しかったら仲間の女共でも連れてこい」
まるで子供の喧嘩だな。
だが、戦いなんて得てしてこんなもんだろう。
命のやり取りをしているんだから、子供の喧嘩の度は越えているがな。
「自分の本性を知られてヨモギみたいに離反されるのが恐いから連れてこなかったんだろ？」
「うるせえよ！」
とはいえ、キョウの女共がこの場にいても困るだろうな。
なにせヨモギの仲間だし、絆達はできる限り犠牲者を出さない方針だ。
そんな気遣いをしながら戦っていたら、その間に逃げたり連係攻撃をしてきたりして、俺達に対処できる限界を超えるかもしれない。
まあ、女共が俺達に説得されて逆に追い込まれるかもしれないから連れてこなかったのかもしれないが。
考えられるのはヨモギの強さからみて、戦力外とみなしてのことか？
あの武器を使えば多少は役に立つかもしれないとは思うのだがな。
それとも意外に、女共を怪我させるわけにはいかないと思ったりする元康みたいなフェミニストなのかもしれないな。
なにせ他の男のものだった女は中古らしいし。自分の女は大事にしてるということか。
「さて、ここで霊亀の核があった間で戦った時と同じ攻撃をしようじゃないか。まあ、道中で色々と習得したからバリエーションもある。上手く、耐えきってみろよ」
「受けるわけねーだろ！　バーカ！　お前等は俺に追い詰められたことをわすれてんじゃねーよ！」
キョウは本を掲げてから魔法を詠唱し始める。
すると辺りに魔法陣が浮かび上がった。

ずしりと、押しつぶさんばかりの重圧が俺達に圧し掛かってくる。
これは霊亀の中で戦った時と同じ、妨害攻撃だ。
「お前等にはこれを超える術は数えるくらいしかねーだろ？」
確かに……正直言って、この世界に来てから若干弱体化している俺にとっては耐えるのもやっとの攻撃だ。
魔竜の盾……では正直耐えきれない。
「またこの攻撃ですか……あの時は世界を渡った所為で上手く戦えませんでしたが、ここは私達の実力を発揮することのできる領域、世界ですよ？」
「少しは重たいけど、動けなくはないね。オレ達を舐めすぎなんじゃないかな？」
グラスと絆が近づいて攻撃する。
もちろん、絆の攻撃は援護だけどな。
擬餌倍針を邪魔するホムンクルスに投げつけてグラスがスキルで一刀両断にした。
おお、確かにあの時とは状況がずいぶん違う。
グラス達は世界を渡った所為で弱体化していたに過ぎない。
そんな状況で有利に立てたからといって、今有利になるとはいえないのは確かだな。
「——それも想定内だぜ」
ウソつけ！　驚いた表情を俺が見逃すと思ったか！
辺りの魔法陣が更に輝く。
ん？　かなりの高出力なのがわかる。
こう……辺りに霊亀のエネルギーが充満してきたのが伝わってきた。
「ぐ……」
流星盾を唱えると即座に破壊されて破片が飛んでいくが、届かずに地面に落ちる。
どれだけの重力場だよ。下手すりゃ圧死するぞ。
さすがのグラスや絆も膝をついている。
「いやー、さすがはこの世界の聖武器と眷属器、すっかり忘れてたぜ。お前等、弱くて大して違いなんてないからよー」

その場にいる殆どの味方が重力に押し潰されまいと両手を地につけて、立ち上がろうとするので精一杯だ。
「ぐえー……」
フィーロでさえも俺の肩から落ちて、立ち上がろうとするのでやっとなほどの重力。
ホムンクルスとかは普通に動いてやがる。掛ける対象を指定することもできるとか厄介極まりない。
「く……重い……」
キョウは絆とグラスの方に意識を集中している。
「思いのほか、アッサリと終わっちまいそうだな。こんな序の口の攻撃で終わるとかどんだけ弱っちいんだろうなー」
何を唱えるのかわからないが、魔法を使うなら今だろう。
が、詠唱しながらでも俺はスキルくらいは使える。
「エアスト、シールド！　セカンドシールド！　ドリ、ツト、シールド！」
クズ二号、アルバート、ホムンクルス共の猛攻から少しでもダメージを受けないために盾を出現させる。
もちろん、この攻撃性のある重力を受けて今にも破壊されそうだが、流星盾よりも防御力がある分、まだ壊れずにいる。
「無駄なあがきをしやがって……」
「どうかな？　チェンジシールド！」
既に盾が攻撃されているような状況。やるべきことは一つだろ？
俺が変化させる盾は、今装備している魔竜の盾。
専用効果にC魔弾というものがある。
Cはカウンターの略で、攻撃を受けた時に相手に向けて魔法の弾を発射する。
変化した盾は攻撃の意思を受け取って……辺りに向かって魔弾を発射した。
「!?」
もちろん、魔法の弾に重力なんて効かない。
攻撃意志を持った敵に向かって四方八方……魔弾は部屋中の魔法陣に向かって飛んでいった。
魔法陣が削れて重力の拘束が弱まり、俺達はその隙に立ちあがって再度構えた。

「へぇ……こんな難点があるのか、勉強になるじゃねぇか。十分注意しとかねえとな」
「あんまり甘く見るなよ。チェインシールド！」
三つの盾が鎖で繋がり、ぐるぐると部屋中を旋回する。
それに巻き込まれてホムンクルス共とクズ二号が縛られる。
「今だ！　タイミングを合わせて放て！」
「はい！」
ラフタリアがチャージが完了していた刀を鞘から引き抜いてハイクイック状態でスキルを放つ。
「擬餌倍針！」
絆がその好機を逃さずに命中した攻撃を一度だけ二倍化させる擬餌倍針を打ち込む。
「坊主が作った好機、やるぞテリス！」
「はい！」
ラルクの鎌に再度雷が落ちる。
「合成技！　雷電大車輪！」
追撃とばかりにラルクがテリスと協力して合成スキルを放った。
飛んでいく車輪をラフタリアが素早く追いかけていき、命中する直前にスキル名を叫ぶ。
「瞬刀・霞一文字！」
クズ二号を一刀両断した、ラフタリアの一番威力の高いスキルだ。
ラルクの雷電大車輪すらも刀に宿した必殺の……合体スキルだな。
「ガアアアアアアア――」
ホムンクルス共とクズ二号が一気に切断され、雷によって感電する。
ただ切り裂いただけでは再生する可能性があったが、さすがにこれでは終わりだろう。
「まだです！　紅玉炎！」
トドメとばかりに、テリスは俺があげたアクセサリーから魔法を放って死骸を滅却する。
「ナオフミ、みんなを守ってください！」
「ああ！　流星盾！」

俺が流星盾を展開すると同時に、グラスが扇を持って舞い始める。
絆とは手を繋いでいるぞ。一緒に踊ってるみたいだな。
「輪舞零ノ型・逆式雪月花！」
風と共に桜の花びらが舞い、テリスが放った火の魔法で燃え……損ねたホムンクルス共の死骸を更に切り刻む。
雪月花は範囲みたいだからな。手をつなぐと味方を巻きこまずに済むとかだろうか？
これだけの攻撃を受けたら跡形もない。
「――は、思ったよりはやるじゃねえか」
絶句していたくせによく言う。
残されたのはキョウを守る霊亀の使い魔（親衛型）とアルバートという鏡の眷属器の所持者か。
アルバートの方はグラスが牽制しているお陰でどうにか対処はできそうだな。
絆は元々対人攻撃ができないから援護に徹してもらっているし、残った面子でやるしかねえか。
「お前の実験体のホムンクルス部隊はどうやら壊滅したようだが？　どうするんだ？」
「あ!?　実験体？　これは俺が作ったもんじゃねえよ。まあ、改造したのは確かだがな。作ったのはお前等が今斬った奴だよ」
ああ、やっぱ隙を見て掠め取ったものか。
「ついでにコイツも研究してたみてーだが。俺が作ったのはもっとスゲーやつだよ」
「あっそ」
別に見る気は微塵もないがな。
しかし……二人揃ってホムンクルスの研究か。
何なんだろうな。揃いも揃って。
「ま、俺の重力場を破壊して勝った気でいるみたいだが、菓子より甘いぜ！」
「キョウ！　いい加減観念しろ！」
ヨモギが刀をキョウに向けて宣告する。
「うるせえ！　お前は黙って死んでればいいんだよ！　研究ももう少しで完成する。そのためにはお前等は邪魔だ」

キョウが本を掲げて前に出る。

霊亀のエネルギーをものにしているキョウ相手に俺達は勝つことができるか……。

あの時よりも俺達は弱いが、それに反比例するようにグラス達が強力になっている。いけるはずだ。

「一気に決めてやるよ。俺のスキルを受けるがいい！」

バラバラとキョウの持つページが飛び出し、辺りに飛び散りながらエネルギー化していく。

「お前等、仲間の協力がなきゃ合成技すら出せねえのか？　だっせーな」

どうも何を話しても自慢しかできないみたいだな、コイツは。

いい加減にしてほしい。

クズ二号も自分の技術を自慢していたが、もううんざりだ。

「さーて、じゃあ行くぜ！」

キョウが……絆を指差す。

「火式・魔力爆発！」

そう告げた瞬間、絆がハッと防御の構えを取った。

それが正解だと理解するのは直後のことだった。

絆を中心にして炎が……絆の中からあふれ出たのだ。

「ぐあああああ……く……ま、魔力が⁉」

膝をついた絆が両手を見ながら言った。

そのまま、倒れそうになるのをグラスが支えて起こす。

「それに魂力も削り取られた⁉」

「ははは！　手始めに聖武器の勇者様に撃ってやったが良い効き目だな」

俺が絆に回復魔法を唱えようとした瞬間、キョウは俺を指差す。

「おっと、回復させようとしても無駄だぜ！　腐式・魔力爆発」

「ぐふ……く……」

俺を中心に魔力の濁った風が巻き起こり、魔力が根こそぎ奪われた。

が……？　それ以上何も起こらない。

「ち、攻撃魔法の適性が全くないタイプか。どこまでも面倒な奴だな、おい」

「ほう……」

俺は盾から魔力水を出して口に含んでから絆にツヴァイト・ヒールを唱えて、傷を癒す。

絆の方も俺が事前に渡していた魔力水を服用して魔力の回復を図ったな。

「なるほど、相手の魔力に干渉して魔法を強引に唱えさせ、暴走させてダメージを与える攻撃か」

厄介だな。これって魔力が高い奴ほど、ダメージが入るんだろう。

難点は攻撃魔法の資質がない奴には効果がないことだ。

俺は元々魔法は回復と援護しかできない。

だから俺自体には全くダメージを与えられないんだ。

「と、思うだろ？　他にもあるんだぜ？　さあ、馬鹿みたいに魂癒水を飲んだスピリットがどうなるか見物だ！」

「グラス！」

絆がグラスを庇うように前に立つ。

「キズナ！　きゃあああああ！」

絆の全身がズタズタに切り裂かれ、大きく仰け反る。

庇いきれなかったのか、グラスにもダメージが入ってしまったようだ。

範囲効果まであるのかよ。

幸いにしてグラスは致命傷を負ったわけじゃないようだけど……厄介な攻撃をしてきやがる。

クールタイムも少なく、連発可能で俺達に大ダメージを与えられる。

ある意味、防御比例攻撃の亜種攻撃だ。

「むざむざやられてたまるかってんだ！　行くぞ坊主！」

「待てラルク！　魔力とＳＰときて、コイツが他に――」

キョウは高笑いをしながら飛び出したラルクを指差す。

「力式爆発！」

ラルクを中心に魔法で作られた光の刃が絶え間なく旋回する。

その刃に切り裂かれてラルクの全身から血が噴き出した。
「ぐあああああああああああ！」
「ラ、ラルク！」
「まだだ！　この程度、耐えられねえ俺じゃねえよ！　うらぁ！」
ラルクの鎌が、キョウに届く！
だが、キョウに届いたはずの鎌の先が、蚊ほどにも刺さっていない。
「よくがんばりまちたねー。きかねえよ！」
ページがラルクを吹き飛ばして、テリスがどうにかラルクを受け止める。
「いやー、霊亀の力ってのは新たな技を出すのにも使えて便利だよな。お前等はお前等自身の強さが仇になるんだよ」
「く……」
ただ狙うだけで効果が作動するスキルときたもんだ。
消費がどれだけかはわからないが、連射された方はたまったもんじゃない。
キョウを仕留めるのに必要な能力がそのまま俺達に跳ね返ってくる。
幸いにして、どれだけ能力があろうとも致命傷を受けることは……なさそうだ。
攻撃力とは別の威力計算で行われているんだろうと推測はできる。
この攻撃で即死するのは防御力を蔑ろにして攻撃特化している奴とかだろうな。
俺達の中にそんな極端な奴はいない。
せいぜい俺くらいなものだな。
ただし、この攻撃を受けた直後からしばらくの間、使われた攻撃に該当する部分が無力化される。
ダメージ＋無力化なんて厄介だな。
俺の場合はこの攻撃中に防御をしていれば紙も同然の防御力になることになるぞ。
「さーて、実験はこれくらいにして」
バラバラとキョウの持つ本のページが丸まって俺達を指名する。
まさか複数、同時に放てるってことじゃ……。

「喰らえ！」
ドスンと腹部に衝撃が走る。
まるで内臓をかき回されたような痛みだった。
思わず呻いてしまいそうだ。
倒れそうになるのをどうにか堪え、自身のステータスを確認する。
そう……ただでさえ大ダメージを受けているのに、防御力まで紙になっている。
流星盾を展開させた影響でダメージをある程度吸収させることができたのが幸いした。
緩和させてなかったら死んでいたかもしれない。
……いや、俺の防御力を考えるとそれでも死ぬ。
ということは計算上この攻撃のダメージには入らない、俺の能力以外の要素で耐えることができた……のか？
例えば援護魔法による能力付与、装備品の効果等だ。
俺達が使える攻撃じゃないから条件の特定が難しいな。
本来は弱体化が狙いのスキルで、攻撃は副産物的なものなのかもしれない。
「いたいいたい！」
フィーロもラフタリアもそのダメージが大きく、フィーロに至っては地面を転げまわっている。
幸い、ラフちゃんは俺が守ったからどうにかなっているが。
この場にまともに立っている者は……一人いた。
そう、ステータス的な要素の面で恵まれず、今のキョウの攻撃で蚊ほどのダメージしか受けない存在。
高ければ高いほど強力になる比例攻撃であるが、致命傷にまで至らない短所を持つこの攻撃の最大の弱点。
それは低い能力でありながら、何かしらの要素でステータスに該当しない能力上昇をする存在。
「リー……シア……」
おそらく、リーシアはこの攻撃を受けても何のダメージも受けていないんだ。
ここから推測するに、本人の能力だけを基準にして威力が増減する攻撃だと分析できる。
援護や特殊な力による増減は対象外なんだ。
万能に見える攻撃だが、隙がないわけじゃない。

武器は……まだ未知数だな。ラルクやグラスの放つ防御比例や無視攻撃とは毛色が異なる。グラスの場合は増えたエネルギーでステータスが上昇する。だからグラスが受けたら致命傷になりかねない。絆が前に出て庇ったのが幸いしたな。

そのリーシアは俺やラフタリア、フィーロの身を心配しながら俺達を守るように前に出てキョウを睨みつける。

「てめぇ……どうして立っていられるんだ」

「貴方の攻撃を受けてもなんともないからです」

「つーことはてめぇは雑魚ってことじゃねえか。笑っちまうぜ」

ケラケラ笑うキョウとトドメとばかりに鏡を光らせているアルバート。

この状況をどうにかできるのはリーシアだけだと……いうのか？

「相手の動きを封じて、ジワリジワリと嘲るのがそんなに気持ちがいいですか？」

まるで重力を感じていないかのように、リーシアがキョウに小太刀を向けて告げた。

リーシアは平然と立ってキョウを睨みつける。

「相手を最大限弱らせてからトドメを刺すのは戦いの鉄則だろ？　知らねえのか？」

「それは戦いとは言いません。弱者を蹂躙すると言うのです」

「は、気持ち悪い奴だぜ。いい加減死ねよ！」

キョウの持つ本のページが火の鳥を形作る。

「簡単に相手の命を刈り取れると思わないことです」

飛んでくる火の鳥をリーシアは忍者顔負けの動きをしながら小太刀で切り裂く。

ただそれだけなのに、火の鳥は呆気なく霧散した。

「ったく何なんだてめぇは！　邪魔ばかりしやがって！」

そう……まさにこのためにリーシアが存在するかのような状況だ。

いてもせいぜい補佐をするだけにとどまっているはずのリーシアが、ここで一番戦えている。

「うっぜー！　どこまでもウゼー！　ヨモギなんて目じゃないくらい、正義面しやがって！」

キョウは駄々っ子みたいに叫ぶ。

知るか！　いい加減にしろ！

俺も立ち上がって、回復魔法を詠唱する。

「私はまだ未熟者です。みんなの足を引っ張ってばかり……だけど――」

リーシアは小太刀に手を添えて……あの構えは、エクレールが技を放つ時の動作と全く同じだ。

修得した……のではないな。見よう見まねで自分ができる一番の攻撃をしようとしている。

「運命というものがあるのでしたら、私は貴方の道を阻むためにここにいるのです！」

リーシアは駆け出してキョウに向かって鋭い突きを放つ。

俺はとあるスキルをほぼ脊髄反射的に放ってリーシアを援護する。

それは絆も同じで、俺と絆はほぼ同時にそのスキルを使った。

「アタックサポート！」

「擬餌倍針！」

二つのスキルがキョウ目掛けて飛んでいった。

リーシアの突きが命中するよりも先に届くだろう。俺のスキルが、二倍化させる擬餌倍針よりも先に命中してほしい。じゃなきゃリーシアの攻撃の邪魔にしかならない。

「く……」

キョウが咄嗟に鏡の眷属器の所持者であるアルバートを自分とリーシアの間に割り込ませる。

ガツンと俺のアタックサポートが命中し、続いて擬餌倍針。

そして、止めることが敵わなかったリーシアの突きがアルバートの鏡に命中する。

衝撃が響く。

眷属器は聖武器と同じく破壊不可能だ。

最悪、盾として使えば相手の攻撃を抑えてくれる効果はあるだろう。

だが、あまりにも攻撃の威力が高いと武器は壊れないが貫通して肉体にダメージが入る。

魂癒水を服用したグラスの必殺スキル、月割りを俺が耐えた時のように――

「ガ、が・我・ガがががが――」

リーシアの小太刀が鏡を弾いてアルバートの胴体を吹き飛ばしていた。

「あ……」

完全に血の気が引いたリーシアがどうにか理性を保って数歩下がる。
血しぶきが上がって、リーシアとキョウの両方に血が飛ぶ。
アルバートは完全に白目を剥いて仰向けに倒れた。
フッとアルバートの死骸から丸い光が浮かび上がり、ふらふらと部屋中を旋回する。そして何かが剥離したように見えた後、壁を貫通して飛んでいった。
アレは……鏡の眷属器……だろうか？
所持者の死亡を確認して飛んでいった……と思いたい。
「馬鹿な！　こんな奴の攻撃を受けて眷属器持ちが死ぬだと!?」
キョウがうろたえながらリーシアを睨みつけ、俺と絆を凝視する。
おそらく、俺が咄嗟に放ったアタックサポートは……。
「どうやら尚文も擬餌倍針と同じスキルが出せたみたいだね」
「そのようだな。しかも重ね掛け可能とは、なかなか優秀なもんだな」
そう、俺の放ったアタックサポートは絆お得意の擬餌倍針による一回限りの威力二倍と同じ効果を持つようだ。
そして重ね掛けが可能となれば、なお優秀だろう。
なにせ二倍が二倍で四倍だ。
覚醒ブースト状態のリーシアが突いただけで風穴を開けられるんだから。
「リーシア、霊亀の使い魔（親衛型）の取り巻きがいるが、狙いをキョウに絞れ」
クールタイムが解けるのを待って、俺と絆がそれぞれ倍化スキルの構えを取る。
キョウは信じられないとばかりに絶句していたが悔しげに唇を噛んで血走った目で俺達を睨んできた。
完全に激怒した目だな。
いやぁ、お前のその目、見たくてしょうがなかったぜ！　とでも言えばいいのか？
「ふざけんな！　まだだ。まだ、まだ俺には手がある！」
パッと部屋中にページを飛ばし、魔法陣を再稼働させて、俺達は超重力に晒される。
だが、キョウも肩で息をしてる。やはり無理をしてるようだ。
今は踏ん張らないと始まらないな。

その時俺は、辺りから霊亀のエネルギーが湧き出しているのを感じた。
漏れ出たエネルギーが盾に集まり……視界に盾のアイコンが浮かび上がる。
「残念だが、それも上手くいかないようだぞ」
俺はキョウにそう告げると、盾に手をかざして、変化させる盾を思い浮かべる。
必要条件を満たせていなかったのだろうが、こんな的確なタイミングでできるようになると狙っていたようにしか見えないだろうな。
キョウの視線が俺の盾に注がれる。
そう、なにせ俺達と戦った時に追い詰められる原因となった盾が目の前にあるんだからな！
霊亀の心の盾。
お前が操り、踏み躙って力を奪った霊亀……オストが俺に託した盾だ。
改めて確認しようじゃないか。実力の違いというやつをな！

霊亀の心の盾（覚醒）　80／80　AT
能力解放済み……装備ボーナス、龍脈法の加護
専用効果　グラビティフィールド　Cソウルリカバリー　Cマジックスナッチ
Cグラビティショット　生命力向上　魔法防御（大）
雷耐性　SPドレイン無効　魔法補助　スペルサポート
特殊専用効果　エネルギーブラスト　20％
熟練度　100

スッと、先ほどの気だるさが抜けていく。
「どうやらキョウの特定ステータス無力化スキルは武器変化で解除できるようだな」
「なるほど、それは良い話を聞いたね」
これは新たな発見だな。絆が頷いて武器を一時的に変化させる。
回復魔法でダメージさえどうにかすれば、最悪の事態は回避できる。

が、それよりもだ。
エネルギーブラストは……放てそうにない。20％とはずいぶん少ないな。
どんな条件で溜まるのかわからないが、20％では仮に放てたとしても程度が知れている。
が、そんなことよりもだ。
専用効果にあるグラビティフィールドというのが気になる。
意識すると俺の視界に重力という項目が現れた。
現在の重力はかなり重いラインだ。
軽くするように視覚で弄る。すると先ほどまで碌に動けなかった連中が起き上がった。
「体が軽く!?」
「なんだ？　坊主、何をした!?」
「ああ、どうやら重力操作をこの盾ができるみたいでな」
「ほー……便利なことができるんだな」
まったくだ。これでキョウの使ってくる霊亀由来の攻撃は尽く無力化できるぞ。
「というわけだ。がんばって重力場を生成し続けるんだな」
「なめんじゃねえぞ！」
俺が言うと同時にキョウが怒鳴り散らした。
「雑魚のくせに何度も俺の前に立ちはだかるんじゃねえよ！」
「思い通りに行かなくなってキレたガキみたいに騒ぐな」
人を掌で踊らせて思い通りにならなかったらキレる。
完全にガキの行動そのものだな。コイツはいくつなんだよ。
キョウは再度俺達に向かって能力比例スキルを放とうとするが、発動する瞬間に動けばどうってことない。
エアストシールドを目の前に展開したら無効化……できそうだな。
キョウの大事な手駒もずいぶんと減ったようだし、この陣営で負ける要素は限りなく減った。
まったく……王者の風格ってわけじゃないが、少し余裕を見せて挑発してやろう。
「さて……じゃあこっちがどんな手口で報いを受けさせるか改めて教えてやろう」

俺はアタックサポートで出現する棘を持ってキョウに向ける。
「俺と絆が倍加スキルをお前に向かって放つ。二つ命中したのを確認した後は簡単だ。この中にいる誰でもいいから一番強力な攻撃をお前に叩きこめば……ボン！　だ。グラスやラルクの比例攻撃を命中させるのが理想だな。お前が放ったように」
たとえどれだけ魔法で治療しようとも、さすがに胴体を切断するくらいの威力があれば死ぬだろ。
「偶然とはいえ、ここまで威力向上が狙えるなら良い手だもんね」
「くぅ……この野郎！」
「キョウ！　今、降参すれば――」
ヨモギか。なんか生ぬるいことを言おうとしてるんじゃないだろうな？
降参したら命だけは助けるとか、ありえないぞ。
そんなことを言ったら絆に命じてコイツを戦線から外してもらう。
「楽に死なせてやる」
思わずこけそうになった。
思い切りが良いというか、猪みたいな性格なんだな。
グラスやツグミとキャラが被ってると思ったが十分違いはあるな。
さて、キョウの必殺の能力比例攻撃は覚醒状態のリーシアが遮るので、上手くいかない。
本のページを飛ばすが、リーシアは後ろからでも見えているのか全て叩き落としている。
完全にキョウに特化した能力だな。
運命とかそういう何かがあるとしか思えないほどの、できすぎた組み合わせ。
「ちょろちょろとしやがって、羽虫程度の分際で！」
「その羽虫にボコボコにされてるくせによく言う」
俺の言葉にキョウは地団駄を踏む。
「クソ野郎共が！　死ね！　俺に逆らうんじゃねえ！」
霊亀の力で強力になったと思ったが、あの時手に入れた力は一時的なものだったのか？
だが、キョウにはまだ余力があるように感じる。

「まだだ！」
直後、キョウは腰から怪しげな雰囲気を漂わせた……本のしおり？を取り出す。
持った瞬間、また余裕の笑みを浮かべてるな。
「お前等、アクセサリーで少し強くなったからって調子に乗りすぎなんだよ。強くなるってのは！　こういうことを言うんだ！」
本の眷属器にしおりを差し込む。
すると、ガクッとさらなる重さが俺達にのしかかった。
く……霊亀の心の盾でどうにか重力操作を……。
「させねえよ！」
ページがバラバラと俺の盾にくっつく。
それだけで俺の視界に浮かぶ重力操作に×マークが浮かび上がる。
ロックされた⁉
しかも少しずつ霊亀の心の盾からエネルギーが吸われているのが感じられる。
くそ……このままじゃ別の盾に変えざるを得なくなる。
「喰らいやがれ！」
「ふぇ！　まだです！」
さすがにこの重力内ではリーシアも動きが鈍く、キョウに避けられてページをぶつけられて跳ね飛ばされる。
「くそ、まだ姑息な奥の手を隠し持っていたか」
コイツはどこまで変な予防線を張ってんだ。
「ほらほら！　倍加スキルを俺に当ててるんじゃねえのか？　俺はここだぜ？」
アタックサポートを投げつけたくても、手を上げることすらできない。
「ま、この世界の聖武器の勇者様と眷属器の所持者はこの際邪魔だな。下手につるまれると思ったよりも抵抗しやがって厄介だ」
余裕の笑みを浮かべながらキョウは更に内ポケットからしおりを出して本に差しこんだ。
「こんなこともあろうかと、お前等の国の龍刻の砂時計に仕掛けをしておいてよかったぜ」

「な、何をする気だ⁉」
まさか龍刻の砂時計に既に何か細工をされていた？
そんな余裕はなかったはずだ。
「ああ、帰路の龍脈の防壁破壊は失敗したようだが、こっちは建物の外でも効果を発揮すんだよ。どうやって俺がそっちの様子を見てたと思ってんだ？」
砂時計を経由して見てた？
どんだけコイツは技術を隠し持ってやがる。
「これを使ったら、お前等も少しは強くなっちまうのが難点だけどな。こうしないとおめーから力を奪えないみたいだからしょうがねえ！」
何を言っているんだ？　何か、裏があるのか？
キョウの後方から液体が満たされたタンクが昇ってくる。
なんだ？　アレは？
キョウはブツブツと何か……スキルの詠唱をし始める。
何だろうか。凄く不吉な気配がする。
詠唱自体は短いモノだったと思う。
キョウがタンクに触れると、中の液体がまるで吸い込まれるかのように減っていったのだ。
魔力水？　もしくは……魂癒水か？
発動コストはかなりのものだったのではないだろうか？
『異なる世界、異なる理、異なる防壁を打ち砕き、かの現象を引き起こせ！』
「災厄の波・ディメンションウェーブ！」
バキン！

キョウが唱えると同時に、聞きたくない嫌な音が響き渡る。
「な、波を引き起こすスキル!?　何を――」
「そんな――」
「ウソだろ！　何を考えて――」
「キョウ！　お前という奴は波を――」
驚愕の言葉を言い切るよりも早く、絆達の姿が目の前からフッと消えた。

十一話　サクリファイス・オーラ

残されたのは俺とラフタリア、フィーロ、リーシア、ラフちゃんだけだ。
ヨモギは絆の仲間として行動していたから波に召喚された。
くそ……俺達と絆達を分断するのがキョウの目的だったのか！
俺の脳裏に音が響いたということは、波が起こったのは俺を召喚した世界と見ていい。
「おめーの盾に本をぶつけて召喚阻害をしてやったのをありがたく思うんだぜ。ん？　刀の眷属器はだんまりか？　ま、間抜けな異世界人を所持者に選んでるんだから当たり前か」
転送能力の阻害までやるとかどんだけだよ。
まあ、一緒にパーティーを構築していたフィーロ、ラフタリア、リーシア、ラフちゃんがいるだけまだいいか。
今頃絆達は波が起こった現場に強制召喚されているだろう。
「まー、間抜けな盾の勇者だけ残ったら万々歳だったんだがなー！」
余裕を見せつけているが、重力の過負荷が幾分かマシになっている。
徐に視界に浮かぶステータスの項目を確認した。
Ｌｖ76＋75？
そういえばラルクが二つの世界を合計したＬｖになると俺に説明していた。
その現象のお陰で俺達はキョウの作った重力場の中で立っていられるようになったのだろう。



だが、それはキョウとて同じだ。
そしてキョウは能力比例攻撃を持っている。
致命傷に至るほどの威力にはならないという短所があるが、それでも十分に脅威だ。
しかも絆達がいない。
こんな状況で戦えとか……やるしかないが、厳しいぞ。
盾は二つの世界のものが両方使用可能だ。
だが……今の俺の盾……霊亀の心の盾はキョウの放ったページがくっついて変化を阻害している。キョウの発言から考えて目的は俺。おそらく俺が……霊亀のエネルギーを上手く何かに使うことに対する障壁となっているんだろう。
俺が敗北した時、キョウは霊亀のエネルギーを一〇〇パーセント使えるようになるはず。
キョウは霊亀の力を上手く運用するために人為的に波を引き起こした。
どうする？　この状態でできることはなんだ？
ポータルはこの建物自体に配置された四聖獣コピーの所為で不可能。
この面子でキョウを撃破しなくてはならない。
「は、はははは！　やっぱり馴染むみてーだな！」
霊亀の力が辺りに溢れだし、キョウに向かって集結していく。
「おらよ！　喰らえ！」
霊亀の使い魔（親衛型）が立ちはだかり、俺達を殺そうと各々……三勇者の聖武器に似た武器を持って挑んでくる。
霊亀の核の間で戦った時と状況が近い。
ただ、あの時よりも遥かに仲間の数が少ない。
「ラフタリア、行けるか？」
「はい」
「フィーロなんか元気出た！」
フィーロが聞いてもいないのに立ち上がり、人型になって構える。

ん？　寝巻きの足の部分にカルマードッグクロウが出てる。
隠し武器ってやつか？
とりあえずこっちもちょっとは戦える状況に……なってるが。
盾にくっついてるページが嫌な感じに俺から何かを吸い取っている。
く……なんだ？　霊亀の心の盾を維持していられない。
「お？　気付いたみてーだな。そうだよ。おめーのその厄介な盾の力を吸わせてもらってんだ。完全に吸いきるにはおめーを殺さないといけないみたいだがな！　強固な守りで奪いづらいから波を起こして守りを崩してやったんだ」
つまりキョウは俺に奪い返された力と、霊亀の心の盾の中にある力が欲しかった。
そのために必要なのは波を起こすこと……考えてみれば聖武器は波から世界を守るという役目を持っているのだから、何かしらの条件下でその守りに抜け穴が発生することもありえる……。
その隙を分析して衝いたということか。
ありえるのは霊亀の力が元の世界に戻ろうとして盾から抜け出そうとするとか……だな。
こんな裏技みたいなことがよくもまあ閃くもんだ。
記憶にある強化状態の盾の中で一番強いのは魔竜の盾だ。世界を渡ってもこれは確かだろう。
今の俺にはこれで戦うしかない。
「不幸中の幸い……私達があなたよりも劣っていると思ったら大間違いですよ！」
ラフタリアが刀を白虎ノ太刀に変える。
そうだ。ステータスに問題があって振り回すのが困難だった武器を使用できる。
どんな効果があるかは不明だけど、白虎ノ太刀が魔竜の素材の武器よりも優秀なのは明白だ。
癖こそ強いが、ラフタリアなら使いこなせるはず！
「フィーロだってがんばる！」
フィーロは魔力を溜める動作をしながら歌う。
元の世界と繋がっている今、フィーロはフィロリアルとしての力を発現させている。
完全に攻撃と援護を兼ね備えた存在だな。

絆達がいなくて、キョウの戦力を弱体化させる霊亀の力を使えないが、追いこまれているとも言えないんだ。

「おめーら、大事なことをわすれてねーか？」

キョウが俺達を指差す。

おそらく能力比例攻撃を放ってダメージを増やすつもりだ。

キョウ自体も強くなっている状態で厄介な攻撃をしてくるのは容易く想像できる。

防御力が低下した瞬間に必殺のスキルでも受けたら俺では耐えきれない。

というところで、キョウがリーシアに視線を向ける。

「まあ、間抜けな盾の勇者を殺すのは後にして、正義面してウザいお前からだ！」

リーシアに指を向けたキョウ……だったのだが、指差してスキルを放つよりも早く、リーシアは素早く……まるでハイクイックが掛かっているかのような動きで宙返りして霊亀の使い魔（親衛型）を一撃のもとに薙ぎ払う。

「あ⁉」

「何を呆けているんですか？　私を小馬鹿にして挑発しているようですが通じません！」

ん？　リーシア自体が自覚していないのか？

俺はリーシアのステータスを確認した。

な、なんだこれは⁉

リーシアはＬｖだけは俺達と近い数字を持っている……はずだった。

俺の想像では多少能力が上がった程度だと思っていたのだが、今のリーシアの総合ステータスはフィーロを遥かに凌駕している。

同Ｌｖで潜在能力や盾の補正が全て込みでのフィーロをだ。

これが覚醒してる状態だとしたら相当だ！

「ど、どうなってんだ⁉　霊亀の使い魔共も世界を跨いだ付与を受けているはずだぞ！　にもかかわらず、それを突破してる……だと⁉　ふざけんな！」

「ふざけているのはどっちだ！」

今のリーシアは……勇者に勝るとも劣らない力を宿している。

大器晩成ということがある。

リーシアは一定のＬｖラインを超えると化ける……タイプだったのかもしれない。

もちろん、それを期待して俺はリーシアを育てていた。

一度、そのラインに到達しようものなら今までの比じゃない伸びを見せる。

俺を召喚した世界でのＬｖ上限は１００だと聞いた。

絆を召喚したこの世界も似たように上限があるらしい。

もしもリーシアの潜在能力を引き出すのに必要なＬｖが１００以上だとしたら、それは開花しない才能だ。

変幻無双流のババアがリーシアに才能があると言っていたのは体質的な意味もあったのかもしれない。グラスもリーシアが驚異的な能力を発揮する時の状況を確認してそれを理解したようだしな。

だが、そんなブーストもリーシアの才能が全て開花したらどうなる？

もちろんキョウの攻撃は脅威となってしまうが、その攻撃を避けるだけの強さを持ってしまっている。

「あー！　ウザイウザイウザイウザイウザイ！」

キョウが髪をかきむしりながら叫ぶ。

波を引き起こされて絆達が転移してしまったが、結果的にこの状況が俺達に有利に働いたと思っていいのかもしれない。

お世辞にも良い状態とは言えないが、良い意味で誤算があったのはありがたい。

「どこまで俺の邪魔をすればいいんだよ！　お前等は！」

「自分から問題を起こしておきながら、これか……そんなの決まっている。お前が死ぬまでだ」

「ええ」

ラフタリアが刀を鞘に収めて力を込める。

Ｌｖによる補正か白虎ノ太刀の力か知らないが、鞘に付けたハイクイックが作動するための光が見る見る増えていく。

「フィーロもやるもん！」

完全にチャージを終えたフィーロと俺の肩に乗るラフちゃんが戦意を高揚させる。

「もういい。少し遊んでやろうと思ったが、もう限界。損失なんて考えていたらやってらんねーのだけはわかった」

キョウが苛立ちを解消するように手をだらんとしてから髪を整える。

「ここでお前等がどれだけパワーアップしようが大事なことをわかってないようだから教えてやるよ」
「なんだ？」
「この世界の眷属器と聖武器の強化方法は共有できる。おめーらもあいつ等と一緒にいたからわかってんだろ」
「……そうだな」
何を言おうとしているか、俺は既に察している。
正直に言えばヒヤリとした嫌な汗が流れるのを感じているところだ。
絆達は聖武器と眷属器のそれぞれが所有する強化方法を共有することで能力を上昇させている。
これは前提。俺だって俺を召喚した世界の四聖武器と呼ばれる他の三勇者の強化方法を共有することで強くなったんだ。
だが、絆達はラフタリアが刀に選ばれるまで強さが頭打ちになっていた。
「正直さ、俺も比例攻撃は十分警戒してたんだぜ。もちろん対策は十分だけどよ。だけどお前等は？」
俺は防御比例攻撃はラルク達以外は使ってこないと警戒を怠った自覚はある。
白虎の盾にある受け流しは比例攻撃を緩和させる効果があるかもしれない。
だからこそ、変える価値もある。
だが、援護無効は鬼門だ。ラルク達も何か問題があるから使わなかったのだろう。
「で、本題だ。俺って情報戦には十分気を付けてんの。その俺が、聖武器や眷属器の所持者……お前等と一緒にいたあいつ等の強化方法を知らないと思ってんの？　鏡の眷属器の所持者であるアルバートを誰が正面から倒したと思ってんだ？」
キョウは本のページを俺に見せつける。
「ま、狩猟具の聖武器の強化方法を知ったのは最近だけどよ。お前さ、俺の周りにいた眷属器も数に入れろよ」
キョウが何を伝えたいのか理解できる。
つまりキョウは絆達の強化方法……絆、グラス、ラルク、エスノバルト、ラフタリアの、それぞれの武器に内包された強化方法を知っていることになる。
これにキョウ自身の本を加え、さらにアルバート……鏡の眷属器の強化方法を加えたらどうなる？
グラス達の言葉だと聖武器の強化方法が一番倍率が良いらしい。

眷属器は若干劣るが、聖武器と六つの眷属器の強化方法を共有したら、どれだけ化け物じみた存在になるか俺は推測しきれない。
だが、ならばなんでここまで追い込まれた？
考えられるのは……あくまで推測だが、俺はグラス達の反応を思い出して結論を導く。
「ハッタリをかますのは程々にしておけ。お前……眷属器に嫌われてんだろ？　そんな状態で力を引き出せるのか？」
俺が指差して言い放つとキョウは歯を一瞬、噛みしめた。
「そう思うなら掛かってこいや！」
図星だな。おそらく本の眷属器は所持者を軽蔑している。
どうやってそんな状態で眷属器を支配下に置いているのかわからないが、上手く力を引き出せているとは思えない。
キョウは今までは遊んでいたんだと誤魔化したいのだろう。
そんな状態で更に強くなるにはどうする？
外部的な要因でのドーピングしか考えられない。
つまり霊亀のエネルギーを自分に付与することで更に能力増加を図ろうとしたに過ぎない。
「リーシア」
「はい！　なんですか？」
まだちょっと怯えた感じだが、今のリーシアは正義感に燃えている。
「ババアから教わった攻撃をできるか？」
ババアは防御比例攻撃を息もつかせず放てた。アレが効果的だと思われる。
「がんばってみます！」
「ラフタリアはどうだ？」
「スキルでやってみます！」
「フィーロはー？」
「お前は突撃しろ。今のお前なら十分行ける」

「うん！　がんばるよー！」
俺達の能力を引き上げる歌をフィーロは歌い続けている。
フィロリアルであり、ハミングフェーリーである状態のフィーロは、俺達にとって戦闘の補助的な役割をになっている。
奥の手は沢山ある。
霊亀の心の盾に変えることは不可能で、超重力場で俺達自身の動きが阻害され気味。
合計されたＬｖによってやっと動けるこんな酷い状態で今までの強化方法を全て試した挙句、霊亀の力でブースト状態のキョウを仕留めなくてはならないときたもんだ。もはや後先考えている暇なんてない。
「とりあえず、死ね！」
「エアストシールド！」
キョウの能力比例攻撃をエアストシールドを出して受け止める。
バキンとエアストシールドは砕けたが、やはり一発は耐えることが可能だな。
「チ！　よくもまあ耐えるもんだ。しぶてーな！」
「行きます！」
「はい！」
ラフタリアが——両方の鞘から一気に刀を引き抜く。
ハイクイック×２による高速攻撃、キョウのページがその攻撃を防ぐべく辺りを舞うが、ラフタリアはページの隙間を縫うように突撃して斬りつける。
「アタックサポート！」
俺は間に合わないのを理解しながらも無駄にならないように棘を投げつける。
その棘を追うようにリーシアが駆けだして、ページを比例攻撃で切り裂いて突き進む。
「はいくいっく！」
フィーロもリーシアを追いかける。
「甘い、甘いぜぇ！　菓子よりもあめぇ！」
キョウは手を前にかざしてからページを大きく動かす。

何をする気だ!?
「既にお前等は俺の罠に掛かったようなもんだ！　ライブラリア！」
辺りの景色が白黒に変わり、バタンと本が閉じるような音が響く。
「ははは！　空間圧縮拘束スキルを喰らえ！」
キョウが目の前で消失した。
だが、何かがおかしい。
さっきまで地下室だったのに、白い個室みたいな空間に変化した。
辺りにはキョウが放ったらしいスキル……火の鳥や雷、竜巻、巨大な岩盤、そして死角から霊亀の荷電粒子砲のような攻撃が飛んでくる。
「ホラホラ！　耐えなきゃ死ぬぜ！　死ぬまで耐えろ！　避けるがいい！」
く……スキルで作り出した空間に閉じ込めるスキルか。
後は使用者の思い通りに捕らえた奴を嬲り殺す……まさしく厄介なスキルだよ。
「流星盾！」
飛んでくるスキルを受けるが、即座に流星盾は弾けて、破片が飛び散る。
ターゲットは……やはり室内全体か。
破片が飛んでいくまでの間、俺達は攻撃を受け、時に避ける。
厄介な攻撃をしやがる。
だが、こういうのに対応できない俺じゃないぞ。
盾からバイオプラントを投げつけて強制発芽させる。
メキメキとバイオプラントが急成長し、空間を破壊——
「させるかよ！」
バイオプラント目掛けてスキルが飛んで破壊された。
「無限迷宮からどうやって出たのかと思ったが、それで出たのか。納得したぜ」
ちっ……このままだとキョウの攻撃で嬲り殺しにされるぞ。
「はぁ！」

「とー！」

「ラフー！」

リーシア、フィーロ、ラフちゃんが各々の攻撃で壁を攻撃するが、僅かに破損するだけで即座に復元した。

その間にもスキルは雨のように止め処なく飛んでくる。

エアストシールド、セカンドシールド、ドリットシールド、シールドプリズン、流星盾で受け止めるが、それだって限界がある。

見た感じ、空間は耐久力があるようだが、それを突破すれば脱出することは可能だろう。

問題はキョウが永続的に壁を回復させながら俺達を殺そうとしているところだ。

どうやらキョウは本のページから俺達にスキルを放っているようで、キョウがいた壁が視覚範囲のようだ。

「ラフちゃん！　煙幕をそこの壁に張れ！」

「ラフー！」

俺の意図を察して、ラフちゃんは煙幕を張る……のではなく煙幕の中に幻覚を潜ませる。

風が起こって俺達を隠そうとした煙幕が散らされる。

「隠れたって無駄無駄ぁ！」

が、ラフちゃんが張った幻覚までは見抜けなかったようで、見当違いの方角を中心にスキルが飛び散っている。

「う……くそ！　まだ行ける」

受ける演技をしながら、ラフタリアとリーシアに手で合図を送る。

フィーロには喋らないように口を押さえる。

盾を指差してからメルロマルクの文字で『憤怒』と書く。

ラフタリアが目を見開き、リーシアが思わず声を漏らしかける。

俺の持つ攻撃手段で一番強く、回復遅延の呪い効果のあるダークカースバーニングSで空間ごと焼き尽くす。

試さない手はない。

ラフタリアは危険だと首を振るが、今までだって耐えきれたんだ。

問題はラフタリア達だが、シールドプリズンで守ればどうにかなるだろう。

最悪の場合に備えてラフタリアには守るためのスキルを使ってもらったほうがいいな。

俺の決意にラフタリアは諦めたように、フィーロとリーシア、そしてラフちゃんを連れて俺から離れる。

なに、することは変わらない。

普段通りに、死闘を乗り越えていけばいいだけなんだ。

「……」

何度目だろうか、この盾を使用するのは。

困ったら頼るようになってしまっている呪われた盾、今回も頼る。

俺は盾に手を添えてから、目を閉じ、呼吸を整えて……変化させる。

竜帝の核の増加によりグロウアップ！

ラースシールドⅣ（覚醒）＋7　50／70　ＳＲ

能力未解放……装備ボーナス、スキル「チェンジシールド（攻）」

「アイアンメイデン」「ブラッドサクリファイス」「メギドバースト」

専用効果　ダークカースバーニングＳ　腕力向上　激竜の憤怒　咆哮

眷属の暴走　魔力の共有　憤怒の衣（大）　魔竜の魔力　――　――

熟練度　０

く……なんとなく嫌な予感がしたが、ここで変化するとかどんだけだ！

形状は前にも増して禍々しく成長している。

もはや片腕だけで持つのが難しい大盾だ。タワーシールドとでも言うのか？

心の中を前よりもさらに強い憎悪の感情が駆け巡る。

だが、同時に今まで以上に、知り合った仲間達への思いが……信じたい、守りたいという心が盾の支配を乗り越える活力へと変わる。

専用効果の最後の二つはわからない。何か隠された力が潜んでいる。

もしかしたら相当危険なものなのかもしれない。

メギドバーストに関しては放ちたいとすら思えないな。
もしも放ったら俺がどうなるかわからない。
「くうう……」
手足に黒い炎が宿ったフィーロが、必死に堪えている。
だが、それ以上に憎悪の力が強すぎる。
く……やばい、意識が持っていかれそうだ。
「ラフー！」
ラフちゃんがフィーロの頭に乗っかってアホ毛を甘噛みする。
するとラフちゃんの尻尾に黒い炎が浮かび上がる。
「私も！」
ラフタリアはラフちゃんとフィーロに手を置いて、意識を集中させる。
少しでも俺の負担を軽減しようとしてくれている。
その想いが焼け焦げそうな俺の心に水を与える。
澄んだ水が肌に染み込むような気持ちの良さ。
うん……まだ俺は耐えられる。
「行くぞ！　シールドプリズン！」
盾の檻を出現させてラフタリア達を守り、キョウの放ったスキルの雨を受け止めた。
カッと盾が前よりも強く、しかし歪な光を放ち始める。
「うおおおおおおおおおおおお！」
「な、何!?」
全てを焼き焦がす呪いの炎はキョウの作り出した空間を一瞬にして消失させる。
パシュッと音がして俺達は元の空間に戻ってきた。
辛うじて、シールドプリズンは原形をとどめているな。
「まさか、俺のスキルを突破するとは。やるじゃねえか」
「完全に騙されてた奴がよく言う」

ラフちゃんの幻覚に騙されて幻の俺達を攻撃していたくせに。
「だが、まだまだ俺の攻撃はこれからだ！」
ブラッドサクリファイスをキョウに放つか？
いや、放ったと同時に俺が倒れては話にならない。
まだだ、まだその時じゃない。
キョウが放った攻撃でバシッとプリズンが破壊されて、ラフタリア達が飛び出す。
そしてキョウに向かって各々の武器で斬りかかった。
「剛刀・鐵十字！」
ラフタリアは二刀流による十文字斬りを放ってキョウがばらまくページを切り裂く。
「は！」
リーシアはババアお得意の防御比例攻撃を見よう見まねで撃ち。
「とー！」
フィーロはスパイラルストライクで突撃する。
「またそれか！　お前等も懲りねえな！　縛式・四章！」
キョウが本のページを開くと、ページから檻が出現してラフタリア達を閉じ込める。
続けざまにスキルを放つようだ。
「連式・吊り天井！」
檻の上から針が飛び出して降り注ぐ。
「させるか！　エアストシールド！　セカンドシールド！　ドリットシールド！」
天井の落下を阻止するために三重の盾を展開させてラフタリア達を守る。
「はぁ！」
居合い斬りの要領で檻を破壊し、ラフタリア達はキョウを追い詰める。
そうだ、今の俺達はもっと強くいける。
たとえ絆達がいなくたってキョウを倒せるんだ。
「受けるかよ！　お前等の攻撃くらい、俺は見切れるぜ！」

キョウ自身が行っている能力ブーストの所為で、如何せん速さが足りずに避けられてしまう。
決定的な速度不足。当たらなければ意味がないという言葉が脳裏を駆け巡る。
ラフタリア達もチャージをすれば辛うじて追いつけるが、そうなったらキョウにも大きな余裕ができてしまって、またあの空間に閉じ込められかねない。
もちろん、焼き焦がせばまた出られるかもしれないが何度も同じ手は通じないだろう。
時折、後方から四聖獣コピーが襲ってくるのも厄介極まりないし、倒したはずの霊亀の使い魔（親衛型）が再生するのも煩わしい。
「喰らえ！　第八章、天罰！」
キョウが本のページを捲ってスキルを放つ。
雷が俺達に向かって飛んでくる。
追尾性を持った雷！　魔法でも再現可能な攻撃に見えるが、それ以上に何かあるに違いない。
「エアストシールド！」
「おっと！」
雷が俺の出したエアストシールドを器用に避けて飛んでくる。
くそ、やはりそういう類の攻撃か。
「流星盾！」
避けるラフタリア達を守るために流星盾を展開させて雷を受け止める。
ラースシールドⅣのお陰で完全に受け切ることはできたようだな。
バチバチと流星盾が発熱する。
これは……何が起こる？
バシュッと流星盾から黒い炎の玉が辺りに飛び散り、その玉がキョウの放ったページに命中すると焼き焦がして燃えカスへと変貌させた。
上手くキョウの手数を減らせるなら万々歳だ。
室内ではもはやキョウの使役する四聖獣コピーとホムンクルスの残骸は完全に焼け焦げ、クズ二号やアルバートの死体は炭化している。

「どこまでも鬱陶しい連中だ！　だが、ここまでだ！」
キョウが本のページを捲って……霊亀の頭を模した何かを作り出す。
「時間が掛かるがしょうがねえ！　お前等感謝しろよ！　俺のこの攻撃を受けられるんだからよ！」
この雰囲気は必殺スキルだ。
耐えきれるかどうか……正直、かなり怪しい。
「させません！」
ラフタリアとリーシア、フィーロが飛び出すが、キョウは何重にも結界を作り出して守りに入っている。
リーシアやラフタリアの比例攻撃によって少しずつ削れてはいるが、壊れるごとに補充される防壁の前に為す術もない。
しかもだ。動きを遅くさせる重力場が邪魔だ。オストと共にいた時、どうやって切り抜けた？
……あれができるか？
このまま俺が棒立ちでいる必要なんてない。
やる時にはやるしかないんだ。
一人であろうと、龍脈法を習得していなくたって強引に唱えてみせる。
意識を集中させて、感覚を思い出す。
テリスが教えてくれた力の導き方を真似して……媒体を盾とし、自身の力、そして辺りに漂う霊亀の力と、意識を伸ばせるところから力を請う。
……やはり上手くいきそうにない。
が、僅かに盾に反応があり、辺りの霊亀の力が集まってくる感覚がある。
よし……一か八か、アル・リベレイション・オーラを唱えて――
そこで、ふと背筋がぞっとするような、今までにない感覚が通り過ぎる。
いや、ラースシールドを使っている時に感じていた声と言うべきなのか、それとも違う何かなのかを特定できない。
ただ、俺の中にある禍々しい存在である確信がある。

──ほう……古の魔法を唱えようとしているのか。
──ここで倒れられては我も困る。手伝ってやろうではないか。

ギュッと今までにないほどに俺の心を締め付けるその声の主に、抗える術はなく、視界にオストと共に作り出した時と同様のパズルが浮かび上がって、勝手に組み上げられていく。

──これでいいのだろう。
──だが……我の力を借りるということは相応の代償を支払うことを覚悟せよ。
──汝にその覚悟があるかな？

誰だかわからないが、覚悟くらいある。
たとえ何があろうとも、俺は、俺達はキョウに報いを受けさせると決めたんだ！
俺は迷わず魔法の発動を意識する。
すると、詠唱が出る前に誰に魔法を施すか問うアイコンが現れる。
なんだ？　普通は唱えてからだぞ？
アイコンは三つ。三人までしか指定できないということか。
俺は固定されている。
俺が唱えようとしているのはアル・リベレイション・オーラだ。
この中で……能力が上昇する意味があるのは誰だ？
ラフタリアは鉄板、次点だと能力的にリーシアだ。
俺が迷わずリーシアを指定しようとしたところで、ドクンと視界に赤く囲みが入った。
……何か嫌な予感がする。この魔法を唱えるべきではない。
俺にだけではなく、とてつもなく大きな代償が掛かってしまう。

──おやおや。臆病者に勝利が舞い込むのか？

──狩猟具の勇者はリスクを承知で挑んできたぞ？

くっ……そうだとしても、ラフタリア達にまで代償を背負わせるわけには……。
「ごしゅじんさま、フィーロは大丈夫。霊亀のお姉ちゃんの分まで、フィーロがお姉ちゃん達とごしゅじんさまを手伝うから」
フィーロ……？
ラースシールドが発している何かに気付いているのか？
おかしくはないか。フィーロはラースシールドの影響を以前から受けていた。
……そうだな。ここで引いていたら勝てるものも勝てなくなるよな。
俺はリーシアではなく、フィーロを指定する。
今度は何も起こらない。
何か……リーシアを指定するといけないような何かが、俺の心にブレーキを掛けてくれたのかもしれない。
行くぞ！
『我、盾の勇者が魔竜と憤怒の力を借りて天に命じ、地に命じ、理を切除し、繋げ、膿みを吐き出させよう。龍脈の力よ。魔力と魂と生贄と勇者の力と共に力を成せ、力の根源たる盾の勇者が命ずる。森羅万象を今一度読み解き、彼の者等に代償と共に全てを与えよ』
「アル・サクリファイス・オーラ！」

十二話　代償の力

な!?　サクリファイス!?　違う、俺が唱えようとしたのはリベレイションだ！
だが、俺の制止を振り切り、盾からおぞましい黒い炎が噴出して、俺とラフタリア、そしてフィーロを取り囲んで宿る。
「ぐ……」

身が焼け焦げるような痛みを覚える。
視界を確認すると少しずつＨＰ……生命力が目減りしていく。
俺達三人の全身を赤黒い粒子のようなものが包んでおり、その代価に合った力が湧き出てくる。
「な、何が！　でも――」
「いたいー、だけど力が湧いてきたー」
俺もラフタリアもフィーロも、力が湧いてくるのを感じていた。
「はぁ！　細雪！」
ラフタリアの刀を受けて、キョウの張った結界はまるでバターの如く容易く切り裂かれる。
補充さえも追いつかず、一撃のもとにだ。
更に追撃とばかりにフィーロがツメを振りかぶると、それだけで補充された結界すらも切り裂かれ、リーシアが飛びこんで、キョウに一撃を加えた。
「何⁉」
完全に予想外だったのかキョウは腕でリーシアの突きを受け止めたが、その手から血が噴き出し、腕が折れた。
「いってえええええ！　くそ！　よくもやりやがったな！」
キョウがページをギプス代わりにして霊亀の力で傷口をふさごうとするが、そんな暇は与えない。
俺も突撃する勢いで結界を潜り抜け、霊亀の頭の形をしたスキル攻撃を憤怒の炎で消し飛ばす。
そしてキョウの胸倉を左手で掴んでから右手でスキルを放つ。
「アタックサポート！　ラフタリア！　リーシア！　フィーロ！」
「はい！　朧月！」
ラフタリアは刀を下段に構え、斬り上げる。その動作から、ぼんやりと浮かぶ月を思わせる細かな光のような閃のような何かがキョウの腹を抉り取る。
同時に――
「はぁあああ！」
リーシアがエクレールの真似をして小太刀を光らせて突く。
その突きがキョウの胸を貫く。

「本の人、霊亀のお姉ちゃんを泣かせた！　本の人を、倒す！」
フィーロのツメがキョウの喉笛を切り裂く。
「あ――が――あ⁉」
声も出せずにいるようだな。
だが、これが終わりじゃない！
それでも再生しようとするキョウの体から漏れ出す霊亀の力が俺の盾に吸い込まれる。
「まだ行くぞ！」
「はい！　剛刀・霞十字！」
「はいくいっく！」
「まだまだです！　いろんな人達が貴方の所為で死んだんです。私は許しません！」
俺が押さえつけているのをいいことにラフタリア達は攻撃をやめない。
「ラフー！」
ラフちゃんは攻撃に参加できるような強さを持っていないのが残念だな。
それでも俺の腕に乗ってペシペシとキョウの顔面を殴打する。
よし！　霊亀の心の盾が使用可能な領域まで力を取り戻した。が、今はまだ変えない。
すでにキョウはズタボロになっている。
「てめぇ……こんなことして――おぼえて」
「知ったことか！　俺の仲間……オストの使命を踏み躙ったお前に対する俺の……俺達の怒りで、お前を、消す！」
俺はキョウを壁に投げつける勢いで思い切り投擲する。
「シールドプリズン！　チェンジシールド（攻）！　アイアンメイデン！」
盾の檻に閉じ込め、内側に針の盾を出現させると同時に、鉄の乙女を呼び出して串刺しにする。
アイアンメイデンは代償にＳＰを全て使うが、これで倒せるのなら万々歳だ。
正直、サクリファイス・オーラの所為で長期戦は不可能だからな。
「――⁉」
キョウの叫び声が木霊する。

やがて、鉄の乙女が消え去ると同時に、串刺しになったキョウが前のめりに倒れ込む。
くっ……痛みで目が霞んでくる。
だが、倒れるな。まだ戦いは終わっていない！
「く、くそ……まだだ」
この野郎、まだ生きてやがる。
ボコボコと傷を治しながらキョウは俺を睨みつけてきた。
その間にエネルギーが漏れ出して俺に移ってくるがな。
ラフタリア達はダメージから息切れ状態だ。
「もはや後先なんて知ったことか！　俺の奥の手、禁断の書――」
キョウの持つ眷属器が禍々しい装丁に切り替わる。
おそらくカースシリーズに該当するものだろう。
やばいな、奥の手を出されたら、今の俺達には後がない。
代償付きの援護魔法とラースシールドを使ってるんだぞ？
そう思った時、オストの姿が脳裏を過る。
……そうだな。お前がキョウにトドメを刺したいよな。
俺は盾を霊亀の心の盾に変化させる。
それまで……20％しか溜まっていなかったエネルギーブラストの目盛りが、全てを察したように１００％に切り替わる。
「お前等を殺す最強の一撃だ！　死ね！　黙示録！」
「エネルギーブラスト！」
魔力で作られた台座が俺を固定する。俺は盾を前にかざし、全てを消し飛ばさんとばかりにエネルギーブラストを放った。
同時にキョウの持つ開かれたページから不気味なほど白いながらも、角度によって黒くも見えるおかしな羽根が舞う。
その羽根から大量の黒い光が発射された。

複数の光が集約して俺の放ったエネルギーブラストを受け止めつつ、正面から押し返そうとしているようだ。
一方キョウの体には羽根が纏わりつき、ダメージを回復させていく。
攻防一体型のスキルか⁉
相手を攻撃すると同時に、自身を回復させる効果を持つものだ。
ただ、キョウの台詞から察するに、奴も何かしらのリスクを背負っていると見ていいだろう。
「はははははは！　どうだ？　お前の必殺攻撃だろうと俺の前じゃ無力なんだよ！　オラオラ！」
「く……」
じわりじわりとエネルギーブラストが押し負けていく。
力と感情、意志を強く込めるが、それでも少しずつ、キョウの攻撃が迫ってくる。
エネルギーブラストを突破されても、俺の後ろにいるラフタリア達を守れるだろうか？
この盾がキョウの攻撃を防ぎ切れるのか、わからない。
敗北、負け、自分の後ろ、ラフタリア、フィーロ、リーシア、ラフちゃん、死。
そんな言葉が脳裏を過っていき、時間の感覚が狂っていく。
一秒が何千にも何万にも細かに刻まれるかのような感覚。
ジリジリと全てを失ってしまう、取り返しのつかない感情が渦巻く。
時間の感覚が狂っているのに、心臓の鼓動だけが速い。
その例えようもない孤独感を遮るように後ろから声が響く。
「ナオフミ様！」
「ごしゅじんさま！」
「ナオフミさん！」
「ラフー！」
みんなが押されそうになっている俺を支えるように背中を押してくれている。
そうだ、俺は一人で戦っているんじゃない。
こんな所で……俺は負けるわけにはいかないんだ。
俺がここにいることには意味がある。

オストの願い、霊亀の犠牲者となった人達の無念。
それだけじゃない。
助けられなかった者、倒した敵、一緒に戦った仲間。
その全てを受け止めて、報いなければならない。
その時、壁から飛んできた光が俺の周りに漂い、盾に重なった。
これは……鏡の眷属器か？
俺を中心に複数の鏡がエネルギーブラストを収束させていく。
「か、鏡の眷属器……だと!?」
「お前、ずいぶんといろんなところから嫌われてるんだな。まあ納得だな」
ドクンと盾が鼓動を強め、盾の中心——宝石の部分から力が溢れ、発光する。
63％……61％……58％……62％……65％。
少しずつ目減りしていたエネルギーブラストの残量が増えていく。
まるで俺の強い意志に反応したかのように。
やがて……。
「な、何？」
98％……１０５％……１１０％……１２０％……１３０％。
１００％を超えても更に増加し続けるエネルギーブラストの残量表示に比例するかのように光の波動がキョウの放つスキルを強く押し返していく。
「く……まだまだぁ！　この程度で俺が負けるわけねーだろ！」
キョウは更に本にしおりを挟み込んで威力を増加させ、舞う羽根の数を増やしていくが、徐々に威力を増加させていくエネルギーブラストの出力に追いついていない。
「はぁあああああああああ！」
俺を支える光の土台に回すエネルギーすらも攻撃に転化させ、エネルギーブラストはキョウのスキルを押し切っていく。
「これで！　おわりだぁあああああああああ！」

俺は強く踏ん張って盾を前に押し出す。
ラフタリア達も俺を支えるように腕を強く押し出してくれている。
「ナオフミ様！　あと少しです！」
「がんばってー！」
「ここが正念場です。オストさんのために……私もがんばります！」
リーシアが小太刀に力を込めてキョウに投擲した。
光る小太刀がエネルギーブラストの光に吸い込まれる。
エネルギーブラストはリーシアの小太刀を傷つけることなく、むしろ強化させて力を増し加速する。
光の刃となった小太刀は黒い光を完全に貫通し、キョウに突き刺さった。
霊亀内部で戦った時とほとんど同じ構図になった。
だが、今回はなにかもが違う。
あの時のリーシアは勇者達を助けるために投擲したが、今回はキョウを倒すために力を振るった。
「ガハ！　て、てめぇえ！　またやりやがったな！」
僅かにキョウが仰け反るのを確認したかしないかのその瞬間、エネルギーブラストの出力が更に増加してキョウの放ったスキルを……完全に押し切る！
光の奔流がキョウを包み込み、全てを焼き焦がしていく。

「ギャアアアアアアアアアアアア――」

その叫びが終わる前にその奔流はキョウの放つスキルを消し去り、俺と皆……そしてオストの一撃がキョウを穿った。

地下室にどこまでも続きそうな風穴が開いていた。

その手前で、キョウがボロ雑巾のようになって仰向けに倒れ込む。

しぶといな。このまま跡形もなく消し飛んでくれればよかったものを……。

「これで復活しようものなら、対処のしようがない……」

リーシアがツカツカと近寄って、小太刀の柄でキョウを転がす。

「て、く……お、前らを、絶対に、殺してやる」

再生する気配は……ない。

だが、こんだけやってもまだ生きてるとは驚異的だな。

しかしその命も風前の灯みたいだな、血を吐きながら呼吸が徐々に弱くなっていく。

すぐに死ぬだろう。

「懺悔の時間だ。言い残すことはないか？」

「だ――れが、死ぬ――か。どうせ……この、から……」

言い切る前にキョウは息を引き取った。

合わせたかのように重力場は消え去った。

やはり目の前で人が死ぬのは後味が悪いな。

だが、報いを受けさせたのだという気持ちが罪悪感を薄くさせる。

「これで私達の勝利なんですよね」

「一応はな」

ただ、キョウを仕留めたのに霊亀のエネルギーがあまり返ってきていない。

むしろ無駄遣いをしてしまったような気がする。

俺はキョウが所持していた本の眷属器に目を向ける。



ふわりと浮かび上がり、そのまま飛び立つかと思ったが、挙動がおかしい。
まるで逃げるかのように、キョウが出てきた辺りへ飛んでいこうとする。
「ラフ！　ラフウウウ！」
ラフちゃんがせかすように眷属器を指差して、行き先を指示する。
「フィーロ、キョウが出てきた辺りをフィロリアル形態で踏み抜け！」
「わかったー！」
ボフンと変身したフィーロが本の眷属器よりも先に床を踏み抜く。
俺達は急いで後を追い、何があるのか理解した。
そこにはタンクに入ったキョウの……体が保存されていたのだ。
先ほどまで戦っていたキョウが魂を移したホムンクルスだったのか、それともこちらがホムンクルスなのかは、わからない。
だが、霊亀のエネルギーの受け皿として研究されていたのは間違いない。
「おっと」
俺は盾をラースシールドに再度変化させ、黒い炎を立ち上らせて眷属器を掴む。
「そこだな。キョウ、どうせ肉体のスペアかオリジナルかわからないが、そっちに魂を移して二回戦、今度こそ本気のバトルとかやる気なんだろうが、俺達も暇じゃない」
ラフちゃんにはキョウの魂が見えているみたいだな。
「ラフ」
ラフちゃんが俺に飛び乗って肩を足場にして俺の頭に手を置く。
ん？　何かぶれて見えてくるぞ。
本の眷属器を持った魂……幽霊の紐がタンクの中にあるキョウの肉体へと行こうとゆっくりと移動している。
だが、なんだ？　ガリガリの三十代っぽい男に見える。
間違ってもキョウには見えない。
……魂なんて得てしてこんなもんか？
『あ!?　この程度で俺が終わるわけねーだろ！　待ってろ！　この、霊亀の力を完全に内包して完成した体に入ったら、お前らなんて秒殺してやるからよ！　最強は俺なんだ！』
どうやらキョウらしい。
魂は心を映す鏡……なんてな。
「リーシア！」
「は、はい！」
「あそこに、絆達からもらった札を投げろ」
俺が指差すのはキョウの予備の肉体があるタンクだ。
そこへ今、手を必死に伸ばすキョウの魂へ向けて投げるよう……命じる。
「キョウ、ツグミという女達の思い人やアルバートとやらに自分がしてきたことを忘れていないよな？」
俺に眷属器を押さえつけられてキョウは振り向き、青ざめる。
何をさせるのか察したようだ。
『ま、待て！　約束する。助けてくれたらお前らだけは見逃してやる！　な？　話し合いをするよな？』
「もう手遅れだよ。お前の真似で締めてやるよ。『バーカ。誰が嘘だとわかる命乞いに応じるかってんだ！』」
「は！」
リーシアが札を発動させる。
持たせていたのは使役札。
魔物を使役するこの札の中に入れていたのは、俺達から見ればソウルイーター。
この世界での呼び名は魂食い。
スピリットの天敵で、魂を主食にする化け物。
俺はクズ二号の挙動とホムンクルスという発想から、死んでも大丈夫なように予備の体を用意する錬金術師を思い浮かべてこの札を手配させた。
同類のキョウは間違いなく作っていると思ったが、大正解だったな。
『ふざけんな！　この程度の魔物！　俺が勝てないと思ったか！』
悪霊……ゴースト化したキョウが俺達に襲い掛かってくる。
もう目視できるな。どうやらもはや魔物の類と化している。

「ラフタリア、眷属器は肉体がないとさすがに作動しないみたいだぞ」
「そうですか。では……魂食いを素材にした刀とスキルで行きます」
襲い掛かってくるキョウを掴み、青白く光る刀でラフタリアが斬り伏せる。
「霊刀・断魂」
まだサクリファイス・オーラの効果は切れていない。
強化なしのゴーストの攻撃なんて、あってないようなモノだ。雑魚も同然。
「ガハ――俺は、最強に――転生し――……」
言い切る前にキョウは切り裂かれ、リーシアが呼び出した魂食いが飛び出して群がる。
咀嚼音が辺りに響き渡り、満足したらしき魂食いが俺達の周りを漂う。
新しい体に乗り移るのを転生とか、よく言うな。
「後はこの魂のない体を破壊すれば、霊亀の力は戻ってくるはずだ」
「はい！　やりましょう！」
「がんばる！」
「ふえぇええ……」
あ、気が抜けたのかリーシアが普段の情けない表情になったぞ。
俺も正直、ラースシールドⅣにはもう耐えられそうにない。
残った力を取り戻すように霊亀の心の盾に変えてから、ラフタリアとフィーロに命ずる。
「ここにある物を全てぶち壊せ！」
俺の命令に各々が力を込めて破壊活動を始めた。
これでコイツの研究が再利用されることはなくなるはずだ。
「……オスト、約束は果たしたぞ」
そう言って、俺はオストに思いに馳せた。

エピローグ　二つの世界の絆

キョウを仕留めて霊亀の力を内包した肉体を破壊したところ、残された霊亀の力が溢れ出して俺の盾の中へと収まった。
盾の中に全て収まるまで少しばかり時間が掛かったけどな。
その間に絆達は波を鎮めたようで、俺達のＬｖが元に戻ってしまった。
霊亀の心の盾の淡く光っていた水晶のような部分は、今はまばゆい光を放っている。

任務完了。霊亀の力を取り戻しました。
特例処理を完遂するための帰還時間……71：55

という文字が浮かび上がった。
どうやら完全に仕事を終えたみたいだな。
霊亀のエネルギーの奪還を終えた俺達はあと三日しかこの世界にいられないようだ。
おそらく時間が過ぎると強制的にあの世界に戻されるとかそんなところだろう。
「さ、さっさと帰るぞ」
「は、はい……」
「だるーい、おもーい」
ぐったりとした俺達は帰り道のことを考えて憂鬱になる。
「み、皆さん、ど、どうしたんですかぁ!?」
「呪いだよ。今の俺達にあんまり触るなよ」
若干中二が入った台詞だが、サクリファイス・オーラの副作用らしく、ステータスを確認すると能力がガクッと下がってしまっていた。
幸いなことに防御力だけは呪いの対象から外れているようだけど、全体的なステータスが低下している。
普段と比べて三割くらいまで落ちるってどんだけだよ。
これが俺だけならブラッドサクリファイスの時と同じなんだが、今回はラフタリアとフィーロも対象だ。こんな

状態じゃ、戦うのも一苦労だぞ……。

「帰り道にも魔物がいますよね……？」

「あー……そうだな」

正直、生きて帰れるか怪しいぞ。

時間までここで籠城するのも手か？

なんて思っていると、キョウが所持していた本の眷属器と鏡の眷属器が俺達の周りを漂っている。

その動きはなんていうか、感謝しているように俺は感じた。

新しい主を探して飛ぶとか、聖剣みたいに次の持ち主が現れるまでどこかに刺さっているとかじゃないんだろうか？

部屋から出ようとする俺達を案内するかのように先に浮かんでいる。

時に、移動しようとする部屋の扉を遮ったりもしているが、何だろうか？

なぜか、キョウの放った四聖獣コピーとは遭遇しないけどさ。

地下室から地上に向かって、警戒気味に元来た道を戻る。

「ポータルは使えるか？」

試しに使用するが阻害されていて使用不可能だった。

あまり動きまわるのも危険なので、ゆっくり移動して二時間ほど経過した頃だろうか。

鏡の眷属器が部屋に飾られた鏡に入って消える。

その直後――。

「な、尚文！」

絆達が揃って、なぜか鏡から出てきた。

鏡の眷属器が絆達を送り届けてくれたのか？

「突然俺達の前に鏡が出現して……ここはキョウの研究所？　キョウは⁉」

「はぁ……俺達が負けてたら今頃お前等はキョウと戦ってるだろ」

「そりゃそうだ。ところで大丈夫？　なんか疲れてるみたいだけど」

「禁忌の力を使用した代償で疲れてんだよ。あんまり言わせんな」

「だ、大丈夫なの？」

「大丈夫ではないな。全体的な能力低下でシャレにならない。絆達が来なかったら籠城でもして転移を待つことになりそう、とか考えていたところだ」

ぐったりしているとラルクが俺の肩を支える。

ラフタリアの方はテリスとグラスが補助してくれているようだ。

フィーロは身長の関係から絆とエスノバルトが補助してくれた。

「俺達がいない状況でキョウを倒したとは、よくやったぜ坊主」

「まったく、姑息な手ばかり使いやがって、仕留めるのに苦労した」

そこにヨモギが静かに尋ねてくる。

「キョウは？」

「あの部屋で死んでいる。もちろん、魂も仕留めたぞ。やはり予備の体を隠してやがった」

「そうか、せめて私の手で終わらせてやりたかったが……よくキョウを倒してくれた」

俺の周りを漂う本の眷属器が大きく円を描いた後、壁をすり抜けて飛んでいった。

「どうやら私達が合流するまで、本と鏡の眷属器がナオフミ達を守っていたようですね」

グラスが頷く。まあ、ここに来るまで時間が掛かるはずなのに絆達を転移させるという荒技をしてくれたのだから納得するしかない。

「ああ、やっぱりそうか。不思議と四聖獣コピーとか変な防衛装置を踏まずに済んだからな」

「侵入不可能の霧も今じゃ晴れてるみたい。だからこそ、すぐに駆けつけることができたんだけどね」

何から何まで……というか、キョウの束縛から解き放った礼というやつだな。

サービスが不十分などこかの盾とは大違いな、できた眷属器だ。

「じゃあ帰ろうか。任務達成の転移ってことは残り時間があるんでしょ？」

「ああ、ざっと……あと三日だな」

「そうか、坊主達ともう少しでお別れってことだな」

「まあな」

「こんな所で話をするのもどうかと思いますし、ワタシの船に乗って急いで帰りましょう」

エスノバルトが錫杖を鳴らして言う。
……お前、生きていたのか。
典型的な『ここは俺に任せて行け！』をかましたのにな。
まあ、普通に生きていた方がいいんだけどさ。
とはいえ、急いで帰るのは全面的に賛成だな。
正直、さっさと帰ってゆっくり休みたい。
戦いの連続だったからな。
異世界に来てから何度目の死闘かわかったもんじゃない。
俺達はすぐに移動を開始して、安全な国へと戻ったのだった。
到着と同時に鏡の眷属器もどこかへと飛んでいく。
新たな主を見つけに飛んでいったのか、はたまたどこかで聖剣のように岩にでも刺さるのだろうか？

ちなみにキョウが暗躍していた国との戦争に関しては、その日のうちにヨモギが国に戻り、キョウが非人道的な行いをしていたことを暴露。
その証拠としてツグミ達が招集され、挙句、本の眷属器が国の首都に姿を現して、俺達との戦いやキョウ自身の言葉を録音したものを再生するという離れ業をやってのけたとか。
しかもキョウ自身の死亡を以って技術力は大きく減退することになった。
まあ、決戦兵器として運用しようとしていた四聖獣のコピーがキョウの死亡と同時に暴走したらしいからな。その処理に追われているそうだ。
キョウの愛人共はキョウを信じようとしていたようだが、キョウの信者だったヨモギの言葉や数々の証拠を突きつけられて何も言えなくなってしまったとか何とか。
まだこの辺りの情報は錯綜しているが、結果的に大義名分を失った国は、支配下に置いていた国がこれ幸いにと反乱を起こし、かなりガタガタな状況らしい。
本、鏡、刀の眷属器をそれぞれ所有していたこの三国が、痛み分けとしてラルクが王をしている国と渋々同盟を組むことになるのは、俺達が現場にいなくても絆達の性格を見れば想像に難くない。

そんなごたごたよりも俺達の呪いに関してだな。
ラルクの指示で派遣されてきた治療師に診察してもらった結果……。
「重度の呪いですね」
ブラッドサクリファイスを唱えた時も似たようなことを言われた覚えがあるな。
元の世界に戻った時にまた湯治でもしていればすぐにでも――
「解呪するには、時間経過以外の手立てはないでしょう。軽く見て二ヶ月、ですが推定で三ヶ月は掛かるでしょうね」
「は？　ちょっと待てよ。呪いに効く温泉とか聖水とかで早く治らないのか？」
俺の質問に治療師は首を横に振る。
「そんな類の呪いとは一線を画しています。もしも完治する前に、再度同じような呪いを受けようものなら命の保証はありません」
なん、だと!?
まったく、キョウを倒すのにとんだ置き土産をもらっちまったじゃねえか。
ラフタリアもフィーロもぐったりしていて動きが悪い。
サクリファイス・オーラをもしもリーシアに掛けていたらとんでもないことになっていたぞ。
死んだんじゃないか？　咄嗟とはいえ、俺の勘は凄いな。
「うわー……状況的にしょうがないとは思うけど、とんでもないことになっちゃったね」
絆が他人事のように言いやがる。
本来はお前等がやらなきゃいけないことだろうが！
とは思うが、リスク覚悟で挑んだんだからしょうがない。
「呪いの武器に手を染めるとはこういうことですね……私達の世界の不始末を、よく収めてくださいました。感謝してもしきれません」
「グラス、そう思うなら二度とあんな馬鹿をのさばらせるんじゃないぞ。俺達の世界の守護獣は残り三体いるが、

また第二のキョウが出てきて乗っ取られたりしたらたまったもんじゃない」
「ええ、二度とこのようなことがないように、キズナ共々、世界のために戦っていきますよ」
「そうだな、まあ、さすがに坊主が帰還して霊亀の力を世界に返せばしばらくは大丈夫だろ」
「そうなのか？」
俺の問いにラルクはふんぞり返って頷きやがる。
「ああ、俺達の時も最初の守護獣を倒した後は、次の守護獣まで一時的に波は起こらなかったしな」
「俺が戻るまでに眷属器持ちに侵入されていたらそうはいかないだろ」
まったく、不安は晴れねえっての。
「まあまあ、波がないってことはしばらくは異世界から人が流入することはないから、心配も大分減るってことで安心するしかないね」
不安の種がないわけじゃないが……ま、さすがに俺を召喚した世界の連中も警戒を強めてるだろ。
霊亀が乗っ取られた件は、メルロマルクの女王経由で世界中に広まったと思うしな。
「じゃあ霊亀……残りは推測だが、鳳凰、麒麟、応竜ってところか？　その封印が全て解けるまではしばらくは問題ないか」
「じゃねえのか？　さすがに坊主の世界のことは俺達でもわからねえよ」
そうだな。ラルク達に聞いたってさすがにこれは答えようがない。
「第二のキョウが出てこないように祈るしかないな」
霊亀のエネルギーでどれだけ波が起こるのを抑えていられるかわからない。
それでも、その間に準備を整えておいた方がいいだろうな。
世界中で起こる波に対処できるだけの……軍や仲間達を。
グラス達の世界へ来て、波に対処するための様々な技術を見せてもらった。
これを真似しない手はない。
俺達の方の世界の波は、俺達がカバーできない範囲はフィトリアががんばっているみたいだが、少しでも俺達の負担を減らすためにも世界が一丸となっていくしかない。
これからすることを考えると若干憂鬱になってくるぞ。

しかも波でグラスみたいな奴と遭遇する可能性もあるんだからな。
いつ終わるかもわからない戦いだけど、やっていくしかないんだ。
その全てが終わった時、俺はさっさと元の世界に帰る。
これだけは譲れないな。
腐りきった世界で、せめてラフタリアが平和に過ごせる場所だけでも確保してから……な。
「それはそれとして坊主！　戦勝会をやろうぜ！」
ラルクが子供みたいなテンションで親指を立てて言った。
「お前という奴は……」
「まあ、いいんじゃない？　大きな戦いを乗り越えたし、戦争も回避できた。良いことずくめなんだから」
「ラフー！」
ラフちゃんが楽しげに二足で立ち上がってアピールする。
ま、確かにそうだな。
「はいはい。どうせ反対しても祝うんだろうから勝手にやってろ。俺達は休む」
「おうよ！　国の連中も戦勝ムードにそわそわしてたところだ。派手にやるぜー！」
なんて言いながらラルクは出かけていった。
よくやる。
そんなこんなで俺達は残り時間を絆達に同行して、大いに勝利の美酒に酔った……のか？　俺は酒で酔ったことはないがな。

いよいよ帰る時間が近づいてきた。
城の庭で帰る準備をしていると、絆、グラス、ラルクにテリス、エスノバルトやアルトにロミナ等、いろんな連中が雁首揃えて見送りにやってきた。
絆が手を上げて近づいてくる。
「なんだか尚文と会ってからあっという間だったね」
「実際、ひと月くらいか？」

「そんなもんか……短かったね」

「そうだな」

異なる世界の聖武器の勇者。本来は武器の制約で出会えない関係だ。

そう思うと、出会い自体が奇跡のように感じられるから不思議だな。

「世界は違えど共に世界のためにがんばっていこうね。オレ達は尚文達の世界と同盟を結びたい」

「あぁはいはい。お前もあんまり釣りに夢中になるなよ。同盟に関しちゃ口約束だな、こっちは破りようがないだろ」

俺自身は守ることしかできない。

グラス達の理屈だった波の謎は定義が揺らいでいる。

相手の世界を滅ぼせば世界が延命できるという話はかなり怪しいんだからな。

「尚文はあんまり人間不信をこじらせないようにね」

「うるせー」

「ラフタリアさん、尚文のことをよろしくね。オレにとってグラスがそうであるように、共に仲良くね」

「はい、そのつもりです」

「うん。フィーロ、この世界でいろんなお歌を覚えたから帰っても歌うね」

「フィーロちゃんも、リーシアさんも元気で」

「はい、とても勉強になりました」

絆は俺達にそれぞれ握手をしてから下がっていく。

次はグラスか。

「最初は敵同士、再戦して……今度は仲間として一緒に行動する。不思議なものですね」

「まぁな」

グラスはとても真面目な表情で俺を見た後、頭を下げる。

「行方不明だったキズナを助け出してくれてどうもありがとうございました。この先、何があろうと、この恩に報いるようにがんばっていきます」

「何か理由があって俺達と戦うことになっても、ちゃんとその理由を説明しろよ」

「そこから入るのですか？」

ラフタリアが突っ込みを入れてくる。

「何かが起こって状況が一変することもある。そういう時に理由がわからないまま戦うのもどうかと思うだろ？　せめて戦う時に納得する理由が欲しいんだよ」

今までなんでこんな目に遭うんだとか思うことが、それこそ星の数ほどあったんでな。

で、その会話に割り込んでくるのはお気楽、自称冒険者の若ことラルクベルクとテリス。

「そんなわけで坊主達とは仲良くやっていこうぜ。再会できる日を楽しみにしてんよ」

「できれば会いたくないがな」

もしもそんなことがあるとしたら波の時だろ。

俺達は波を鎮めないといけないのに、その波を楽しみにするってのはどうなのだろうか？

「ああ……ナオフミさんが作り出した宝石達が別れを惜しんでいます」

テリスが全身に装備してる俺が練習で作ったアクセサリーがなんかめっちゃキラキラしてる。

まぶしい！　やめろ光を当てるな！　気色悪い！

「ラルク、この三日間でコツは教えたからちゃんと練習して俺よりも腕を上げるんだぞ」

デコレーションされたテリスを見直してラルクは真剣な顔で何度も頷く。

「わかったぜ。じゃなきゃ坊主の世界との間に波が起こった時にテリスに逃げられちまいそうだ」

「……そこまで薄情な奴じゃないと思うがな」

まったく、お前の彼女はどうしてこんなにも面倒なんだろうな？

色々と助けてもらったけどさ。

「ラフタリアの嬢ちゃんも、フィーロの嬢ちゃんもリーシアの嬢ちゃんも元気にやっていけよ」

「はい、ラルクさん達もお元気で」

ラフタリアが代表してラルクと握手をする。

「そういや前々から思っていたんだが、若」

「坊主はまだ俺をそう呼ぶのか」

「……信長はラフタリアや女全般を『～の嬢ちゃん』と呼ぶが、それってその相手の子供を指すんじゃないか？」

「まー、そう聞こえなくもないかもね」
絆が同意する。
「ああはいはい。俺は年下を名前で呼ぶのに抵抗があるの！　かといってうちは女子供が多いからな、嬢ちゃんだけで区別できないからそう呼んでるだけだぜ。これでいいじゃねーか！」
まあ、変わった呼び方と納得するしかないか。
「それよりも人を変なあだ名で呼ぶんじゃねえよ坊主！」
「お前もな」
「はいはい、ナオフミも呼ぶんじゃねえよ」
「やっと理解したか、ラルク」
で、エスノバルトが俺の目の前にくる。
「キズナやグラス、ラルク達を救っていただき、ありがとうございます」
コイツ、俺に対して妙に親しげだと感じるのは気の所為……じゃないよな。
美少年で本性は大きなウサギ。完全にフィトリア枠で俺に対して妙に親しげ。
あ、フィーロが俺にくっついてきて、ラフちゃんが肩に乗る。
「むー」
「大丈夫ですよ、フィーロさん。そういう意味じゃないですから」
微笑を浮かべるエスノバルト。
こう……普段は凄く知的な奴に見える。
フィトリアとは別ベクトルで、これから能力を開花させるのだろうか？
「貴方と一緒に戦った経験を無駄にしないようにがんばっていきます」
「ああ、がんばれよ」
俺が答えるとエスノバルトはリーシアの方を向く。
「リーシアさん、貴方の活躍を聞きました。ワタシもリーシアさんのようになれるよう努力を続けます」
「ふえええええ……」

リーシアの奴が照れている。
きっと褒められた経験があまりないんだろうな。
「迷宮古代図書館で見つかった写本も持っていってくださって結構です。お役に立つことを祈っています」
「はい！　がんばります」
ま、インテリのリーシアなら解読できるかもしれない。
「それと……」
エスノバルトは俺に船の眷属器に付けていた小さなイカリみたいなアクセサリーを持たせる。
「なんだ？」
「この前見つけた書物に書いてあったアクセサリーです。お持ちください。もしかしたら……役に立つかもしれません」
「そうか……」
まあ、くれるモノならもらっておく。
「もらえるモノなら何でも受け取る。さすがは商人だね」
「そうだな。俺は商売に関しちゃうるさいぞ」
「あの、商人ではなく勇者ですよ、ナオフミ様は」
ロミナとアルトとの会話にラフタリアが割り込む。
「とりあえずこれ、餞別」
そう言って、ロミナとアルトは俺に様々な物が入った袋をよこした。
中を確認すると、この世界独特の発明品であるドロップ機能のあるアクセサリーや皮での転移を再現したアクセサリーが入っているようだった。
他にも色々とあるっぽい。
こういう異文化の品は確かにあの世界に戻った時に大いに役に立つ。
「それとなくいろんな物を懐に入れていたのは知ってるからね。他にもと思ってさ」
ロミナには看破されてしまっていたか。
アルトの方は、好意で何かくれるなんて違和感しかないが。

「なんか僕のことを守銭奴だと思ってるみたいだけど違うからね」
「嘘だね」
「ええ、嘘ですね」
絆とグラスに揃って指摘されたぞ。
だが、アルトも引かない。
「君がいろんなところをひっかきまわしてくれて、こっちはある程度儲けが出たんだ。そのお礼だと思ってよ」
「ああ、そういうことね」
奴隷商みたいに俺の活躍で儲けが出たか。
アルトは一応、守銭奴商人と呼ばれているからな。商売に関してはわかってるみたいだ。
「ああ、そうそう。グラス」
俺は日本語で書かれたレシピ集をグラスに手渡す。
「これは？」
「ああ、この世界の道具とかいろんな物を分析してみた結果を纏めて、再現できるものをレシピに書き起こしてみたものだ。絆に読んでもらえ」
そう、いくら俺であろうとも未知の土地で無計画に右往左往していたわけじゃない。
文字化けして効果を発揮しない装備とそうではない品々との違いを纏めてみたのだ。
おそらく、この世界に存在しないもの、再現できない鉱石などで作られたものは文字化けする。
そして、魂癒水のような道具が普通に使用できる。
つまり、この世界の素材でも魂癒水は作れるだろう。
ここから先の戦いで魂癒水はまさしく湯水のように必要になってくるだろう。
そのため、それを再現するレシピを作った。
「似た効果がある薬だ。作ってみるんだな」
「へー……尚文もなかなか凄いね」
「年中釣りばっかりしてないで多少は研究しろ。まあ、その薬を再現するのに魚が必要だから、お前もがんばれよ」
この世界で魂癒水に似た効果を出すには、ある珍しい魚が必要だ。

俺も絆が嬉しそうに釣ってきた魚を分析して驚かされたんだからな。
「うん！　がんばるよ！」
「こっちの世界にいる逃亡中の四聖を死なせないようにな」
「う……そうだね。やっていくしかないよね」
お互い大変だよな。俺と絆は握手をする。
「あと、アルトの目には気を付けるように」
目を光らせてるからな。
後は……ヨモギとかツグミ等、取り巻き連中だな。
「キョウが申しわけないことをした。後の始末は任せてくれ」
「それは絆にでも言うんだな。俺はアイツに報いを受けさせた。他の連中と一緒の……魂すらも仕留めたからな」
「ああ……」
ツグミはまだ俺達を恨みがましい目で見てはいるが、前よりも柔らかくなっている気がするな。
「お前達が来なければこんなことにはならなかった」
「もう会うことはない。一生俺達を恨んでいればいい」
まったく、嫌味を言うために来たのかお前等は。
「だが、お前達に救ってもらったのもまた事実。死してなお利用されていた――を解き放ってくれて……ありがとう」
風が強く吹いて、やはりクズ二号の名前が聞き取れなかった。
もう名前を聞くのは諦めた方がよさそうだ。
改めて聞き直したらツグミが怒りそうだし、どうせまた聞き取れない。
ラフタリアに後で聞けばいい。
「どうして刀の眷属器にあそこまで執着していたのか、明らかになる時が来るのだろうか……？」
「そういえば、お前等の取り巻きにいなくなったスピリットの話があったな」
「……」
ツグミは無言で頷いた。

キョウの屋敷にある地下室の一角で死体の一部が発見された。

やはりクズ二号の魂はキョウに先回りされて、魂食いの餌にされてしまったらしい。

そして、その事実を知るクズ二号の取り巻きのスピリット共は皆殺しにされていたという話だ。

多大な犠牲が出ているわけだな。これは鏡の眷属器の所持者であるアルバートも変わらない。

「刀の眷属器が国の要であるのは確かだが……なぜ自分が選ばれると確信を持っていたのか、私達にはもはや知る術はない……」

そこでラフタリアは刀の眷属器を横に添えて絆達に見せる。

「あの……この眷属器をお返しします」

ま、そうだよな。いくらラフタリアが選ばれたからといっても、異世界の眷属器をそのまま持って帰るわけにはいかないだろ。

一時的だが俺達には大きな助けになった武器だがな。

「とはいうけど……離れる気配が全くないね」

「波の召喚も拒んだみたいですし……」

グラスや晶人のテリスが刀に触れて語りかけるが、刀の眷属器は応じることはなかった。

絆も触れてみたけど何も起こらない。

「……無理ですね。なんといいますか、責任感と何か複雑な事情があるようで、応じる気配がありません」

「明確な意志とかわからないのか？」

「あくまで意図しているものを聞き取る程度しかできないので」

へー……ということは、この武器はこのままラフタリアが持ち帰ってもいいということか？

「もしかしたらキョウの蛮行の責任を取って、尚文達の世界のために戦おうとしているのかもね。こっちの世界が本当に危険になるまでさ」

と、絆が言うと刀が一瞬光ったように見えた。

「どうやらキズナの言ったことが正しいようですね」

「ふむ……」

なんて話をしていたら帰る時間が近づいてきていた。

もう少しで完全に帰還する時間になる。

「よし」

俺は邪悪そうな笑みを浮かべ。

「では刀の眷属器はいただいていく！　お前等、そこで悔しげに呻いているがいい！」

「あー、また悪ぶってる」

「坊主はアレが癖だな」

「本当はいい人なんですよ」

絆達がなんか呆れ気味に俺を分析しやがる。

ラフタリアはやれやれとばかりに呆れていて、フィーロは首を傾げている。

リーシアはオタオタ、キョロキョロしていて、ラフちゃんは俺の肩に乗って絆達に手を振っている。

「さて、じゃあ本格的にお別れだ」

あと数十秒で残り時間がなくなる。

そうなったら俺達は元の世界に召喚されて帰るのだろう。

「武器の性質上、もう会えないだろうが、一緒にいて少しは楽しめた。じゃあな」

「うん。さようなら。尚文、助けてくれてありがとう。君がいなかったらオレはまだあの迷宮内に閉じ込められていたと思う。世界こそ違えど、共に勇者としてやっていこうね」

俺達はそれぞれ手を振って、別れる。

「ナオフミ」

ラルクが大きな声を出し。

みんなが揃って手を振って、一斉に告げてくる。

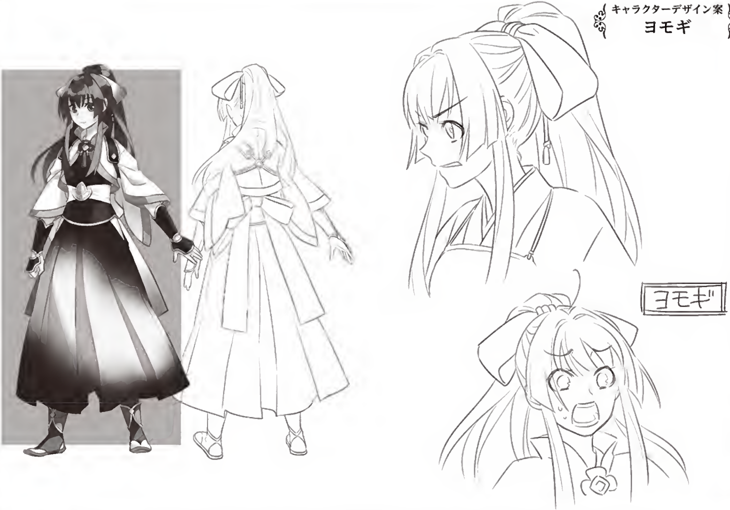
「「ありがとう！」」

そう聞こえ、応じるよりも前に俺達の残り時間が０になり、元の世界に転移してしまった。

行きは変な光るトンネルを通ったが、帰りは一瞬か……。

こうして俺達は、元の世界に戻ったのだった。

キャラクターデザイン案
ヨモギ



キャラクターデザイン案
アルトレーゼ





著者プロフィール

アネコユサギ

Aneko Yusagi

神奈川県出身。ゲームと読書好きが高じて、小説を書き始める。
「盾の勇者の成り上がり」を執筆し、ネット上に作品を公開。
作品発表後、連日欠かすことなく更新することで病み付きとなる読者が続出し話題となる。２０１３年８月ＭＦブックスから商業デビュー。
「書籍化によって頂いている期待に応えられるよう頑張ります！」と語る。

企画
株式会社フロンティアワークス　メディアファクトリー
担当編集
堤　由惟／今井遼介／大原康平（株式会社フロンティアワークス）
ブックデザイン
ragtime
イラスト
弥南せいら

本書は小説投稿サイト「小説家になろう」（http://syosetu.com/）初出の作品を加筆の上書籍化したものです。

盾の勇者の成り上がり　9

2015 年 1 月 31 日発行　ver.1.0

著者　アネコユサギ
発行者　三坂泰二
編集長　金田一健
発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
〒 102-8177
東京都千代田区富士見 2-13-3
03-3238-8745（営業）
編集　メディアファクトリー
0570-002-001（カスタマーサポートセンター）
年末年始を除く平日 10:00～18:00 まで

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
ＭＦブックス
盾の勇者の成り上がり　9
発行日　2015 年 1 月 31 日　初版第一刷発行


盾の勇者の成り上がり 9
アネコユサギ
Aneko Yusagi
MFブックス


盾の勇者の成り上がり
9
アネコユサギ
Aneko Yusagi


人物紹介
盾の勇者の成り上がり 9
キョウ
ラルクベルク
テリス
フィーロ
グラス
ラフタリア
風山 絆
岩谷 尚文
ヨモギ


「運命という物があるのでしたら、
私は貴方の道を阻む為にここに居るのです！」







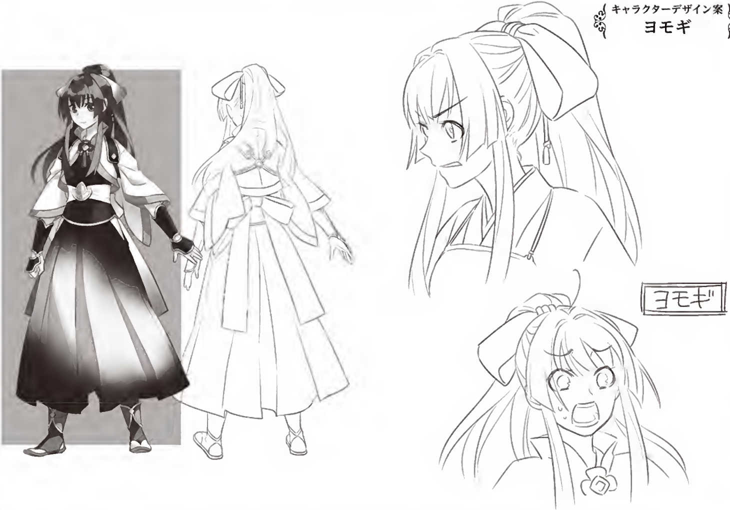








キャラクターデザイン案
ヨモギ



キャラクターデザイン案
アルトレーゼ





